

学位論文

「個」と「関係性」からみた
青年期のアイデンティティ様態

広島大学大学院教育学研究科
教育人間科学専攻

山田 みき

目次

第 1 章	本研究の背景と目的	1
第 1 節	アイデンティティ研究への 「個」と「関係性」概念の導入	1
第 2 節	Erikson 理論を応用した 生涯発達に関する複線モデル	6
第 3 節	本研究の目的	16
第 2 章	アイデンティティにおける「個」と 「関係性」を測定する尺度の作成	18
第 1 節	項目選定と信頼性の検討（研究 1-1）	18
第 2 節	信頼性と妥当性の検討（研究 1-2）	30
第 3 章	「個」と「関係性」からみた青年期の アイデンティティ様態の質的分析	41
第 1 節	アイデンティティ様態の抽出（研究 2-1）	41
第 2 節	4 様態の対人関係にみられる特徴の分析 （研究 2-2）	47
第 3 節	4 様態の進路選択過程にみられる特徴の 分析（研究 3）	94
第 4 章	総合考察	112
第 1 節	本研究の成果	112
第 2 節	本研究の限界と今後の課題	118
引用文献		123
付録		131
謝辞		

第1章 本研究の背景と目的

第1節 アイデンティティ研究への「個」と「関係性」概念の導入

1. アイデンティティ概念

アイデンティティとは、Erikson (1950 仁科訳 1977/1980) が提唱した、人間の心理・社会的発達を捉える概念であり、“自己の単一性、連続性、不変性、独自性の感覚” (小此木, 2002) を意味する。Erikson (1950 仁科訳 1977/1980) は、アイデンティティを“幼児期以来形成されてきた様々な同一化や自己像が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、斉一性と連続性を持った自我の状態”とし、青年期の心理・社会的課題として、このアイデンティティの確立を挙げた。青年期以前の各発達段階における課題への取り組みを終え、青年期に至ってはそれらを統合して自己を社会に位置づけることが求められる。

アイデンティティの確立とは、“変化することのない絶対的な個としての実態の認識”を持つことであり (鏞・山本・宮下, 1984), この認識は、主観的側面と客観的側面、個人的側面と社会的側面を同時に有する。すなわち、「自分は自分である」という自信を持っており、そのような自分が社会の中で様々な位置づけられ方をしても揺るがないこと、そのような認識を自らが持つと同時に、それが周囲からも保障されていることが含まれる。

2. 初期のアイデンティティ研究

鏞他 (1984), 鏞・宮下・岡本 (1995a, 1995b, 1997, 1998, 1999), 鏞・岡本・宮下 (2002) のアイデンティティ研究に関する一連の展望資料を

参照すると、過去のアイデンティティ研究は、①アイデンティティの測定を目指したもの、アイデンティティの形成過程を明らかにしようとしたもの、アイデンティティ・ステータス (Marcia, 1966) に関するものなど、アイデンティティそのものに焦点を当て明らかにしようとした研究、②アイデンティティと他の変数 (外的状況や他の心理学概念) との関連を検討した研究、③職業アイデンティティや民族アイデンティティなど、個人に付随する特質に対する意識について検討した研究、④アイデンティティの病理について考察した研究の大きく 4 つに分類される。

概念の提唱以降、アイデンティティ研究は、研究対象や研究方法の多様化に伴い、研究領域の裾野を広げてきた。これまでは、アイデンティティの確立が青年期の重要な心理・社会的課題とされてきたこともあり、アイデンティティは、青年期を対象として、主に発達心理学や臨床心理学の分野で取り上げられることが多かった。

初期のアイデンティティ研究の中で、以後のアイデンティティ研究に多大な影響を及ぼしたとされるのが、Marcia (1966) によって提唱されたアイデンティティ・ステータス論である。アイデンティティ・ステータスとは、Marcia 法と呼ばれる半構造化面接により同定される、アイデンティティ達成、モラトリアム、予定アイデンティティ、アイデンティティ拡散という 4 つのアイデンティティ様態である。Marcia (1966) は、アイデンティティを獲得に向かう直線的なものとして捉えるのではなく、その状態の多様性に目を向けた。その後、この画期的なパラダイムは、アイデンティティに関する実証研究において優れた手法とされ、各々のステータスの背景要因や発達の側面、性差など多岐に渡って検討が重ねられてきた。

近年のアイデンティティ研究の多くも、Marcia (1966) と同様に、達

成—未達成という単一次元ではなく、アイデンティティの多様な状態を捉えようとする傾向にある。この視点は特に、昨今の複雑な社会のあり様を踏まえて一人の人間のアイデンティティを捉えようとする際に、重要になると考えられる。現代社会においては、アイデンティティの達成・確立そのものの状態像にも幅があることが推測され、その多様性を説明することのできる、アイデンティティを捉える視点を明らかにすることが求められる。また、アイデンティティ・ステータスは発達に伴い変化していくことが報告されており（Waterman, 1982 など）、上述のようなアイデンティティを捉える視点についても、視点自体の検討に続き、発達の变化に関しても検討していく必要がある。

3. 「個」と「関係性」の視点の導入

近年のアイデンティティ研究では、アイデンティティの多様性に目を向けるとともに、アイデンティティを青年期のみに関わるものとして取り上げるのではなく、ライフサイクル全体を視野に入れてその発達を捉える研究が増加し、注目を集めている（岡本, 1986, 1995, 1997, 1999, 2002, 2007 など）。この背景には、長寿化・少子化などのライフサイクルの変容に代表される現代社会の大きな変化と、それによる成人期以降の発達への関心の高まりや、生涯発達心理学の進展がある。

このような動向の中、1980年代以降には、研究対象を女性に絞ったアイデンティティ研究も散見されるようになってきた。こうした研究は、現代社会の変化に伴う、女性のライフ・スタイルの変化やジェンダー問題などを背景に進展してきたと考えられる。この先駆けとなったのが、Josselson（1973）と Gilligan（1982 岩男監訳 1986）である。

Josselson（1973）は、48名の女子大学生に対して半構造化面接を実

施し、女性のアイデンティティ形成の心理力動的考察を行った。その中で、“女性におけるアイデンティティの確証は、重要な他者の反応に依存している”ことが見出され、女性は、対人関係能力を自分のために価値付け、また様々な人々とうまくやっていくことで、自律の感覚を得るという結論が導かれた。また、Gilligan (1982 岩男監訳 1986) も、青年期のアイデンティティや道徳性に関する研究の中で、“女性は他人との関係を通して自分が他人に知られていくうちに、自分を知るようになるということからも分かるように、親密性は女性のアイデンティティ形成に伴っている”と述べている。Josselson (1973) も Gilligan (1982 岩男監訳 1986) もともに、女性のアイデンティティが男性のアイデンティティと質的に異なっていること、そしてその形成過程においても相違がみられることを指摘した。

他にも、Halpen (1993) は、青年期女性に対して、アイデンティティ・ステイタス面接と Subject-Object Interview を実施し、“女性のアイデンティティ発達には、関係からの分離よりも、むしろ関係の中での個体化の過程を含む”と結論付けている。つまり、女性は重要な他者とのつながりを維持し、その中で葛藤に直面することを通して自己を確立していくという、他者との関係の中での個性化のプロセスが示された。

アイデンティティ発達における性差に着目した Hodgson & Fisher (1979) は、大学生を対象にアイデンティティ・ステイタス面接と親密性ステイタス面接を行い、男女それぞれのアイデンティティ発達の過程を比較検討した。その結果、女性のアイデンティティ発達は、男性と比べて、遅れているのではなく、異なる経路に従っているという結論が導き出された。

以上のように、女性のアイデンティティ発達は、男性とは異なり関係

性の中で進むという見解がいくつか報告されてきた。それにより、アイデンティティ発達における対人関係への着目がなされるようになった。そして、こうした研究の積み重ねにより、“個人内領域（男性）－対人関係領域（女性）という 2 分法”（杉村, 1998）でアイデンティティを理解する図式が導かれた。しかし、その後の研究や女性を取り巻く社会環境の大きな変化によって、この 2 分法的な見方の見直しが迫られるようになってきた。

例えば高橋（1988）は、アイデンティティ達成と親密性の危機解決に関する性差について検討し、次のように述べている。女性は男性より一般に親密性の形成が進展しているが、女性のアイデンティティ高群が低群より親密性ステータスが高いことから、女性においても親密性の成熟にアイデンティティの確立が必要と考察している。つまり、Hodgson & Fisher (1979) が言及しているように、男女のアイデンティティ発達が、それぞれ異なる経路に従っている可能性はあるものの、親密性や対人関係能力は、男女を問わず青年一般のアイデンティティの発達・形成に伴うものであることを示した。

こうして、現在では、男女の差異を強調した女性の心理的発達ではなく、性別に関わらずアイデンティティを捉える際に共通する要素としての関係性の観点を含むことの有用性が示されている（Archer, 1993; 杉村, 1998 など）。アイデンティティ発達における関係性への着目は、性差の検討を経て、男性のアイデンティティの在り方をも捉え直すことに寄与したと言える。すなわち、現段階では、アイデンティティ形成における「関係性」の概念がより重視され、男女ともにアイデンティティ発達の基盤にあるものとして捉えられるようになっている。これにより、アイデンティティおよびアイデンティティ形成における関係性の視点へ

の関心がさらに高まり、「個」と「関係性」からアイデンティティを捉える試みがなされ始めた。

第2節 Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線モデル

1. 生涯発達に関する複線 (two-path) モデル

アイデンティティを「個」と「関係性」から捉えることを試みた代表的な研究に、Franz & White (1985) が挙げられる。彼女らは、Erikson (1950 仁科訳 1977/1980) の唱えた精神分析的個体発達分化の図式の成人前期 (第VI段階) と成人中期 (第VII段階) の説明が不足していることを指摘した。そして、一方で、Erikson (1967 岩瀬訳 1982) が内的空間説を提唱していることを踏まえ、精神分析的個体発達分化の図式に関する記述にみられる性差についての Erikson (1950 仁科訳 1977/1980, 1967 岩瀬訳 1982) の考察を再検討し、アイデンティティ発達にアタッチメントの観点を加える必要があると結論付けた。そして、第VI段階の親密性と第VII段階の世代性も他の段階の心理-社会的課題と同様に、その基本的なテーマは発達の初期から存在するという Erikson (1950 仁科訳 1977/1980) の考えに基づき、彼女らは、アイデンティティ発達におけるアタッチメントの成人前期までのプロセスの精緻化を行った。まず、Erikson (1950 仁科訳 1977/1980, 1967 岩瀬訳 1982) による各段階の記述を検討し直し、精神分析的個体発達分化の図式の第7行 (他の段階での世代性の感覚) と第7列 (世代性の先駆) を埋めた。そして最終的に、“個体化経路”と“アタッチメント経路”からアイデンティティ発達を捉える“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル” (Figure 1-1) を理論的に提唱した。

	乳児期	幼児前期	幼児後期	学童期	青年期	成人前期	成人中期	老年期
個体化経路	信頼 対 不信	自律性 対 恥と疑惑	自発性 対 罪悪感	勤勉性 対 劣等感	アイデンティ ティ 対 アイデンティ ティ拡散	職業及びラ イフ・スタ イルの模索 対 漂流	ライフ・ スタイル の確立 対 空虚	統合性 対 絶望
アタッチメント経路	信頼 対 不信	対象及び 自己の 恒常性 対 孤独と 無力感	遊戯性 対 受身性 または 攻撃性	共感と協力 対 過度の 警戒ま たは圧力	相互性・ 相互依存 対 疎外	親密性 対 孤立	世代性 対 自己陶醉	統合性 対 絶望

Figure 1-1. Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル (鑑他, 1998, p.109, 図 3-2)

このモデルは、Mahler, Pine, & Bergman (1975 高橋他訳 1981) などの対象関係論や Selman (1981) の対人関係的コンピテンスに関する記述を参考にして作成されており、既存の課題のうち、親密性（第VI段階）と世代性（第VII段階）は“アタッチメント経路”に組み込まれ、“アタッチメント経路”の他の段階の課題と、“個体化経路”の第VI, VII段階の課題が新たに設定されている。それぞれの経路は、自分自身への信頼や自律性を核に、個人としての自己の確立に向かう「個」の側面と、自己を取り巻く世界への信頼感や自他の分化と関わりを核に、他者との相互的な関係の確立に向かう「関係性」の側面であり、このモデルでは、それらの発達過程が示されている。Franz & White (1985) によると、この2つの経路は“独立してはいるが相互に関係を持つ”要素であり、“より糸”と表現されている。

“アタッチメント経路”に新たに設定された課題について、以下に述べる。まず、幼児前期では、“対象及び自己の恒常性”が課題とされ、この時期に、個人が分離し自律的になっていくために、愛情対象との新たなアタッチメントが形作られるとされる。ここでの新たなアタッチメントとは、母親表象へのポジティブなアタッチメント、母親表象の良い・

悪い要素の統合，現実の母親と精神内界の母親イメージが，ともに快や愛情を与えてくれる状態にあることの3つを指す。幼児後期では，“遊戯性”が課題とされ，他者を心理的に独立した存在として認知できるようになるとされる。学童期では，“共感と協力”が課題とされ，他者を自律的で相互依存的関係を持つ存在としてみることができるようになるとされる。青年期では，“相互性・相互依存”が課題とされ，それ以前の段階で培われた他者存在の認識を土台に，他者との相互関係を円滑に進める種々の能力を獲得し，自己と他者の両方の感情に配慮して行動を起こすことができることとされる。そして相互関係を築くことが可能になることが，成人前期の親密性や成人中期の世代性という他者との新たな形の関係の基礎となると述べられている。

この Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデルは，成人前期と成人中期の課題をより精緻にアイデンティティ発達の中に組み込んだものであり，これまでアイデンティティ研究者がしばしば見落としがちであった関係性の観点が，アイデンティティ発達において持つ重要性を明らかにしたと考えられる。そして，Erikson が，人間発達における他者や社会との関係を重視しながらも十分記述し得なかった側面，つまり，他者との関係の中で個人が培う関係性に関わる特質や能力を，このモデルは明確にした。Franz & White (1985) の試みは，実証的な検討はなされていないものの，今後のアイデンティティ研究に新たな展開を生む重要な研究であると考えられる。

本邦においても，岡本(1997)が類似の立場からの見解を示している。岡本(1997)は，成人期のアイデンティティを捉える枠組みとして，「個」と「関係性」の視点の重要性を述べている。岡本(1997)は，“個としてのアイデンティティ”と“関係性にもとづくアイデンティティ”の2

つの観点を提出し、それらが同等の価値を持ち、互いに影響を及ぼしあいアイデンティティを支えていると述べた。つまり、アイデンティティにおける「個」と「関係性」の側面は、それぞれ別の特質を持つ発達経路を経て発達すると捉えており、“個としてのアイデンティティ”と“関係性にもとづくアイデンティティ”は、Franz & White (1985) のいう“個体化経路”と“アタッチメント経路”に相当すると考えられる。

Franz & White (1985) と岡本 (1997) が、「個」と「関係性」はアイデンティティ形成において同等の価値を持つ2つの側面であると主張しているのに対し、Josselson (1994) は、アイデンティティ発達における「関係性」の文脈をより重視している。彼女は、アイデンティティの形成過程にみられる関係性の在り方を総合的な見地から検討し、アイデンティティ形成の根底にある自己と他者の間の関係の8つの次元、①抱きかかえ／しがみつき (holding), ②愛着 (attachment), ③情熱的な経験 (passionate experience, libidinal connection), ④目と目による確認 (eye to eye validation), ⑤同一化 (identification), ⑥相互性 (mutuality), ⑦埋めこみ (embeddedness), ⑧慈しみ／ケア (tending, care) を見出した。この研究では、“個体化は、見直された関係性とアイデンティティの統合に通じるコミットメントによって再び達成される”として、アイデンティティ形成において「関係性」を「個」の達成を支える土台になるものと位置づけている。本邦においても、杉村 (1998) が、「関係性」の側面を、アイデンティティ形成を推し進める原動力と考え、Josselson (1994) と同様の立場を示し、検討を行っている。

アイデンティティを「個」と「関係性」の視点から捉える際に、この2つの視点をどのように位置づけるのかについては、現段階で研究者間に相違がみられる。

鑪（1974）は、臨床事例をもとにアイデンティティ危機の様態に関する考察を行う中で、危機状態の特徴として“対人関係的距離の定位困難”を挙げている。アイデンティティ危機に陥った青年に、“他人に対して、自分という主体を実感できない”という問題がみられることを指摘し、“自己が他人との関係の中に、対人関係という土壌の中にはっきりと根付くこと、その土壌の中から、何よりも自分の芽を出していることの実感のあることの重要性”に言及している。つまり、ここで鑪（1974）は、自己を根付かせる土壌である対人関係と、そこから“自分の芽”を出している個人としての実感の両方が重要であるとしている。この指摘を踏まえると、アイデンティティを捉える「個」と「関係性」の視点は、Franz & White（1985）や岡本（1997）の指摘するように、相互に独立してはいるが、互いに影響を及ぼしあう、同等の価値を持つ2つの側面と捉える方が妥当であると考えられる。

また、アイデンティティ論に「関係性」の観点を加えることは、より心理臨床的にアイデンティティ概念を論じる一助になると考えられる。すなわち、「関係性」の観点を加えることで、青年が他者との関係の中で、どのようにアイデンティティを形成していくのかが明らかになり、それに基づく青年理解と援助が可能になると考えられる。青年理解においては、Franz & White（1985）のモデルに示されるような、自他の恒常性や分化、相互関係を持つことができるかどうかなど、アイデンティティ形成に関わる「関係性」の側面のアセスメントにつながることを期待される。また、援助においては、青年が語る他者との関係をどう理解し聴くか、さらに、面接者との間で青年がどのような関係を結び、そこでアイデンティティ形成に関わる作業をどのように進めるかということにつながる考えられる。

2. 青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉える試み

「個」と「関係性」からアイデンティティを捉えようとしたこれまでの研究の多くでは、成人期のアイデンティティに焦点が当てられてきた。しかし、従来からアイデンティティの確立が課題とされる青年期についても、「個」と「関係性」の視点の導入は有用であると考えられる。

杉村（2001）は、青年期のアイデンティティ形成を「個」と「関係性」から捉える試みを行っている。その中では、アイデンティティ形成を他者との意見の相互調整による模索の過程として捉えており、自己と他者の視点の認識によって「関係性」のレベルを規定している。しかし、青年期におけるアイデンティティの形成・確立を、それまでの様々な同一化対象を能動的に取捨選択し、秩序付け、統合する過程（小此木，2002）と捉えるならば、アイデンティティを捉える「関係性」の視点とは、認識や認知を前提とした、個人の持つ他者との関係を結ぶ力を表すものと考えられる。上述の Josselson（1994）に対する杉村（1999）自身の指摘にもあるように、アイデンティティ形成においては、“他者との豊かな結びつきを維持する個人の能力が問われる”のではないだろうか。

これに関しては、鏑他（1984）は、臨床心理学の見地から、“対人的・心理的な距離を保つ能力”という言葉を用いている。また、一丸（1975）も、面接事例からアイデンティティ混乱の臨床像を明確にする中で、その特徴として対人的距離を挙げ、“極端に離れてしまい孤立するか、逆に相手の中に埋没するかのどちらかであり、その適切な距離が保てない”と記述している。

アイデンティティ形成における他者との距離の取り方に関しては、上記の事例から得られた知見以外にも、青年に普遍的にみられる問題として指摘されてきた。特に、青年期を第二の分離・個体化期（Blos, 1962 野

沢 1971) として捉えた研究において、多くの示唆が得られてきた。

乳幼児期における分離-個体化が、乳幼児が母親表象を内在化し、対象恒常性を確立するまでの過程であるとする、Blos(1962 野沢 1971)の言う第二の分離-個体化過程とは、親からの精神的な自立、つまり依存的な結びつきから離れることを通して、「個」を確立していく過程である。この過程で、乳幼児期に一旦確立された自己表象と他者表象がそれぞれ安定性を獲得し、青年は幼児期に内在化された両親像から離脱し、家族外に新たな対象関係を作り上げるとされ(森田, 1998)、これは上述したアイデンティティの「関係性」の側面の発達と関わるということが推測される。

また、同様の発想は、Jacobson (1964 伊藤 1981) の記述の中にもみられる。Jacobson (1964 伊藤 1981) は、アイデンティティ形成を第二の分離-個体化の過程として捉えた上で、アイデンティティとアイデンティティ感覚の確立により得られる“二重の資質”に言及している。この資質とは、“環界と個人的かつ社会的相互関係、相互適応、相互満足および相互欲求充足の状態の中で生きることができる”ことと、“人間の個人的自由と生存、そして環界の中での彼の集団や種族の生存のために、必要なら闘争に訴えてまでも自己主張することができるようになる”ことであり、それぞれアイデンティティの「関係性」と「個」の側面の成熟した形と考えられる。このことから、「個」と「関係性」の視点は、古くから精神分析理論の中で取り上げられてきたことがうかがえる。

他にも、青年期のアイデンティティ形成のプロセスと、乳幼児における分離-個体化の過程との類似性に直接的に言及した Brandt(1977)は、再接近期から個体化の達成までを、それまでの同一化対象(両親、幼児的親表象)から手を離し、新たな同一化対象(家族以外の他者、現実の両親を反映する新たな親表象)の手を取ることができるようになる過程

と捉え、離れることの難しさを述べている。そして、最終的には、個体化とアイデンティティの達成は、内在化された対象を放棄するだけでなく、両親を現実の人間として見、新しい様式で関係を形成・維持することと結論付けている。

分離・個体化の過程とアイデンティティ形成のプロセスとを対比させた論考においては、特に両親との関係に着目されているものの、青年期以前とは異なる、対象との距離の持ち方や維持の仕方という点では、アイデンティティにおける「関係性」の側面と類似すると考えられる。

アイデンティティを確立する、つまり自己表象を明確で納得のいくものにしていくためには、良いと思う他者の特性を自己表象に取り込んだり、自己表象にそぐわない他者の特性を切り離したりする必要があると考えられる。つまり、「個」と「関係性」からアイデンティティを捉える際、「関係性」の側面には、上述した内的・外的に他者と関係を結び維持し、時には切り離すことの出来る能力が含まれることが求められる。

一方、アイデンティティにおける「関係性」の側面を上述のように捉えるとすると、「個」の側面とは、鑪（1974）の言う“自分の芽”を作り伸ばす力と考えられる。また、Franz & White（1985）に基づくと、自律性や勤勉性など、自分の身体運動的な側面に対する統制力や発動力に収斂される。

以上のように、青年期のアイデンティティを捉える視点として「個」と「関係性」を用いることは、古くから理論的な研究は進められ、その有用性が示唆されているものの、実証研究の次元では未だ導入段階である。実証的検討を進めるためにも、まずは、信頼性と妥当性を有する青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から測定する尺度を作成することが重要と考えられる。

3. 青年期の「関係性」に関わる研究

上述したように、アイデンティティの確立には、個人的側面に加え社会的側面も重要であり、青年期のアイデンティティを「個」だけではなく、「関係性」の視点からも理解することは有用と考えられる。以下に、青年期の「関係性」に関わる先行研究を概観する。

現代社会では、急速な社会の変化に伴い、他者との関わりは浅く広く、そして複雑なものになってきている。自己を保障してくれる安定した関係が結びにくいこのような社会の中では、青年が自己を確立するということは、困難にならざるを得ないことが容易に推測される。伊藤・宮下（2004）は、個性の尊重や自分らしさの発揮などに代表される日本の西欧化・個人主義にみられるネガティブな側面に着目し、その中にいる現代の青少年を、“関係性を求めながらも、その関係で傷つき、またその傷を癒すために関係を希求していく”姿として捉えている。

青年期の対人関係を扱った研究は、これまでに数多くなされている。対人関係のうち、友人関係を取り上げた研究は、落合・竹中（2004）によると、構造研究、関連研究、発達研究の3つに大別され、様々な角度から検討が行われている。友人関係そのものを検討した研究は、上記のうち構造研究に属するが、その中には、特定の要因に注目して青年の持つ対人関係の類型化を試みたトップダウン型の研究と、実際の友人関係を収集・分類して類型化をみたボトムアップ研究とが含まれる。後者の代表的な研究である岡田（1993）や落合・佐藤（1996）、長沼・落合（1998）では、青年期の友人関係を、“友人関係様式”（岡田，1993）や“つきあい方”（長沼・落合，1998；落合・佐藤，1996）という観点から検討し、青年の友人との関係の持ち方を包括的に捉えている。落合・佐藤（1996）と長沼・落合（1998）では、“友人との付き合いの深さ”の次元が重要

な心理的要因として指摘され、岡田（1993）を再検討した岡田（1995）では、現代青年の友人関係の特質として、“表面的な楽しさを求める傾向”、“傷つくことを恐れる傾向”、“深い関わりを回避する傾向”が見出された。このように、青年の持つ友人関係の特質や特徴が徐々に明らかにされてきた一方で、上述のような友人関係の中で、青年がどのような体験をしているのか、また見出された関係を持つに至る、対人関係の中での青年の心理については、ほとんど検討がなされていない。

友人関係の他に、これまで青年の対人関係の1つとして取り上げられることの多かった対人関係に、親子関係がある。親子関係に関しては、第二の分離-個体化（Blos, 1962 野沢訳 1971）を代表とする理論に沿って、実際の関係が検討されている。例えば岡本・上地（1999）は、青年期の親イメージとして、“理想化”、“理解”、“脱依存”、“対立”を見出し、“理想化”から“脱依存”に向かうイメージの変遷を検討している。また、平石（1999）は、親子間のコミュニケーションにみられる個性化を類型論的視点から捉え直すことを試みている。そして、それまでの研究では、青年期後期には、中期に一度離れた親子関係が再び結びつきを取り戻し、仲間のような相互的な関係に至るとされていたが、青年一両親関係の多様性と家族システムによる差異があり、一概には言えないことを明らかにした。以上のように、これまでの研究では、青年の親へのイメージや親子関係の在り方が多く検討されており、友人関係を取り上げた研究と同様、親子関係を捉える枠組みだけではなく、その関係の中での青年の体験の観点からも、実像に迫ることが求められる。そうすることで、ひいては、他者との関係の中で、青年のアイデンティティがどのように発達していくかという点の検討も可能になると考えられる。いずれにせよ、対人関係に関する研究とアイデンティティ発達に関する研究

とをつなぐことにより、現代の青年のアイデンティティを他者との「関係性」の側面から検討することが可能になる。そして、そうした研究で得られた知見は、アイデンティティ発達に関する研究に新たな示唆をもたらすと考えられる。

第3節 本研究の目的

近年のアイデンティティ研究では、Marcia (1966) 以降、アイデンティティの多様性に目を向け、アイデンティティそのものやアイデンティティ形成の様々な在り方を明らかにすることが求められている。その中で、現在では特に、「関係性」の視点を加えてアイデンティティを理解することの有用性が示されてきており、「個」と「関係性」の視点の導入が試みられている。

その中でも、Franz & White (1985) の提出した“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル”は、アイデンティティ形成における「関係性」の側面を精緻化しており、青年に対する心理臨床学的援助の観点からも有用な理論と考えられる。

Franz & White (1985) に基づくと、アイデンティティにおける「個」と「関係性」は次のように定義される。「個」の側面は、“個体化経路”に沿って発達し、自己の能力に対する信頼感を基盤に、個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つ。「関係性」の側面は、“アタッチメント経路”に沿って発達し、自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に、他者と関係を築く能力を獲得し、他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つ。

アイデンティティ研究への「個」と「関係性」の視点の導入の有用性は示唆されているものの、現在まで、この領域では理論研究が主になさ

れ、実証研究の蓄積は浅い。従って、まずは「個」と「関係性」からアイデンティティを測定する尺度を作成し、理論的に提唱された概念を実証的に検討することが必要である。

また、実証研究に際し、本研究ではアイデンティティの確立が主要な課題となる青年期を対象に検討を行う。これまで個人としての確立に重点が置かれてきた青年期のアイデンティティを「関係性」の観点から検討することは、青年理解と援助に新たな示唆を与え、さらに、他の発達段階におけるアイデンティティの「関係性」の側面を発達的に見直すことにも寄与すると考えられる。

以上より、本研究では、Franz & White (1985) に基づき、青年期のアイデンティティ様態を「個」と「関係性」から実証的に捉えることを目的とした。まず、研究 1-1 と研究 1-2 では、青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」の視点から測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。次に、研究 2-1、研究 2-2、研究 3 では、研究 1-1、研究 1-2 で作成した尺度を用いて、「個」と「関係性」の視点から青年のアイデンティティ様態を分類し、各様態の特徴を質的に分析すること、それにより、作成した尺度の有用性を検討することを目的とした。

第2章 アイデンティティにおける「個」と「関係性」を測定する尺度の作成

第1節 項目選定と信頼性の検討（研究 1-1）

1. 目的

研究 1-1 は、以下の 2 点を目的とした。① Franz & White (1985) に基づき、青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から測定する尺度を作成する。② 作成した尺度の再検査信頼性を検討する。

2. 方法

(1) 調査対象

大学生 295 名（男性 167 名，女性 128 名，平均年齢 19.8 歳， $SD=1.49$ ）。このうち 50 名（男性 21 名，女性 29 名，平均年齢 20.0 歳， $SD=1.33$ ）を再検査の分析対象とした。再検査は，1 回目の調査の 1 ヶ月半後に実施した。調査は，授業場面で集団実施した。調査時期は，2005 年 5，6 月であった。有効回答率は，92.5%であった。

(2) 質問紙の構成

「個」を測定する尺度（以下，「個」尺度と略記）（15 項目，4 件法），「関係性」を測定する尺度（以下，「関係性」尺度と略記）（13 項目，4 件法），フェイス項目（性別，年齢，学年）から構成した。「個」尺度と「関係性」尺度の回答は，「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までであった。教示を含めた尺度を，付録 1 に添付する。

(3) 項目選定の手続き（予備調査）

Franz & White (1985) を参考に作成した項目選定基準 (Table 2-1)

Table 2-1

「個」を測定する項目群と「関係性」を測定する項目群の項目選定基準の一部と項目例

	「個」			「関係性」		
	課題	項目選定の基準	項目例	課題	項目選定の基準	項目例
第Ⅰ段階	「個」に対する基本的信頼感	心の最も深いところでの自己肯定。希望に支えられる。	・私は、幸せになる価値のある人間である。	自己を取り巻く世界に対する基本的信頼感	他者をはじめとする自分を取り巻く環境に対する肯定・信頼感・安心感。世の中に対する信用。	・自分が困ったときには、周りの人々からの援助が期待できる。
第Ⅱ段階	自律性	外的な命令や禁止の内在化。自分の力で決断、実行ができる。自分の行いに対する責任感。	・私は、決断する力が弱い。*	恒常性	他者という存在の認識。無力感や孤独感の脅威からの解放と、愛情対象との密接な関係性の獲得。	・人間関係は、常に連絡を取っていないと途切れてしまうように感じる。*
第Ⅲ段階	自主性	積極的に物事に取り組む。自己統制の確立。自我理想と超自我のスムーズな形成。	・一つの目的のために、積極的に物事を進めていくことができる。	遊戯性	心理的に独立した存在として他者を認識できる。他者の思考や感情、意図に気づく。	・私は、他者は異なる考えを持っているということを感じても不安になることはない。
第Ⅳ段階	勤勉性	他に働きかけ、統制し、自己の世界に作り変えていく技術獲得のプロセス。有能感の獲得。勉強や課題などに集中し継続して取り組む。	・私は、自分の仕事をうまくこなすことができる。	共感・協力	第Ⅲ段階の状態に加え、相互性にも気づく。他者が自律的で自分と相互依存的関係を持つ存在であるという認識。	・他者と対等に接し、協力して物事を行うことができる。
第Ⅴ段階	アイデンティティの確立	自己の一貫性・連続性、社会的存在である「個」としての自分の意識化。時間的展望を有する。	・現在の自分は、過去の自分の上に築き上げられているという感覚がある。	相互性・相互依存	自己の斉一性(空間における自己の定位)が可能。対人関係に対するより精緻な理解。行動と内面の統合。	・人は互いに支え合いながら生きていくものである。
第Ⅵ段階	職業及びライフスタイルの模索	社会的存在としての自己を認識し、人生の方向付けを行おうとしている。またそのことに対して真剣に取り組んでいる。	・人生設計をきちんと立てて、今後の生活を送っていきたく考えている。	親密性	異性や特定の他者と親密な関係を持つことができる。自分を見失わずに他者と関わることができる。	・誰かに個人的な話をされると、私は当惑してしまう。*
第Ⅶ段階	職業及びライフスタイルの確立	安定した生活を送れており、またその自信がある。自分の役割への自覚、誇り。	・自分の役割というものを意識することがある。	世代性	世話をする立場になることに、ある程度の自信を持っている。世代感覚を覚えつつある。	・私は、後輩のめんどろをよく見る。
第Ⅷ段階	「個」としての人生の統合	これまでにしてきた仕事や働きに対する満足感。自分の人生としての納得。自己の過去と直面し、内的な生き生きとしたものに高める。	・私は、悔いのない人生を歩んでいる。	関係性の視点からの人生の統合	これまで出会ってきた人々との関係を肯定的に捉えようとする。あがままの過去経験に直面し、それらが現在を支え、決定しているものとみる。	・昔よくけんかをしたりあまり仲良くなかった人も、一人の人として受け入れることができる。

注) 項目例の項目末の*は、逆転項目であることを示す。

に従い、先行研究（井梅，2001；宮下，1987；中西・佐方，2001；中尾・加藤，2004；下山，1992；谷，1996，2001）を参考にして、両経路 80 項目ずつ収集・作成した。項目選定基準は、心理学を専攻する大学院生 2 名により、妥当性が確認された。

なお、Franz & White (1985) からの変更点として、第 I，VIII 段階の課題も「個」と「関係性」の側面それぞれに設定したことが挙げられる。これは、基本的信頼感は、母親と母親を通じての世界に対する信頼感と、自己の存在そのものに対する信頼感を含むという Erikson の記述から、信頼感や統合性についても「個」と「関係性」の 2 つの側面を有すると考えられたためである。また、Erikson と同様に生涯を通じて発達し続けるものとしてアイデンティティを捉えている Franz & White (1985) に従って、段階ごとに項目を収集した。

「個」を測定する項目群（以下、「個」項目群と略記）の項目は、中西・佐方（2001），宮下（1987），谷（1996，2001），下山（1992）から収集した。なお、第 VI，VII 段階に関しては、自作の項目も含む。

中西・佐方（2001）の Erikson psychosocial stage inventory 日本語版（EPSI）は、Erikson によって定式化された精神分析的個体発達分化の図式に対応した心理-社会的発達課題の達成感覚を、個人がどのくらい意識しているかを測定評価し、その個人のアイデンティティ感覚のレベルを明らかにしようとする質問紙検査である。原版は、Rosenthal(1981) によって開発された。この尺度では、8 つの発達段階全てが取り上げられ、それぞれの発達課題の達成過程に焦点が当てられている。各下位尺度は 7 項目で構成され、全部で 56 項目から構成される。回答は、「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの 5 件法である。

宮下（1987）の Rasmussen's Ego Identity Scale 日本語版（REIS）

は、欧米諸国での使用頻度が高い尺度の 1 つであり、Erikson の精神分析的個体発達分化の図式における最初の 6 段階の心理・社会的危機をどの程度解決しているかによって、アイデンティティの程度を測定しようとするものである。原版は、Rasmussen (1961) によって開発された。対象は、主として大学生程度の年齢層以上とされている。項目数は、第 I 段階から第 III 段階が 11 項目、第 IV, V 段階が 12 項目、第 VI 段階が 10 項目であり、全部で 67 項目から構成される。回答は、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの 7 件法である。

谷 (1996) の基本的信頼感尺度は、Erikson の精神分析的個体発達分化の図式の第 I 段階の課題である基本的信頼感を、大学生を対象に測定することを目的として作成された。谷 (1996) は、基本的信頼感の問題が、どのような形の信頼感として表れるのかという Erikson の記述に着目し、また上述の Rasmussen (1961) の第 I 段階の項目も参考にして作成され、“基本的信頼感” 下位尺度 6 項目、“对人的信頼感” 下位尺度 5 項目の計 11 項目から構成される。回答は、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 7 件法である。

谷 (2001) の多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale; MEIS) は、従来の尺度には、Erikson の記述との対応関係が明確でないという指摘を踏まえ、Erikson のアイデンティティの概念を忠実に再現しようとして精緻な手順で開発された尺度である。アイデンティティが形成されている安定した人格の多様な特徴を描くのではなく、アイデンティティの感覚とは実際にはどのような感じであるのかを表現し、多次元からアイデンティティの感覚を測定することに成功している。対象は、青年期から成人期以降まで広く使用可能とされている。“対自的同一性 (自己についての明確さの感覚)”, “対他的同一性 (本当の自分自

身と他者から見られているであろう自分自身が一致するという感覚)”，“自己斉一性・連続性（自己の不変性及び時間的連続性の感覚）”，“心理社会的同一性”の4下位尺度，各5項目から構成され，全部で20項目から構成される。回答は，「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7件法である。

下山（1992）のアイデンティティ尺度は，日本の大学生の“モラトリアム心理”とアイデンティティの確立との関連を検討するために開発された尺度である。“アイデンティティの確立”と“アイデンティティの基礎”の2つの下位尺度から構成されている。“アイデンティティの確立”下位尺度は，自己の主体性や自己への信頼が形成されていることを表す項目から構成されている。“アイデンティティの基礎”下位尺度は，アイデンティティ形成の基礎となる自己の安定が得られず，不安や孤独に襲われる気持ちを反映した内容となっている。対象は，開発の目的に従えば大学生ということになるが，思春期から成人期以降まで広く使用可能とされる。項目数は，各下位尺度10項目で，全部で20項目から構成される。回答は，「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」までの4件法である。

「関係性」を測定する項目群（以下，「関係性」項目群と略記）の項目は，上述の「個」項目群の収集の際に参考にした尺度に加え，アイデンティティにおける「関係性」の概念と類似する内容をもつと考えられる対象関係やアタッチメントを扱った尺度を参考にした。なお，既存の尺度に含まれる項目のみでは設定した課題を網羅できないと判断された場合には，項目を作成した。

井梅（2001）の対象関係尺度は，自我心理学で論じられてきた自我機能の1つである対象関係を取り上げ，人格障害の理論的展開の中で発展

してきた対象関係に関する理論を踏まえた上で作成された尺度である。精神分析的研究においては、内面における対象との関係性から生じるという視点を導入することによって、対象関係が人格の成熟の度合いを測定するものになるとされている。井梅（2001）は、Bell, Billington, & Becker（1986）によって作成された Bell Object Relations and Reality Testing Inventory（BORRTI）の対象関係項目を基礎として項目を設定している。“回避性”，“自他の境界の未分化”，“自己中心性”，“関係性維持の困難”，“見捨てられ不安”の5下位尺度から構成され、項目数は、順に6項目，8項目，9項目，7項目，8項目で、全部で38項目から構成される。回答は、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの6件法である。井梅（2001）は、対象関係の障害と関連が深い人格障害の説明の中で、アイデンティティの障害に言及し、対象関係とアイデンティティ概念との関連を示唆している。また、杉村（1999）でも、“個人の他者との関係のあり方が、アイデンティティ発達の重要な指標である”と述べられていることから、他者との関係を築く際の内面のプロセスである対象関係を、アイデンティティにおける「関係性」の測度として参考にすることは妥当であると考えられる。

中尾・加藤（2004）の“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度は、初対面の段階から対人関係を形成していく場面、親密さが明確でない状況で愛着行動を行う場面、あるいは対人場面で他者とストレスのかかるやり取りをしなければならない場面などで、他者との相互作用パターンを予測することを目的に作成された。親密な対人関係体験尺度の日本語版（中尾・加藤，2002）の項目に含まれる“恋人”を“人”に変え、それに伴い項目に若干の修正・追加を行っている。“見捨てられ不安”と“親密性の回避”の2下位尺度、それぞれ18項目，12項目であり、全部で

30 項目から構成される。回答は、「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までの 7 件法である。本研究で依拠する Franz & White (1985) が、アタッチメントを重視し、“アタッチメント経路”を設定していることから、本研究で想定するアイデンティティにおける「関係性」の側面と愛着とは関連があると考えられる。

項目を収集した後、選定基準と項目との対応について、筆者以外の心理学専攻の大学院生 2 名により、妥当性が確認された。選定基準と項目を提示し、不相当と判断された項目については、内容や項目表現の修正を行った。修正の必要があると判断されたのは、「個」項目群で 6 項目（一致率は 92.5%）、「関係性」項目群で 8 項目（一致率は 90.0%）であった。

予備調査として、大学生 165 名（男性 90 名，女性 75 名，平均年齢 21.1 歳， $SD=1.53$ ）を対象に質問紙調査を実施し，項目分析と因子分析を行い，尺度項目を選定した。予備調査は，2005 年 1 月に，授業場面で集団実施した。有効回答率は，96.5%であった。

3. 結果

(1) 因子分析

因子分析の結果については，尺度構成の過程を示すために，予備調査の結果から示した。

フェイスシートのみ記入のもの，欠損回答が 5 以上あるものを除き，分析を行った。なお，除外した質問紙以外の欠損値には，該当する項目の全体での平均値を割り当てた。分析ソフトは，SPSS 11.0 for Windows を用いた。

まず，回答の 60%以上が回答の 1 か 4 に偏っている項目（「個」項目

群 8 項目、「関係性」項目群 12 項目)を、反応偏向項目として除外した。その上で、尺度別に主因子法による因子分析を行った。なお、因子間に相関があることが予想されたため、プロマックス回転を用いて因子を抽出した。

「個」項目群のうち、反応偏向項目を除外した 72 項目に対し、主因子法により因子を抽出後、プロマックス回転を行った。初期固有値、スクリープロットの減衰状況、因子の解釈のしやすさを考慮し、3 因子構造を採用した。その上で、共通性が .30 以上、因子負荷量が .55 以上を基準とし、さらに因子ごとの信頼性分析の結果を踏まえて項目を除外した。なお、研究 1-1 においても、同じ因子構造が確認された。

第 1 因子は、「私は、多くのことに対して自信を持って取り組むことができる」、「私は、自分が役に立つ人間であると思う」などの 5 項目から構成され、「自己への信頼感・効力感（以下、自己信頼と略記）」と命名した。信頼性係数は、 $\alpha = .85$ であった。

第 2 因子は、「将来自分は何をしたいかという確信や目標を持っている」、「将来の職業（専業主婦も含む）について、具体的に考えている」などの 5 項目から構成され、「将来展望」と命名した。信頼性係数は、 $\alpha = .81$ であった。

第 3 因子は、「私は、決断する力が弱い（逆転項目）」、「私は、自分の判断に自信がない（逆転項目）」などの 5 項目から構成され、「自律性」と命名した。信頼性係数は、 $\alpha = .79$ であった。

最終的に、各因子 5 項目、計 15 項目が「個」尺度を構成する項目として抽出された。尺度全体の信頼性係数は、 $\alpha = .85$ であった。

次に、「関係性」項目群のうち、反応偏向項目を除外した 68 項目に対し、主因子法により因子を抽出後、プロマックス回転を行った。初期固

有値，スクリープロットの減衰状況，因子の解釈のしやすさを考慮し，3因子構造を採用した。その上で，「個」項目群の分析と同じ基準を設け，項目を除外した。なお，研究 1-1 においても，同じ因子構造が確認された。

第 1 因子は，「周囲の人々によって自分が支えられていると感じる」，「これまでに会った人々によって，今の自分が支えられていると感じる」などの 7 項目から構成され，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け（以下，世界信頼と略記）」と命名した。信頼性係数は， $\alpha = .90$ であった。

第 2 因子は，「私は時々，周囲の人や物事から取り残されて，一人ぼっちであるように感じる（逆転項目）」，「私は，批判に対して敏感で傷つきやすい（逆転項目）」などの 3 項目から構成され，「見捨てられ不安」と命名した。信頼性係数は， $\alpha = .70$ であった。なお，「見捨てられ不安」因子については，得点が高いほど，見捨てられ不安が低いと解釈される。

第 3 因子は，「集団内で，私はちゅうちょすることなく，自ら正しいと思うことを表明できる」，「人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと，自分の意見を主張するのにためらいを覚える（逆転項目）」などの 3 項目から構成され，「関係の中での自己の定位（以下，自己定位と略記）」と命名した。信頼性係数は， $\alpha = .67$ であった。

最終的に，13 項目が「関係性」尺度を構成する項目として抽出された。尺度全体の信頼性係数は， $\alpha = .83$ であった。

(2) 再検査信頼性分析

次に，再検査法の分析対象である 50 名分のデータを用いて，両尺度の下位因子それぞれについて，因子得点を算出し，1 回目と 2 回目の得

点間の信頼性係数を算出した。その結果、「自己信頼」は $r=.83$ 、「将来展望」は $r=.83$ 、「自律性」は $r=.79$ 、「世界信頼」は $r=.68$ 、「見捨てられ不安」は $r=.71$ 、「自己定位」は $r=.77$ であり、全て 1%水準で有意な相関が認められた。

(3) 性差の検討

加えて、本研究では、アイデンティティにおける「個」と「関係性」を、性差によらない人間の根源的なものと捉えたため、性差についても確認的に検討を行った。両尺度の下位因子の因子得点と尺度全体の尺度得点を用いて、 t 検定を行った結果、「個」尺度の第1因子「自己信頼」と「関係性」尺度の第2因子「見捨てられ不安」において、1%水準で有意差が認められた。両因子とも、男性の方が女性よりも得点が高いことが示された（「自己信頼」因子 $t(292)=2.75, p<.01$ 、「見捨てられ不安」因子 $t(292)=2.55, p<.01$ ）。

4. 考察

(1) 「個」尺度と「関係性」尺度の構成

因子分析の結果、それぞれ3因子から構成される「個」尺度と「関係性」尺度が作成された。以下に、下位因子を構成する項目の特徴から、各尺度について考察する。

「個」尺度の第1因子「自己信頼」は、5項目中3項目が“個体化経路”の第I段階に対応する項目であり、自己への基本的信頼感が、青年期のアイデンティティにおける「個」の中核にあることが示唆された。

第2因子「将来展望」は、5項目中3項目が“個体化経路”の第VI段階に対応する項目であり、青年期の次の段階である成人期の課題への取り組みが、「個」の構成要素であることが示された。これに関しては、本

研究の対象者が大学生，つまり詳細に分類すると青年期後期にあたる人々であったことが影響している可能性が考えられる。

第3因子「自律性」は，5項目中3項目が“個体化経路”の第Ⅱ段階に対応する項目であり，残りの2項目も青年期以前の段階に対応する項目であった。このことは，青年期以前の発達段階の課題の中で，特に自律性が青年期のアイデンティティ形成にも重要な役割を果たすことを示す。これに関して，Erikson（1967 岩瀬訳 1982）は，青年は“人生の道の一つを，自由なる同意をもって意思決定する機会を求める”とし，青年期と幼児前期（第Ⅱ段階）の類似性に言及している。

次に，「関係性」尺度の第1因子「世界信頼」は，“アタッチメント経路”の第Ⅰ，Ⅴ，Ⅷ段階に対応する項目から構成されており，発達段階全体に渡る「関係性」の課題を集約的に反映していると考えられる。

第2因子「見捨てられ不安」は，3項目中2項目が“アタッチメント経路”の第Ⅳ段階に対応する項目であった。“アタッチメント経路”の第Ⅳ段階の課題は“共感・協力”であり，項目選定基準として，他者を自分と相互性を持つ心理的に独立した存在として認識することが挙げられている。他者の意思や思考と自分の意思や思考とを混同しないことにより，自分が見捨てられている，周囲から取り残されているとは感じないこと，また，相互関係を持つことが可能な対象として周囲の他者を捉えることができることと考えられたため，第2因子を「見捨てられ不安」と命名した。

第3因子「自己定位」は，3項目中2項目が“アタッチメント経路”の第Ⅵ段階に対応する項目であった。“アタッチメント経路”の第Ⅵ段階の課題である“親密性”の項目選定基準として，異性との関係を築けることと，自分を見失わず他者と関わるができることが挙げられてい

る。項目内容にある意見の表明や主張を可能にするのは、他者との関係の中で自己を位置づけ、他者の存在に自己の存在が脅かされないことと考えられたため、第3因子を「関係の中での自己の定位」と命名した。成人前期について Erikson (1967 岩瀬訳 1982) は、“すでに確立された活力的な力強さのゆえに、二人は、意識や言語や倫理の点ではじめて類似した存在となり、しかも成熟した成人としてのお互いの違いを率直に認め合うようになれる”と述べている。このことから、真の親密性とは、他者に自らのアイデンティティを参与させながらも、互いの違いを認めることができることと理解される。本研究の結果から、青年期には、アイデンティティの形成・確立と重なって、親密性の獲得に向かう取り組みも始まっていると考えられ、このことは先行研究においても示唆されている (伊藤, 1983; 高橋, 1988)。

以上のことより、青年期のアイデンティティにおける「個」の側面は、自己の能力に対する肯定的な意識や将来に向けての取り組み、自律性を中心として構成されていること、「関係性」の側面は、他者をはじめとする自己を取り巻く世界への信頼感や、自己と他者の相互性への十分な気づき、他者との関係の中で自己を定位するという親密性への取り組みを中心として構成されていることが明らかになった。

なお、予備調査で収集した項目のうち、最終的に採用されなかった項目の多くは、両尺度ともに第Ⅶ、Ⅷ段階に想定されていた。このことより、具体的なレベルの課題や人生の統合に向かう課題は、青年期においては本格的には取り組まれず、意識されていないと考えられる。

(2) 「個」尺度と「関係性」尺度の再検査信頼性

再検査信頼性分析の結果、「個」尺度と「関係性」尺度の全ての下位因子において、1%水準で有意な相関が認められ、作成した尺度の再検査信

頼性が確認された。このことより、それほど短期的な変化が認められないと考えられるアイデンティティを測定する尺度として、安定性が保証された。しかし、今回は、分析対象者数が 50 名と少なかったため、引き続き検討を重ねる必要がある。

(3) 「個」尺度と「関係性」尺度の性差

性差の検討の結果、「個」尺度の第 1 因子「自己信頼」と「関係性」尺度の第 2 因子「見捨てられ不安」において、男性の方が女性より得点が高いことが示された。このことから、従来のアイデンティティ研究でも指摘されてきたように、男性の方が女性に比べて個人としての自己を重視する傾向にあること、そのため男性は見捨てられ不安を感じる程度が女性よりも低いと考えられる。本研究では、「個」と「関係性」を性差によらないものとして捉えたが、数量的な検討の結果、2 つの下位因子においては性差が認められた。しかし、尺度得点には性差が認められなかったことから、全体として大きな性差は認められないと考えられる。次節以降の検討では、性差がないことを前提として、分析を進めた。

第 2 節 信頼性と妥当性の検討（研究 1-2）

1. 目的

研究 1-2 は、研究 1-1 で作成した尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とした。妥当性に関しては、以下の予測に基づき分析を行った。①同一性混乱尺度と負相関をもつ（併存的妥当性の検討）、②特性不安尺度と負相関をもつ、③自尊感情尺度と正相関をもつ、④加齢に伴い得点が上昇する、（以上が、構成概念妥当性の一部の検討）、⑤信頼感尺度の下位因子と、「個」尺度・「関係性」尺度が異なる相関パターンを示す。

2. 方法

(1) 調査対象

大学生 521 名(男性 155 名,女性 366 名,平均年齢 20.2 歳, $SD=1.56$)。調査は,授業場面で集団実施した。調査時期は,2007 年 6 月であった。有効回答率は,85.53%であった。

(2) 質問紙の構成

「個」尺度(15 項目,4 件法),「関係性」尺度(13 項目,4 件法),砂田(1979)の同一性混乱尺度(34 項目,3 件法),清水・今栄(1981)の特性不安尺度(20 項目,4 件法),山本・松井・山成(1982)の自尊感情尺度(10 項目,5 件法),天貝(1995)の信頼感尺度(24 項目,6 件法),フェイス項目(性別,年齢,学年)から構成した。

妥当性の検討のために質問紙に加えた尺度について,以下に用いた理由と予測される結果を記述した。

同一性混乱尺度は,アイデンティティの形成・成熟と逆の状態であるアイデンティティの混乱を測定する尺度である。本研究では,「個」尺度と「関係性」尺度と負相関の関係にあると予測された。従って,同一性混乱尺度は,作成した尺度の併存的妥当性を確認するために質問紙に加えた。

特性不安と自尊感情は,これまでの研究でアイデンティティと関連のある変数として用いられており(鏑他,1984),また,既存のアイデンティティ尺度の作成の過程で,妥当性の検討のために用いられてきた概念である(宮下,1987;谷,1996,2001)。従って,特性不安尺度と自尊感情尺度は,作成した尺度の構成概念妥当性の一部を確認するために質問紙に加えた。

信頼感尺度は,「個」尺度と「関係性」尺度それぞれの特徴を明らかに

するために質問紙に加えた。なお、信頼感尺度は、研究 1-1 で作成した尺度と同様に信頼感を扱っているが、Erikson 理論だけではなく、信頼感に関する他の複数の理論や尺度が参考にされており、理論的背景が異なる。加えて、尺度項目に同一の表現がないことも確認した。信頼感尺度には、“不信”、“対自的信頼感”、“対他的信頼感”の 3 下位因子が含まれており、「個」尺度は“対自的信頼感”と、「関係性」尺度は“対他的信頼感”と、より強い相関を持つことが予測された。

3. 結果

(1) 因子構造の確認

フェイスシートのみ記入のもの、欠損回答が 5 以上あるものを除き、分析を行った。なお、除外した質問紙以外の欠損値には、該当する項目の全体での平均値を割り当てた。分析ソフトは、SPSS 15.0J for Windows と Amos 7 を用いた。

反応偏向項目がないことを確認した後、因子構造を確認するために、再度探索的因子分析を行った。分析の結果、「個」尺度 (Table 2-2)、「関係性」尺度 (Table 2-3) とともに、研究 1-1 と同じ因子構造を示した。

次に、確認的因子分析の結果、「関係性」尺度の RMSEA が若干高いものの許容範囲と考えられた（「個」尺度 GFI=.919, AGFI=.888, RMSEA=.074, 「関係性」尺度 GFI=.915, AGFI=.875, RMSEA=.087）。各下位因子の信頼性係数は、「自己定位」因子以外で $\alpha = .70$ 以上であり、十分な信頼性が確認された。しかし、「自己定位」因子の信頼性係数は $\alpha = .63$ であった。なお、尺度全体の信頼性係数は、「個」尺度で $\alpha = .84$, 「関係性」尺度で $\alpha = .77$ であった。

(2) 妥当性の検討

Table 2-2
「個」尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
第1因子「自己への信頼感・効力感」($\alpha=.83$)				
私は、自分が好きだし、自分に誇りをもっている	.91	-.10	-.09	.69
私は、多くのことに対して自信を持って取り組むことができる	.76	.00	.04	.61
私は、自分が役に立つ人間であると思う	.71	.09	-.10	.50
私は、きつとうまく人生を乗り越えられるであろう	.55	.13	-.10	.40
自分の考えに従って行動することに自信を持っている	.49	-.00	.27	.44
第2因子「将来展望」($\alpha=.80$)				
将来自分が何をしたいかという確信や目標を持っている	-.06	.75	.10	.57
将来の職業(専業主婦も含む)について、具体的に考えている	-.09	.73	.05	.49
今後、どんな風に生活していくかを考えている	.07	.71	-.08	.53
人生設計をきちんと立てて、今後の生活を送っていきたくと考えている	.04	.63	-.06	.41
私は、目的を達成しようとがんばっている	.16	.46	-.05	.29
第3因子「自律性」($\alpha=.75$)				
私は、自分の判断に自信がない*	.08	-.06	.74	.59
私は、誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしている*	-.20	.08	.64	.33
何かしたあとで、それが正しかったかどうか心配になることが多い*	-.02	-.13	.60	.33
私は、物事を完成させるのが苦手である*	.02	.04	.57	.34
私は、決断する力が弱い*	.19	.05	.53	.44
固有値	4.78	2.27	1.46	
寄与率(%)	31.88	15.11	9.75	
因子間相関	F1	.44	.50	
	F2		.21	

注) 項目末の*は、逆転項目であることを示す。

Table 2-3
「関係性」尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
第1因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」($\alpha=.86$)				
周囲の人々によって自分が支えられていると感じる	.78	-.02	-.02	.61
これまで私が築いてきた人間関係は、私にとって価値のあるものである	.77	-.05	.08	.60
これまでに出会った人々によって、今の自分が支えられていると感じる	.73	-.11	.08	.55
私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている	.72	.04	-.02	.51
私がこれまでに関わりをもった人々は、私により影響を与えてくれた	.63	.11	-.10	.42
自分が困ったときには、周りの人々からの援助が期待できる	.62	-.12	.16	.40
友人関係は、比較的安定していると思う	.61	.23	-.13	.42
第2因子「見捨てられ不安」($\alpha=.73$)				
私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある*	.04	.81	-.00	.66
私は時々、周囲の人や物事から取り残されて、一人ぼっちであるように感じる*	.10	.74	-.01	.56
私は批判に対して敏感で傷つきやすい*	-.14	.46	.20	.34
第3因子「関係の中での自己の定位」($\alpha=.63$)				
人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと、自分の意見を主張するのにためらいを感じる*	-.05	.21	.59	.48
他者と一緒に何か物事を行うとき、私はよく受身的になってしまう*	-.07	.10	.57	.38
集団内で、私はちゅうちょすることなく、自ら正しいと思うことを表明できる	.17	-.10	.56	.32
固有値	4.02	2.56	1.20	
寄与率(%)	30.95	19.67	9.24	
因子間相関	F1	.04	.12	
	F2		.42	

注) 項目末の*は、逆転項目であることを示す。

併存的妥当性を検討するために、「個」尺度と「関係性」尺度の下位因子得点を算出し、因子得点と同一性混乱尺度との間に共分散を仮定したモデルで分析を行った (Table 2-4)。その結果、「個」尺度は、 $r=-.72\sim-.52$ 、「関係性」尺度は $r=-.66\sim-.35$ の値が示された。

次に、構成概念妥当性の一部を検討するために、「個」尺度と「関係性」尺度の下位因子得点と、特性不安尺度と自尊感情尺度の尺度得点との間に共分散を仮定したモデルで分析を行った (Table 2-4)。特性不安尺度では、「個」尺度は $r=-.80\sim-.54$ 、「関係性」尺度は $r=-.78\sim-.56$ 、自尊感情尺度では、「個」尺度は $r=.55\sim.89$ 、「関係性」尺度は $r=.33\sim.53$ の値が示された。

続いて、学年差を検討するために、「個」尺度と「関係性」尺度の下位因子得点と尺度全体の尺度得点について分散分析を行った。なお、分析に用いたデータは、学部生 519 名分であった。分析の結果、「個」尺度の尺度得点において 1%水準、第 2 因子「将来展望」において 5%水準の有意差が認められた。また、「個」尺度の第 1 因子「自己信頼」、第 3 因子「自律性」、「関係性」尺度の尺度得点において有意傾向が認められた。下位検定 (Tukey 法) の結果を、Table 2-5 に示す。

下位検定の結果、「個」尺度得点では、3, 4 年生が 2 年生に比べて 1%水準で有意に得点が高く、「将来展望」と「自律性」の下位因子得点では、

Table 2-4
「個」尺度と「関係性」尺度の妥当性検討の分析結果

	同一性混乱	特性不安	自尊感情
自己信頼	-.65**	-.76**	.89**
将来展望	-.52**	-.54**	.55**
自律性	-.72**	-.80**	.75**
世界信頼	-.39**	-.61**	.38**
見捨てられ不安	-.66**	-.78**	.53**
自己定位	-.35**	-.56**	.33**

注) ** $p<.01$

Table 2-5
「個」尺度、「関係性」尺度の下位因子得点と尺度得点の全体と学年ごとの平均値

	全体	1年生	2年生	3年生	4年生	F値 (多重比較)
自己信頼	11.42 (3.11)	10.81 (2.77)	11.10 (3.24)	11.56 (3.06)	11.97 (3.21)	2.49 † (1<4)
将来展望	14.07 (3.26)	14.19 (3.46)	13.36 (3.30)	14.23 (3.19)	14.59 (3.10)	3.10* (2<3,4)
自律性	12.72 (3.08)	12.94 (2.96)	12.22 (3.19)	12.70 (3.17)	13.31 (2.70)	2.41 † (2<4)
「個」尺度得点	38.22 (7.06)	37.94 (6.13)	36.68 (7.62)	38.49 (6.98)	39.88 (6.71)	4.00** (2<3,4)
世界信頼	22.23 (3.99)	22.76 (3.64)	22.19 (4.15)	21.87 (3.87)	22.79 (4.25)	n.s
見捨てられ不安	7.41 (2.33)	7.46 (2.53)	7.36 (2.47)	7.29 (2.31)	7.71 (2.01)	n.s
自己定位	7.38 (1.98)	7.47 (1.89)	7.15 (1.88)	7.36 (2.05)	7.71 (1.97)	n.s
「関係性」尺度得点	37.02 (5.66)	37.68 (4.73)	36.70 (5.95)	36.52 (5.69)	38.21 (5.69)	2.45 † (3<4)

注) ()内は標準偏差を示す。

** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.05$

4年生が2年生に比べて5%水準で有意に得点が高いことが示された。また、「自己信頼」で4年生が1年生に比べて、「将来展望」と「個」尺度得点で3年生が2年生に比べて、「関係性」尺度得点で4年生が3年生に比べて、10%水準での有意に得点が高い傾向が示された。

(3) 相関分析

「個」尺度と「関係性」尺度は、項目の多くを同一の尺度から収集しており、尺度間に相関関係があることが予想されたため、改めて尺度得点間の相関分析を行い確認した。分析の結果、1%水準で比較的強い相関が認められた ($r=.57$, $p<.01$)。

両尺度間の相関が高いという上記の結果を踏まえ、確認的検討として、「個」尺度と「関係性」尺度の項目を合わせて因子分析を行った。これにより、両尺度の下位因子が独立して抽出されるかどうかを分析し、それぞれの尺度の独立性を検討した。両尺度の項目合わせて28項目に対し、主因子法により因子を抽出し、プロマックス回転を行った。その結

果，以下の5因子が抽出された。

第1因子は、「関係性」尺度の「世界信頼」因子の7項目から構成され，因子名はそのまま「世界信頼」とした。第2因子は，「個」尺度の「自律性」因子の4項目と「関係性」尺度の「自己定位」因子の3項目から構成され，「自律性・自己定位」と命名した。第3因子は，「個」尺度の「自己信頼」因子の5項目から構成され，そのまま「自己信頼」とした。第4因子は，「個」尺度の「将来展望」因子の5項目から構成され，そのまま「将来展望」とした。第5因子は，「関係性」尺度の「見捨てられ不安」因子の3項目と，「個」尺度の「自律性」因子の1項目，「何かしたあとで，それが正しかったかどうか心配になることが多い(逆転項目)」から構成され，そのまま「見捨てられ不安」と命名した。なお，第5因子に含まれた「自律性」の1項目は，第5因子に.40，第2因子に.38の負荷量を示した。その他の項目で，他の因子への負荷量が.30を上回るものは認められなかった。

下位因子得点を算出し，因子間相関を算出したところ， $r=.40$ 以上の相関が認められたのは，第2因子「自律性・自己定位」と第3因子「自己信頼」，「自律性・自己定位」と第5因子「見捨てられ不安」，「自己信頼」と第4因子「将来展望」間であり，主に「個」尺度の項目を含む因子間の相関が高いことが示された。

次に，「個」尺度と「関係性」尺度の特徴を検討するために，両尺度の尺度得点と信頼感尺度の下位因子の下位因子得点との相関係数を算出した (Table 2-6)。分析の結果，「個」尺度は，「対自的信頼感」因子と最も強い相関を示し ($r=.86$, $p<.01$)，「関係性」尺度は，「対他的信頼感」因子と最も強い相関を示した ($r=.63$, $p<.01$)。

Table 2-6
「個」尺度、「関係性」尺度と信頼感尺度との相関分析結果

	不信	対自的信頼感	対他的信頼感
自己信頼	-.17**	.61**	.31**
将来展望	-.04	.41**	.29**
自律性	-.33**	.49**	.23**
「個」尺度得点	-.24**	.68**	.37**
世界信頼	-.32**	.34**	.60**
見捨てられ不安	-.48**	.38**	.29**
自己定位	-.33**	.37**	.26**
「関係性」尺度得点	-.54**	.53**	.63**

注) ** $p < .01$

4. 考察

(1) 因子構造の確認と信頼性の検討

探索的因子分析と確認的因子分析の結果、研究 1-1 と同様の結果が示され、「個」尺度と「関係性」尺度の因子構造の安定性が確認された。

下位因子の信頼性分析の結果、ほとんどの下位因子で十分な値が得られた。また、尺度全体の信頼性係数も、十分な値が得られ、研究 1-1 で作成した尺度の信頼性が改めて確認された。しかし、「関係性」尺度の第 3 因子「自己定位」において、 $\alpha = .63$ とやや低い値が示され、因子を構成する項目について、さらなる検討の必要性も示唆された。

なお、研究 1-1 の下位尺度ごとの信頼性分析の結果も含め、「個」尺度の下位因子において、「関係性」尺度の下位因子に比べて高い信頼性係数が示されたことから、「個」の側面の方が、青年期においてはより可変性のないものにまで成熟が進んでいることが推察された。なお、研究 1-1 の再検査信頼性分析においても、「個」尺度の方が、「関係性」尺度よりも高い相関係数が示された。これらのことより、青年期のアイデンティティ形成においては、「個」の側面の成熟が、「関係性」の側面の成熟に先立つ可能性が考えられる。これは、研究 1-1 において、「個」尺度に比べ「関係性」尺度の方が、より発達後期の課題として想定された項目を

多く含んでいることも関連していると推測される。同時に、このことは青年期のアイデンティティにおける「関係性」の側面を捉えることの難しさを表しているとも考えられる。今後、「関係性」の側面を数量的にどのように捉えるかが、重要な課題であり論点になることが予想される。

(2) 併存的妥当性と構成概念妥当性の検討

「個」尺度・「関係性」尺度と、同一性混乱尺度、特性不安尺度、自尊感情尺度との関連と、「個」尺度・「関係性」尺度の学年差を検討した結果、研究 1-1 で作成した尺度の併存的妥当性と構成概念妥当性が一部確認された。

両尺度の下位因子得点と他の尺度との間に共分散を仮定したモデルを検討した結果、全ての変数間で有意な相関関係が示された。なお、自尊感情尺度との間では、「個」尺度の方が「関係性」尺度よりも全体的に高い値を示した。このことより、「個」の側面の方が、個人の自己価値に関する変数と強い関連を持つと考えられ、「個」尺度と「関係性」尺度の相違が示唆された。

また、両尺度の学年差を検討した結果、いくつかの有意差が認められ、全体的に学年が上がるほど得点が上昇することが示唆された。有意差の多くは、2年生と3年生の間で認められており、青年期においてアイデンティティが形成されやすいのが大学3年から4年にかけてであることを示した加藤（1989）を支持する結果となった。下位因子では「将来展望」において2年生と3、4年生の間に有意差が認められており、この背景には、進路選択という学年が上がることで向き合わざるをえなくなってくる課題が存在すると推測される。大学生活にも慣れ、将来のことを視野に入れ始める3、4年生の時期に、アイデンティティの特に「個」の側面の成熟が進むと考えられる。

また、「関係性」尺度の下位因子得点と尺度得点において、有意な学年差が認められなかったことは、上述した「個」の方が「関係性」よりも、青年期においては成熟が早いという見解を支持する。翻って考えると、青年期のアイデンティティを「関係性」の側面から理解しようとするこ
とで、これまでの「個」重視では捉えきれなかったアイデンティティの
状態を捉えられる可能性が示唆された。すなわち、本研究で着目した「関
係性」の視点の有用性が一部示唆されたと考えられる。

なお、研究 1-2 では、妥当性の検討に、アイデンティティとの関連が
予測される変数を用いた。しかし、本研究では、「関係性」の視点を新た
に導入し、「個」と「関係性」という 2 つの視点からアイデンティティ
を測定することを試みており、それぞれの尺度との関連が予測される変
数を用いて、さらに妥当性を検討していく必要がある。この点も踏まえ
ると、本研究で行った検討のみから、作成した尺度の妥当性、特に構成
概念妥当については、十分に確認できたとは言えず、今後も引き続き、
様々な点から検討を重ねる必要がある。

(3) 尺度の特徴の検討

両尺度得点間の相関分析の結果、両者が相関関係にあることが示され
た。同一の既存の尺度から項目を収集していることなどから、相関の高
さは予測されてはいたが、改めて検討を行い、構成概念上、両概念間に
相関関係が含意されていることが数量的にも確認された。またこれは、
Franz & White (1985) が、“個体化経路”と“アタッチメント経路”
の関係を“より糸”と述べていることを、数量的にも反映する結果と考
えられる。

両尺度の項目を合わせて因子分析を行った結果、両尺度の第 3 因子が
融合した 5 因子が抽出された。両尺度の第 1, 2 因子はほぼ、もともと

の項目から構成されており、下位因子としての独立性が確認された。両尺度の第3因子「自律性」と「自己定位」の項目が融合して1つの因子として抽出されたことから、青年期においては、自律や他者との関係の中での自己の位置づけは、より「個」と「関係性」が融合し、相補的な関係にあることが推察された。

また、因子間相関を算出した結果、もともと「個」尺度の因子である下位因子間の相関が比較的強く、「個」尺度の方が尺度としてのまとまりがあることが示唆された。上述の因子構造の確認の部分でも述べたが、「関係性」尺度については、因子構造や特徴などについて、今後も引き続き検討していく必要があると考えられる。

両尺度と信頼感尺度の相関分析の結果、「個」尺度と「関係性」尺度で、異なる相関パターンが示された。「個」尺度得点は、信頼感尺度の下位因子のうち「対自的信頼感」と最も強い相関を示し、「関係性」尺度得点は、信頼感尺度と全体的に強い相関を示し、その中でも「対他的信頼感」と最も強い相関を示した。この結果は、「個」の核が自己信頼であり、「関係性」の核が他者信頼であるという本研究の理論的枠組みに合致する。また、「個」尺度と「関係性」尺度の相違も示唆している。それぞれの尺度の妥当性の検討を進めることとも関連し、今後、「個」と「関係性」のそれぞれの特徴を明らかにしていくことが求められる。

第3章 「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティ様態の 質的分析

第1節 アイデンティティ様態の抽出（研究2-1）

1. 目的

研究2-1は、研究1-2までで作成した尺度を用いて、「個」と「関係性」の視点から青年のアイデンティティ様態を分類することを目的とした。また、抽出された様態の特徴を数量的に検討することも目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象

研究1-1と同じ。

(2) 分析に用いた尺度

研究1-1の質問紙のうち、「個」尺度（15項目、4件法）と「関係性」尺度（13項目、4件法）を用いた。

3. 結果

(1) アイデンティティ様態の抽出

研究1-2において、「個」尺度と「関係性」尺度の相関が高いことが示され、「個」と「関係性」を直交する2軸として捉えることは不相当と考えられたため、クラスタ分析を用いて分類を試みた。両尺度の標準得点化した下位因子得点を用いて、非階層法によるクラスタ分析を行った結果、4様態が抽出された（Figure 3-1）。

クラスタ1($N=73$)は、全ての下位因子得点が平均より高い群であり、

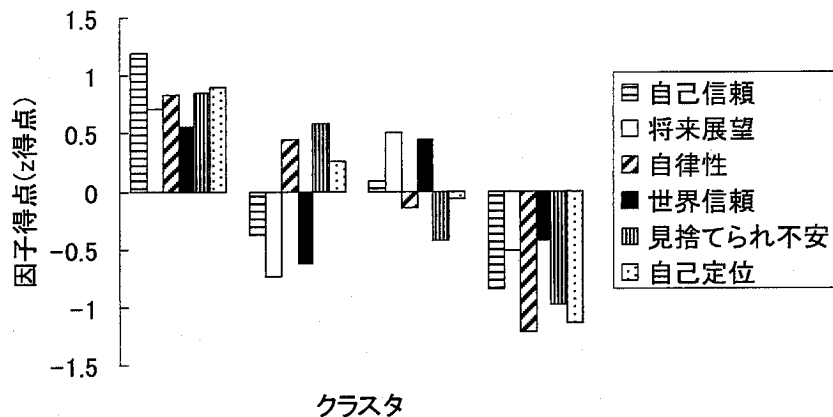


Figure 3-1. クラスタ分析の結果(左から, 成熟群(N=73), 「関係性」優位群(N=86), 「個」優位群(N=75), 未熟群(N=61))

成熟群と命名した。クラスター 2 (N=86) は, 「自律性」, 「見捨てられ不安」, 「自己定位」が平均より高く, 「自己信頼」, 「将来展望」, 「世界信頼」が低い群であり, 「関係性」優位群と命名した。クラスター 3 (N=75) は, クラスター 2 と逆の得点配置を示す群であり, 「個」優位群と命名した。クラスター 4 は, 全ての下位因子得点が平均値より低い群であり, 未熟群と命名した。なお, 命名に際しては, 「個」尺度と「関係性」尺度のいずれの下位因子得点が高いかを重視し, 操作的な命名を行った。

(2) 各様態の特徴の分析

各様態に属する対象者の特徴を明らかにするために, 性別と学年についてのカイ二乗検定, フィッシャーの直接法による検討と, 他の尺度の尺度得点を従属変数とした分散分析を行った。

まず, 各様態に属する対象者の性別と学年について, クロス表を作成した (Table 3-1, Table 3-2)。性別についてのカイ二乗検定の結果, 各セル間に有意差は認められなかった ($\chi^2(3, N=294)=1.91, p=0.59$)。学年についてのフィッシャーの直接法による検討の結果, 各セル間に有意

Table 3-1
各様態の性別の内訳

様態	男性	女性
成熟群	41(56.9%)	31(43.1%)
「関係性」優位群	52(60.5%)	34(39.5%)
「個」優位群	43(56.5%)	32(42.7%)
未熟群	30(49.2%)	31(50.8%)

注) ()内は、男女比を示す。

Table 3-2
各様態の学年の内訳

様態	1年生	2年生	3年生	4年生
成熟群	9(14.1%)	20(23.5%)	37(29.4%)	6(31.6%)
「関係性」優位群	22(34.4%)	21(24.7%)	41(32.5%)	2(10.5%)
「個」優位群	19(29.7%)	20(23.5%)	29(23.0%)	7(36.8%)
未熟群	14(21.9%)	24(28.2%)	19(15.1%)	4(21.1%)

注) ()内は、同学年内での比率を示す。

差は認められなかった ($\chi^2(9, N=294)=14.52, p=0.10$)。

次に、同一性混乱尺度の尺度得点を従属変数とした分散分析を行った結果、クラスタの主効果が認められた ($F(3,291)=90.59, p<.01$)。引き続き下位検定 (Tukey 法) を行ったところ、「関係性」優位群と「個」優位群の間以外に、1%水準で有意差が認められた (Table 3-3)。同一性混乱尺度は、得点が高いほどアイデンティティが混乱している状態と解釈されるため、成熟群に属する青年が、最もアイデンティティが混乱していない状態であり、未熟群に属する青年が、最もアイデンティティが混乱している状態にあることが示された。

同様にして、特性不安尺度の尺度得点を従属変数とした分散分析を行

Table 3-3
各様態の同一性混乱尺度、特性不安尺度、自尊感情尺度の平均値と標準偏差

様態	同一性混乱尺度	特性不安尺度	自尊感情尺度
成熟群	23.68(6.98)	40.66(7.31)	38.53(4.94)
「関係性」優位群	32.91(7.06)	46.85(6.36)	31.89(6.11)
「個」優位群	32.78(7.61)	49.64(7.20)	31.45(6.85)
未熟群	44.07(6.68)	58.92(7.32)	24.60(6.18)
<i>F</i> 値	90.59**	77.04**	58.28**
(多重比較)	(1<3,2<4)	(1<2,3<4)	(4<3,2<1)

注) 多重比較の欄の、1は成熟群、2は「関係性」優位群、3は「個」優位群、4は未熟群を示す。
()内は、標準偏差を示す。
** $p<.01$

った結果、クラスタの主効果が認められた ($F(3,291) = 77.04, p < .01$)。引き続き下位検定 (Tukey 法) を行ったところ、「関係性」優位群と「個」優位群の間以外に、1%水準で有意差が認められた (Table 3-3)。なお、「関係性」優位群と「個」優位群の間には、有意傾向が認められた。特性不安尺度は、得点が高いほど特性不安が高い状態と解釈されるため、成熟群に属する青年が、最も特性不安が低く、未熟群に属する青年が、最も特性不安が高いことが示された。

自尊感情尺度についても同様に分析を行ったところ、クラスタの主効果が認められた ($F(3,291) = 58.28, p < .01$)。引き続き下位検定 (Tukey 法) を行ったところ、「関係性」優位群と「個」優位群の間以外に 1%水準で有意差が認められた (Table 3-3)。自尊感情尺度は、得点が高いほど自尊感情が高いと解釈されるため、成熟群に属する青年が、最も自尊感情が高く、未熟群に属する青年が、最も自尊感情が低いことが示された。

4. 考察

クラスタ分析の結果、「個」と「関係性」の視点から、4つのアイデンティティ様態が抽出された。

各様態に属する青年の性別と学年について検討した結果、性別や学年は、いずれの様態に属するかとは関連がないことが示唆された。

成熟群は、全ての下位因子得点が平均よりも高い群であり、「個」と「関係性」両方が高いと考えられる。これを支持する結果として、同一性混乱尺度の得点は4様態中最も低かった。また、特性不安は低く、自尊感情は高いという結果も得られており、4様態の中で、最も精神的健康度が高い群であることが示された。

「関係性」優位群は、全体的に「関係性」尺度の下位因子得点が高い群であり、「個」に対して「関係性」が優位な群と考えられた。同一性混乱尺度、特性不安尺度、自尊感情尺度の得点は、成熟群と未熟群の間に位置し、「個」優位群と類似した特徴を示した。

「個」優位群は、全体的に「個」尺度の下位因子得点が高い群であり、「関係性」に対して「個」が優位な群と考えられた。同一性混乱尺度、特性不安尺度、自尊感情尺度の得点は、「関係性」優位群と同様の特徴を示した。

未熟群は、全ての下位因子得点が平均よりも低い群であり、同一性混乱尺度の得点は4様態中最も高かった。また、特性不安は高く、自尊感情は低いという結果も得られ、4様態の中で、最も精神的健康度が低い群であることが示された。

以上より、各様態の特徴が数量的に示された。特に、成熟群と未熟群との間に、他の尺度の得点差が認められた。あまり大きな差のみられなかった「関係性」優位群と「個」優位群については、下位因子得点の高

低を詳細に検討し、それぞれの特徴を以下に記述した。

「関係性」優位群は、「自己信頼」、「将来展望」、「世界信頼」が低く、「自律性」、「見捨てられ不安」、「自己定位」が高い群である。後者は、ほぼ全て逆転項目から構成される因子であり、この点が、「関係性」優位群の特徴と考えられる。つまり、「関係性」優位群の青年は、肯定的表現の項目に対しては否定的に回答し、否定的表現の項目に対しては肯定的に回答する傾向があり、はっきりとした「関係性」優位や「個」優位を示さない可能性がある。以上のことから推測すると、本研究で「関係性」優位群とした青年たちは、自己の基盤感や世界に対する信頼感を明確に表明しにくい、つまり基盤感や信頼感に関する不安を否認している可能性が考えられる。

「個」優位群は、「自律性」、「見捨てられ不安」、「自己定位」が低く、「自己信頼」、「将来展望」、「世界信頼」が高い群である。しかし、「自己信頼」の得点はあまり高くなく、「自律性」と「自己定位」の得点もあまり低くないことから、「将来展望」と「世界信頼」が高く、「見捨てられ不安」の得点が意味する見捨てられ不安のなさが低い、つまり見捨てられ不安が高い群と考えられる。自己を過去から未来の歴史性において捉え、また関係に支えられている自己を意識しており、「個」と「関係性」における自己像は捉えられていると推察される。しかし、一方で、見捨てられ不安が高い傾向があり、他者から離れて自立していくことに対し、不安を感じる特徴も持つ。「関係性」優位群と逆の得点配置を示したことから、肯定的表現の項目には肯定的に、否定的表現の項目には否定的に回答する傾向がある。つまり、文脈に即した反応を取りやすく、周囲に支えられている状態が適応の一因になっていると考えられる。自立への不安はこうした観点からも推察され、青年期における再接近期危機の再

燃のようなアンビバレントな状態像が読み取れる。

以上のように，下位因子得点の様相からは，「関係性」優位群と「個」優位群の，単純に「関係性」優位，「個」優位ではない状態像が示唆される。今後，尺度に関する検討，4 様態に関する検討を進める中で，下位因子得点がばらついた状態の群についても，より詳細に検討していく必要がある。

第 2 節 4 様態の対人関係にみられる特徴の分析（研究 2-2）

1. 目的

研究 2-2 は，これまで実証的検討が少ない「関係性」の領域である対人関係に関する語りから，4 様態の特徴を質的に分析することを目的とした。まず，対人関係の在り方全般について分析を行い，その後，より詳細に 4 様態それぞれの特徴を検討するために，対人関係上の困難に焦点を当てて分析を行う。4 様態の特徴を明らかにすることにより，研究 1-2 までで作成した尺度の有用性を検討する。

なお，対人関係に着目した理由として，以下のことが挙げられる。第一に，アイデンティティを捉える新たな視点である「関係性」の側面は，最も直接的には，対人関係に反映されると考えられる。また，鑪他（1984）の言及から，青年のアイデンティティの形成・確立自体が，対人関係の文脈で捉えやすいことも考えられる。さらに，アイデンティティの様相を対人関係の観点から検討した研究（杉村，2001 など）や，アイデンティティと対人関係との関連を検討した研究（金子，1995 など）が散見されることから，「個」と「関係性」のバランスによっても，対人関係の在り方に相違がみられることが予測される。

2. 方法

(1) 調査対象

研究 2-1 で抽出した 4 様態各 5 名，計 20 名（男性 9 名，女性 11 名，平均年齢 20.0 歳， $SD=1.03$ ）。この 20 名は，面接調査への協力に応じた学生のうち，男女比を考慮した上で，ランダムに選出した。対象者のプロフィールを Table 3-4 に示す。

(2) 面接調査手続き

1 回 90～120 分の個別の半構造化面接を行い，同意を得た上で，全ての語りを録音した。調査実施後，全ての対象者の逐語記録を作成した。質問項目は，対象者の対人関係の在り方や，それに対する評価・考え方などを幅広く聴取するための，次の 5 つ。①現在，関わりのある周囲の他者との関係，②現在，最も関わりの深い他者との関係，③他者との関わりで困難だった出来事，④過去に関わりの深かった他者との関係（小

Table 3-4
研究 2-2 の対象者のプロフィール

様態	対象者	性別	年齢	学年	学部	居住形態
成熟群	A	男性	18	1	経済	1人暮らし
	B	女性	20	3	教育	1人暮らし
	C	男性	21	3	教育	3人暮らし
	D	女性	21	4	教育	1人暮らし
	E	女性	21	3	法学	1人暮らし
「関係性」 優位群	F	女性	21	3	教育	1人暮らし
	G	男性	21	2	教育	1人暮らし
	H	女性	19	2	総合科学	2人暮らし
	I	男性	20	3	教育	1人暮らし
	J	女性	20	3	教育	1人暮らし
「個」 優位群	K	男性	10	2	経済	自宅
	L	男性	20	2	教育	1人暮らし
	M	女性	22	2	教育	1人暮らし
	N	女性	20	3	教育	1人暮らし
	O	男性	19	2	教育	1人暮らし
未熟群	P	男性	19	1	経済	自宅
	Q	女性	20	3	教育	1人暮らし
	R	女性	19	2	教育	1人暮らし
	S	女性	19	2	教育	1人暮らし
	T	男性	21	4	教育	1人暮らし

学校入学前，小学校，中学校，高校)，⑤一人でいる時の過ごし方。調査時に用いた質問マニュアルを，Table 3-5 に示す。

調査場所は，大学内の共同研究室と心理臨床教育研究センターの面接室，学生相談室の中の一室であった。

調査時期は，2005年7月から9月であった。

倫理的配慮として，調査場所には，いずれも第三者の出入りのない場所を選択し，調査開始前には，プライバシーの保護や録音等について記載した面接承諾書に署名を求めた。なお，本研究の実施と結果の公開に際して，広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た。

(3) 分析手順

逐語記録から各対象者の対人関係に関する語りを文章単位(1~3文程度)で抜き出し，小嶋(2004)や渡邊・岡本(2006)，川島(2008)のカテゴリ生成法を参考にし，様態ごとに類似した語りをグルーピングしカテゴリ化した。この時，西條(2004)や大谷・無藤・サトウ(2005)が述べるように，対象者が語る現象に“内在する意味を見出す“，つま

Table 3-5
対人関係に関する質問マニュアル

-
- ①現在，〇〇さんと関わりのある人を教えて下さい。家族や友人などです。
 - ②現在，〇〇さんにとって一番重要な他者とは誰ですか。その方との関係について，話せる範囲で思いついたことを話してください。
 - ③では，それ以外の人との関係について尋ねます。
 - 家族(親，兄弟，その他)
 - 友人
 - 恋人
 - その他(バイト先の人やサークルの人など)
 - ④これまでの人との関わりの中で，困難に感じた出来事と，その時の対処法について教えてください。
 - ⑤各時期の重要な他者についてお伺いします。その方との関係について話せる範囲で思いついたことを話してください。
 - 小学校入学まで
 - 小学生
 - 中学生
 - 高校生
 - ⑥一人でいる時の過ごし方について教えてください。例えばどんなことをして過ごすことが多いですか。
-

り，どのような心理状態が語りに表れているかに着目した。

抜き出した語りの数は，成熟群 163 個，「関係性」優位群 184 個，「個」優位群 174 個，未熟群 197 個であった。以下に，分析の詳細な手順を示す。

- ①抜き出した語りを，1 枚のカードに 1 つずつ記入した。
- ②カードを机上にランダムに並べ，記入してある語りを何度も読み，意味の近いと考えられるカードを収集してグループ化した(第 1 段階)。この時に，類似したまとまりが他にみられないと判断された語りについては，いずれかのカテゴリに無理に当てはめることはせず，小数であっても 1 つのカテゴリとした。
- ③収集したカード全体を見渡し，それらに共通するテーマ（そこに表れている心理的な意味）をカテゴリ名とし，1 つのグループに 1 つつけた。この作業を全てのグループに対して行い，各様態の下位カテゴリを構成した。
- ④下位カテゴリを記したカードに対し，②と③の作業を実施した（第 2 段階）。この時点で，各様態のカテゴリ数は，12～24 個であった。
- ⑤さらに④で得られたカテゴリに対して，もう一度同じ作業を行い（第 3 段階），最終的なカテゴリを構成した。なお，作業を通して，常に逐語記録や抜き出した語りに戻り，それらを参照しながら作業を進めた。この時点で，各様態のカテゴリ数は 3～5 個であり，これらを各様態の特徴を表すカテゴリとした。

以上の作業を，筆者と臨床心理学を専攻する大学院生 6 名の計 7 名で行った。

後日，最終的に抽出されたカテゴリの信頼性を確認するために，臨床心理学専攻の大学院生 2 名が 7 割の語りを独立して再分類し，評定一致

率を算出した。再分類の際には、筆者が作成した評定マニュアルにより、それぞれのカテゴリの特徴と第 2 段階のカテゴリを提示した。なお、7 割の語りを再分類した理由として、全ての語りを再分類する作業の負担と、先行研究において、何割かの再分類をもって評定一致率が算出されていることが挙げられる（藤崎・倉田・麻生，2007；杉村，2001；山岸，2004 など）。これらの先行研究から、7 割以下の語りの評定一致率をもって、分類の信頼性を確認することは妥当と考えられた。一致率は、成熟群 78.7%，「関係性」優位群 81.0%，「個」優位群 86.6%，未熟群 88.7% であり、分類の信頼性が確認された。なお、分類が一致しなかった場合は、筆者と再分類を依頼した大学院生の 3 名で協議の上分類を行った。以降で示す結果は、一致率算出後のものである。

次に、質問項目の③「他者との関わりで困難だった出来事」に関して、上記の分析後、別の視点から以下の手順で再度分析を行った。

まず、対人関係上の困難に関する各対象者の語りから、困難な出来事の内容について 1 人ずつ語りを要約した。要約から、対象者ごとに困難の内容を表すラベルをつけた。要約の際に使用した語りの数は、対象者 1 人あたり 1～5 個、計 47 個であった。

また、その困難が生じた時期と困難を感じた相手についても整理した。なお、1 人の対象者が複数の困難を挙げた場合もあり、Table 中の該当数の合計が 5 を超える様態も存在した。

次に、困難への対処の仕方については、該当する語りを文章単位（1～3 文程度）で抜き出し、上述の全体のカテゴリ生成と同様の手順で 2 段階のカテゴリ化を行った。抜き出した語りは計 79 個であり、第 1 段階のカテゴリ化で 18 個、最終的に 8 個のカテゴリが抽出された。

後日、上述の全体のカテゴリ生成時と同様の手順で、評定一致率を算

出した。一致率は、74.7%であり、分類の信頼性が確認された。分類が一致しなかった場合は、筆者と再分類を依頼した大学院生2名の3名で、協議の上分類を行った。以降で示す結果は、一致率算出後のものである。

3. 結果

(1) 対人関係に関する語りにみられる4様態の特徴

対人関係全体の分析の結果、各様態3～5個のカテゴリが得られた (Table 3-6)。様態ごとにみたカテゴリへの該当者数を Table 3-7～Table 3-10 に示す。

以下に、まず様態ごとに対人関係全体の分析で得られたカテゴリの特徴を記述するとともに、各様態の典型と考えられる対象者1名を事例的に分析し、各様態の特徴を示した。なお、分析を様態ごとに行ったため、複数の様態に同名のカテゴリが存在する場合でも、様態ごとにその質的意味は異なり、全ての様態に共通した普遍性のある名称ではない。

Table 3-6
対人関係に関する語りから得られた各様態のカテゴリ

様態	カテゴリ
成熟群	①関係への満足と安心感、②相互に独立した他者の認識、 ③自他の視点の分化と他者への配慮、④周囲への不満と自己内緩和、 ⑤一人でいることへのアンビバレントな気持ち
「関係性」 優位群	①他者への信頼感、②相互尊重、③表面的な対人関係を志向、 ④他者からの被影響性、⑤自己と他者の融合
「個」優位群	①関係の深まりへの拒否、②特定の他者への信頼感、③対人関係の広がりを志向
未熟群	①親密な関わりの拒否・回避、②関わることへの不安、③不安定な家族関係、 ④特定の他者への信頼感

1) 成熟群の対人関係に関する語りから抽出されたカテゴリ

成熟群では、分析の結果、第1段階で30個、第2段階で12個、第3段階で5個のカテゴリが抽出された。その結果を、Table 3-7に示す。

最終的に抽出された5つのカテゴリについて、第1段階のカテゴリごとに対象者の語りの例を示しながら検討した。以下、語りの例中の()は筆者の補足を、・・・は中略を、語り末の[]に、その語りが該当する第1段階のカテゴリと対象者を表すアルファベットを示す。

① 関係への満足と安心感

友人、家族、教師など、周囲の他者や環境に対する満足感やそこで感じる安心感、信頼感を示す語りが全ての対象者にみられた。重要な他者などの特定の他者との関係のみではなく、幅広い他者や環境との関係にも言及された。

「(サークルは)居心地がいいっていうか、仲いい人も何人かいて、求められてる感じだけど、いていいんだなみたいなのが。それが安心してるところがあるので、サークルは大事っていうか、入っててよかったなって。[関わりの中で感じる居心地のよさ：E]」

「(7,8年来の付き合いのある仲間)誰がどうこう、嫌い好きとか関係なく絶対的なものだと思うんで、自信になりますね。自分のこと分かってくれるやつ、そんだけおるっていう意味で。[他者への信頼感：C]」

「うちは結構みんな仲が良くって。家族はここで良かったなというのはすごい思うんですけど。なんかよく女の子、お父さんが嫌いになったりするとかって言うけど、私はそれもなかったし。[ポジティブな家族観：B]」

「高校の時の先生は結構熱心で。うっとおしいぐらい熱心でしたからね。あんまり好きにはなれなかったけど、尊敬はしましたね。[ポジティブな教師観：A]」

「仲がいい友達っていても、結構無駄話とか、そういうおしゃべりの時間を楽しむみたいな感じで。で、最近あったこととか、そこまで重要なことを話すっていうわけではなくって。結構日常会話みたいなのを中心ですね。[他者との関わりを楽しむ：D]」

Table3-7
成熟群の対人関係に関する語りの分析結果

最終的なカテゴリ	第 1, 2 段階のカテゴリ	A	B	C	D	E	合計	
①関係への満足と安心感 (5人)	関係への満足	●	●	●	●	●	5	
	関わりの中で感じる居心地のよさ	他者への信頼感	○	○	○	○	○	
		ポジティブな家族観	○	○	○	○	○	
		ポジティブな教師観	○	○	○			
	他者との関わりを楽しむ	●			●		2	
	人全般に対する信頼感	●		●			2	
	人が好き	楽観的	○		○			
		自己開示への低い抵抗感	○					
	広い対人関係を志向	●		●	●		3	
広い対人関係を志向	対人関係に関する広い視点	○		○	○			
		○		○				
狭く深い友人関係		●	●	●		3		
②相互に独立した他者の認識 (5人)	相互尊重	●	●	●		●	4	
	相違を踏まえた信頼感	ライバル関係	○				○	
		自他の区別(ポジティブ)			○			
	他者への配慮	●	●	●			3	
	他者への配慮	関係作り・維持での他者への配慮	○	○				
	対人関係における内省的態度		●	●	●		3	
対人関係での積極性	●	●				2		
関わりへの熱心さ	積極的な関わり	○						
			○					
③自他の視点の分化と他者への配慮 (3人)	自他の視点の分化と他者への配慮		●		●	●	3	
	他者への気遣い	人見知り		○				
		同調		○				
		自分の印象をよくしたい				○		
④周囲への不満と自己内緩和 (4人)	周囲への不満と自己内緩和	●	●		●	●	4	
	満足の中にある家族に対する不満	周囲の環境への批判		○			○	
		教師に対する批判	○			○		
		満足の中にある周囲への不満	○	○			○	
⑤一人であることへのアンビバレントな気持ち (4人)	一人であることへのアンビバレントな気持ち		●	●	●	●	4	
	一人であることへのアンビバレントな気持ち	一人であることへのポジティブな気持ち		○			○	
		他者を希求		○		○	○	

注) 第 1, 2 段階のカテゴリ欄の、左寄りの大文字が第 2 段階のカテゴリを、右寄りの小文字が第 1 段階のカテゴリを示す。また、●は第 2 段階の、○は第 1 段階のカテゴリに該当する語りがみられたことを示す。

「基本的に人が好きなんで。・・・まず嫌いな奴はいないっすからね。よっぽどひどいことしたやつは嫌いですけど。そんな筋が外れてない限り、その人のこと嫌いにならないですね。
[人が好き：C]」

「人間関係で悩んだことないな。友達関係で悩んだことがないっすね、多分。周りに恵まれましたけどね。[楽観的：C]」

「自分のことではない人のことではやっぱり話しづらいとか言っちゃいけないとかあるんですけど、自分のことだったら別にないかなっていう。[自己開示への低い抵抗感：A]」

「友達が中学校、高校と多かったし、みんなが統一した話題を持ってないっていうこともないんですけど、グループってやっぱ生まれるじゃないですか。グループ、グループ、グループ、でいるところに、僕がわーって（行く）。色んなグループに何故か入ってたみたい。・・・そういう（一つのグループで固定の深い話をする）のも楽しいんですけど、色んな話が聞けたら面白いじゃないですか。[広い対人関係を志向：A]」

「僕完全に全体的に見る方なんで。今でも多分その根本は変わってないと思いますけど、ただ見ようと思うようになりましたね。とか、自分が言っても自分でフォローできるようになったのもありますね。[対人関係に関する広い視点：C]」

「小学校の時は、大人数でいたらあんまり私はしゃべらないタイプで、2人になったら安心してしゃべれるんですけど。今は逆に多い方が、もうばーっとしゃべって、少ないとなんか落ち着けるっていう感じになった。[深く狭い友人関係：B]」

②相互に独立した他者の認識

相互尊重や対人関係における内省的態度など、対人関係において他者を相互に独立した存在として認識し、関わっていることが表れた語りが全ての対象者にみられた。「関係性」優位群においても相互尊重はみられたが、意見をぶつけ合うことによる理解などやや思考のみの相互理解・尊重であるのに対し、成熟群の相互尊重は、互いの違いを認めた上で、それを前提として信頼関係を結んだり受容したり、さらに生産的なライバル関係を結ぶことも含んでいる（事例 A, B, E）。

「（重要な他者である高校からの友人とは）性格全然違うから全然合わないと思ったんですけど、意外と。[相違を踏まえた信頼感：A]」

「(小学校から高校まで同じ学校だった友人とは)ライバルじゃないけど、いい刺激っていうか。ほとんど一緒に帰ったりもしてて、負けたくないけど、でも仲いいっていうかいい人で。尊敬じゃないけど大事っていうか。いい友達だなあっていう人ですね。[ライバル関係：E]」

「頑張れば報われるなーと思っと思ったけど、報われんこともあるなあ。自分がすごい好きでも好きになってもらえんし、自分はまあ好きやけどっていうのに好きになってもらえることもあるしみたいな。気持ちだけじゃどうもならんっていうのを感じましたね。[自他の区別(ポジティブ)：C]」

「(以前仲の良かった友人が転類した時)すごく寂しかったですけど、でもその子がそうしたいって言ったから。他のみんなはやっぱり寂しいけ行かんでやとか言っと思ったんですけど、その子がずっと長い間悩んでたんですよ。・・・そういうのを知ってたから、あんまり行くなとも言えず。[他者への配慮：B]」

「人見知りされた時にちょっとまづったなって思います。しまった、この人見知りだみたいな。でもそのまま終わったらなんか嫌じゃないですか。じゃあごめんとか言って終わるのも嫌だから、またずっと話してたりって感じですかね。[関係作り・維持での他者への配慮：A]」

「中学校の時とか、ほんと自己中だったんで。けどキャプテンとかやったりして、そういう言う力だけ持ちちゃってたんで。僕が嫌な思いさせたことは多分あるんですけどね。[対人関係での内省的態度：C]」

「(相談されると)その時はその人のこと考えたりしちゃうんで、後から俺何しよんやみたいな。後から思うんですよね。終わった後ぐらいに、ああ時間の無駄したわみたいな。自分のことなんでやってないんじゃないかって思いますね、人のことばっかりかよみたいな。[関わりへの熱心さ：A]」

「(不登校の友達)そういう子には結構苦労したっていうか、やっぱり学校来て欲しいし、こっちとしても。でもその子はこっちが来てって言ってもそんな言葉でなんか動くような子ではなくて。[積極的な関わり：B]」

③自他の視点の分化と他者への配慮

他者と関わる際に、他者の視点や見方にも目を向け、時には配慮して関わることを表す語りを含む。結果的には他者への気遣いや配慮という形の言動になるが、その前提として自他の視点が分化していることが語りに表れている。なお、成熟群であっても、他者の目や視点を気にするという青年期的な特徴はみられることも示された。また、他者の視点を

重視する理由として、嫌われることへの拒否感や自分の印象をよくしたいという思いが示される語りもみられた（事例 B, D, E）。

「（不登校の）その子の機嫌を損ねないようにしようとしてるのが自分でも分かるから。だからこんなにこの子の機嫌をとってどうするのかなと思ったり。【他者への気遣い：B】」

「今全然知らない人とか会ったら、しばらくは距離を置いてるかもしれないです、一歩引いて。・・・ある程度相手がどういう人かなってというのが分かったら、話したりとか。相手の様子見みたいなどころはあるかなと。【人見知り：B】」

「私がよく相手の気分を引きずられることがあって。向こうが落ち込んでたら、なんか私も『ああ』みたいな感じになって。【同調：B】」

「（自分は先入観を持たれやすく）友達の方がそういう抵抗を持ってるから、最初のうちは優しめに接する。【自分の印象をよくしたい：D】」

④ 周囲への不満と自己内緩和

家族や周囲の他者に対しての不満や批判と、それを自分の中で緩和していることを示す語りが含まれる。「① 関係への満足と安心感」にあるような肯定的な感情が語られる一方で、不満や批判なども同時に語られた（事例 A, B, D, E）。

「お父さんが我儘だったりとか。・・・仕事のことにしてもよく転職をしたりとか。今は落ち着いてくれてるからいいんですけど、やっぱり自分的には不安ですよ、いつまたやめるとか言い出すのかとか。【満足の中にある家族に対する不満：B】」

「学部の人みんなそんな感じで、下かーと思って見てますね。若いなあ。・・・私の浪人の1年を経験してないんだなあと思って、なんか純粹じゃないけど、幸せなんやろうなあと思って。・・・1年生の時はちょっときつかったですね、なんでここにおるんやろうと思って。その学部の友達とかは、幸せだなんて思うんですね。普通にこの大学を受けようと思って入って、それで学校楽しいなって思ってるんだろうなあと思って。だから負けたくないっていうのもあるんです。【周囲の環境への批判：E】」

「中学校の先生は本当に嫌いでした。・・・すごく公務員って感じがして嫌でした。授業だけすればいいや、じゃないですけど。あとえこひいきもありましたしね。それえこひいきやんみたい。【教師に対する批判：A】」

「(サークルは居心地はいいが) 私だけやってるんじゃないかみたいと思うんですよ。周りは考えてるのかなって、ちょっとたまに不安に思う時があります。・・・あんまりみんなが細かいことを気にしていない感じが。いつ何をやるのかそういうのを、私からいつもどうする? どうする? って言ってる感じがして。[満足の中にある周囲への不満: 事例 E]」

⑤一人であることへのアンビバレントな気持ち

一人であることへのポジティブな側面とネガティブな側面の両方を語る対象者が存在した(事例 B, E)。関わりを持つことのいいところと悪いところの両方を並列して語り、結果的には両方ある現状に満足している。

「人といると楽しいですけど、やっぱり疲れるところもあって。だから、できるだけ一人の時間は作っときたいし、夜にみんなで集まるのも、一人の時間がなくなるから、私は嫌で。[一人であることへのアンビバレントな気持ち: B]」

「(一人である時は) 関係から解放されて、友達とかも。色々考えるっていうか、時間をおくじゃないけど、そういう時間も必要かなと思ったり。[一人であることへのポジティブな気持ち: E]」

「(一人で家にいるのが嫌いなのは) 寂しがりやなんですかね。[他者を希求: C]」

2) 成熟群の典型事例

次に、成熟群の典型と考えられる対象者 B について事例的に検討する。引用した語りの末尾の[]は、第 1 段階のカテゴリを示す。

【事例 B, 20 歳, 女性, 教育学部の 3 年生。両親と弟の 4 人家族で, 調査時は 1 人暮らし。調査時に関わりのある他者として, 家族, 大学の同じ専攻の人たち, アルバイト先の人たちが挙げられた。】

「①関係への満足と安心感」に分類された語りが、友人や家族、教師との関係においてみられた。「辛かったこととかも結構言い合うし。人に

はちょっと、プライドが高くて言えないようなことも言ったりとかはしますね。【他者への信頼感】と友人との関係が振り返られた。また、「うちは結構みんな仲が良くって。家族は、ここで良かったなというのはすごい思うんですけど。なんかよく女の子、お父さんが嫌いになったりするとかって言うけど、私はそれもなかったし。【ポジティブな家族観】と、家族との安定した関係も語られた。

「②相互に独立した他者の認識」では、親友との関係を「お互いライバルみたいな感じで。・・・仲はいいですけど、互い自分が頑張ろみたいなところがあって。もちろん助け合うこともするんですけど。【ライバル関係】と語り、「ライバル」という言葉を使い、互いの相違を超え、より生産的な関係を築いていることが示唆された。

「③自他の視点の分化と他者への配慮」では、「(不登校の) その子の機嫌を損ねないようにしようとしてるのが自分でも分かるから。だからこんなにこの子の機嫌をとってどうするのかなと思ったり。【他者への気遣い】と、やや過剰な他者への気遣いが語られた。これは相互に独立した他者の認識に至る過程にみられる状態と考えられ、事例 B では②と③の両方に語りがみられた。

「④周囲への不満と自己内緩和」では、「お父さんが我儘だったりとか。・・・仕事のことにしても、よく転職をしたりとか。今は落ち着いてくれてるからいいんですけど、やっぱり自分的には不安ですよ、いつまたやめるとか言い出すのかとか。【満足の中にある家族に対する不満】と、安定した家族関係の中にある不満にも言及された。

「⑤一人でいることへのアンビバレントな気持ち」として、「2人でもやっぱりいるのといないのとじゃ全然違うから。いない方がそりゃ、楽っちゃ楽だし。確かに一日中一人は、寂しいなと思う時もありますけど。

一日会わなかったらその次の日は、すっごい私しゃべったりするらしくって。[一人でいることへのアンビバレントな気持ち]と一人でいることのポジティブな側面とネガティブな側面と両方が語られた。

以上を総合すると、事例 B は家族をはじめとする周囲の他者との安定した関係とそれまでに培われてきた信頼感を基盤に、ライバル関係の構築、満足した中にもある不満の言語化、一人でいることの良し悪しの認識がなされている。その一方で、他者への気遣いを示す語りもみられ、自他の融合を脱し、完全に独立した存在としての他者認識に至る途中であることが示唆された。

3) 「関係性」優位群の対人関係に関する語りから抽出されたカテゴリ

「関係性」優位群では、分析の結果、第 1 段階で 34 個、第 2 段階で 15 個、第 3 段階で 5 個のカテゴリが抽出された。その結果を、Table 3-8 に示す。最終的に抽出された 5 つのカテゴリについて、第 1 段階のカテゴリごとに対象者の語りの例を示しながら検討した。以下、語りの例中の () は筆者の補足を、・・・は中略を、語り末の[]に、その語りが該当する第 1 段階のカテゴリと対象者を表すアルファベットを示す。

①他者への信頼感

友人や家族を中心とした他者への信頼感や、他者との信頼感を伴った関係を表す語りが含まれる。他者に信頼されている感覚と他者への信頼感の両方を語った対象者もいた (事例 F, H)。また、信頼を単なる仲のよさだけではなく、居心地がいいことや距離をおいても大丈夫という感覚からも説明している (事例 H, J)。さらに、教師や友人への尊敬の念も多く語られ、信頼関係にある他者に多大な影響を受けていると認識している (事例 G, H, J)。

Table 3-8
「関係性」優位群の対人関係に関する語りの分析結果

最終的なカテゴリ	第 1, 2 段階のカテゴリ	F	G	H	I	J	合計
①他者への信頼感 (4人)	他者への深い信頼感	●	●	●		●	4
	他者に信頼されている感覚	○		○			
	他者への信頼感	○	○	○		○	
	距離はあっても信頼できる			○		○	
	他者への尊敬の念		○	○		○	
②相互尊重 (4人)	相互尊重	●	●	●	●		4
	「個」としての相互理解	○	○	○			
	互いに違いを認める		○	○	○		2
	問題解決への積極性	●		●			
対人関係上の問題への積極的態度	○		○				
③表面的な対人関係を志向 (4人)	表面的な人間関係を志向		●	●	●	●	4
	対人関係に関する論理的・理性的思考		○				
	広く浅い付き合いを志向		○	○	○	○	
	希薄な家族観		○	○			
	内と外での使い分け				○		
	面白いこと至上主義				○		
	人任せ、流される		●		●	●	3
	人見知り				●	●	2
	偏見		●		●	●	3
	④他者からの被影響性 (5人)	個人化志向	●	●		●	●
一人が楽					○	○	
一人であることへのポジティブな評価		○	○				
割り切り			○		○		
人との関わりが面倒くさい		○			○		
自己解決			○		○		
他者からの圧力への反感		○	○				
集団苦手意識		●	●	●			3
自己主張		●	●	●			3
周囲の価値下げ		●	●		●		3
⑤自己と他者の融合 (3人)	他者との密着	●	●	●			3
	密着	○	○	○			
	同一化	○					
	入れ込み	○					
	自己開示のゆるさ	○					
	譲り合い		○				
	きょうだい葛藤	●					1
	孤独・寂しさ		●	●			2
	孤独で寂しい、居場所がない			○			
	深い対人関係を求める		○	○			
他者の目を意識	●		●			2	
他者の目を意識	○		○				
不信	○						

注) 第 1, 2 段階のカテゴリ欄の、左寄りの大文字が第 2 段階のカテゴリを、右寄りの小文字が第 1 段階のカテゴリを示す。また、●は第 2 段階の、○は第 1 段階のカテゴリに該当する語りがみられたことを示す。

「やっぱり一番信頼して、一番理解してくれるのは親だと思ってる。・・・あんたなら大丈夫でしょって認めてくれてる部分もあるから。それで自分もやっていけるっていうのがあるのかな。[他者に信頼されている感覚：H]」

「(Gさんと恋人) そんなにどっちも外れたものを持っているとは思わないんで。そんなに問題あることは今までないとは思いますが。・・・相手(恋人)を尊重しても大変なことにはならないっていうのはあると思います。[他者への信頼：G]」

「高校の時、やっぱり色々話した仲いい子は、離れても、距離を置いてても大丈夫っていう、自分なりの信頼感がある。・・・離れても、友達というか気持ちの色あせることがないし、忘れ去られることはないと思ってる。[距離があっても信頼できる：H]」

「(友人に) 全てにおいて私は結構影響されてて。常にその人は客観的にもものが見れる人で、考え方とかは結構影響されました。[他者への尊敬の念：J]」

②相互尊重

主に友人との関係において、互いの意見を伝え、その相違を認めようとすることや(事例F, G, H)、対人関係上の問題に積極的に取り組もうとする態度を表す語りがみられた(事例F, H)。

「(恋人とは) 基本的に僕たちはお互いの意見や考えをちゃんと言うんですよ、全部。こういう意見でこういう立場を自分はずっともっているっていうのを伝えて、それを分かった上で相手は行動するんで[「個」としての相互理解：G]」

「否定する意味じゃなくて、ただ相手に対してそうだよなって感じで、多分そんな感じだよなって理解を示すような感じで。・・・お互いの違いを否定することはないですね。[互いに違いを認める：H]」

「(友人関係でトラブルが生じた時) じゃ、うちがここフォローするけえ一緒頑張ろうやとか、やり方をアドバイスしたりとか。こうしたらいいでしょっていう風にはならなくて、一緒にやるっかっていう感覚が自分の中では大きいと思いますね。[問題解決への積極的態度：H]」

③表面的な対人関係を志向

他者との関わりにおいて、深く入り込まず、論理的な思考によって対処しようとするのが表れた語りが全ての対象者にみられた。また、相手によって関わり方を変えること(内と外を使い分けるなど)や他者に

対してステレオタイプを持って関わることも示された（事例 G, I, J）。

「（恋人とは）自分がどう思うからどうして欲しいとかじゃなくて、社会的にはこうするべきだし、これは正しいはずだからこうするべきだって感じで。・・・一般的に正しいとか、一般的に正しくなくてもそっちの方が正しいはずだとか、そういうのを優先するんで。[対人関係に関する論理的・理性的思考：G]」

「周りを見てたら、回りはすごい本当に仲良しって感じに見えるんですけど、そんなに深く仲良くなれないんですよ、多分私は。いつも、一緒にいるとかじゃなくて。・・・特定の人と仲良くとかじゃなくて、みんなと仲良くする感じ。広く浅くみたいな感じ。[広く浅い対人関係を思考：J]」

「うちの家族あんまり連絡しない家族なんですよ。・・・兄の消息を両親もあまり知らない。[希薄な家族観：G]」

「男友達といる時が騒いでて、彼女といる時は静かにしてます。・・・家にいる時は基本的にゆっくり生きてるんで。外に出るとテンションが上がって。[内と外での使い分け：I]」

「（人間関係では）面白いことはちょっと前提に。・・・普通の会話してたからもたない時がある。・・・なんなんですかね。体が欲してるんですかね。[面白いこと至上主義：I]」

「（友人関係で）のけ者にされた時は、されたはされたでしょうがない。多分辛かったんだろうけど、しょうがないと思ってそんなにこだわらず。[人任せ、流される：J]」

「人見知りするので。例えば新しい場所に行った時に自分から声をかけられない。で、向こうからきてその人と仲良くなるっていうパターンが多いです。[人見知り：J]」

「同じ学年っていうのがあると、お互いをちゃんとみれないんですよ。自分と相手とは同じレベルでっていう意識があると思うんで。[偏見：G]」

④他者からの被影響性

他者との関係の中で他者から影響を受けやすく、その影響を拒否・排除しようとする事、集団に属することへの苦手意識などを表す語りが含まれる。行動的には、自己主張などポジティブに捉えられる側面でもあるが、他者との関わりが面倒などの、内面にある他者から距離を置こうとする気持ちを表す語りもみられた（事例 F, I）。

「(自分の) リズムがある中で、わざわざそれを崩す必要はないんじゃないかみたいな風に思ってるんですよ。[一人が楽：J]」

「僕は基本的に他人に干渉されることを好まないし、他人に干渉しない人間なんで。[一人でいることへのポジティブな評価：G]」

「とりあえず他人は他人で、自分は自分でやればいいやと俺は思ってるんで。[割り切り：G]」

「(他者に) あんまり干渉されたくないんで。自分の生活の中に入ってきそうな時は、面倒くさいなと思いますよね。[人との関わりが面倒くさい：I]」

「僕自身はあんまり人には相談とかはしないですね。・・・切羽詰るまでは自分で考えてますね。大体切羽詰る前に解決法は見つかる。[自己解決：I]」

「別に目立ちたくてそんなことをやってたわけじゃなくて、私はただしたいことをやってたのについて思って。・・・したいことをやっちゃいけないのかなって思ってた時もあったり。[他者からの圧力への反感：F]」

「(自分は) グループと常にいてずーっといてずーっといて、それがすごく楽しいと思える人ではなくて、それを辛いと感じてしまうのがあるんですよ。重荷になってしまう。[集団苦手意識：H]」

「自分がもしそれを正しいと思ってたら、結構反発とかして、『私はこういう理由でこういうことやったんだ』みたいな言い方をすごいする子だったので。[自己主張：F]」

「塾にいる子どもたちはすごい勉強してるんですけど、僕とあまり変わらなかったんですよ。で、僕は全然勉強してなくて、『世の中甘いなあ』とか感じたんですけどね。[周囲の価値下げ：G]」

⑤ 自己と他者の融合

主に両親や恋人との関係における、他者との融合や密着を表す語りがみられた(事例 F, G, H)。自己と融合した他者像を求めるため、深い孤独感を抱いていることも示された(事例 G, H)。また、他者の目を必要以上に気にすることも、このカテゴリに含まれた(事例 F, H)。

「(両親との関係が)深かったって言ったら変ですけど、あんまり距離を置いてない感じで。よく言えば仲が良かったんですけど、悪く言えばちょっとお互いに依存しすぎてる部分があって。[密着：F]」

「相手を相手として、一人の人として認めてるわけじゃなくて、自分の延長みたいな感じに捉えてしまうんですよ。自分の感情で相手を振り回してしまったり、でもそれが普通みたいな感じ。[同一化：F]」

「(現在仲のいい友人から以前本を薦められ、読んだ時)ものすごい自分も感動して、それで、こういう感覚っていいなと思って。それで、その人のことをすごい好きになって。[入れ込み：F]」

「私は結構話しやすいのかなって思いました、自分のことについて。抵抗がないのかなと思いました。[自己開示のゆるさ：F]」

「(恋人と)お互い一緒にいると、2人とも主体性がなくなる[譲り合い：G]」

「私は私で妹のことを羨ましいって思うところはあつて。でもそれはあえて言わないようにしてる。[きょうだい葛藤：F]」

「はっとして、私誰ももっていないんだっていう時があつて、それが無性に寂しいし、ああ自分だめだなと思う時がありますね。誰も残らないんだって思った時の無償の寂しさはきつい。[孤独で寂しい、居場所がない：H]」

「僕はその(一般的に言う)親友とかになるとこだけが友達だと思う。[深い対人関係を求める：G]」

「中学校の時は、自分がちょっと違うなっていうような・・・普通の感覚じゃないなっていうような部分があつて。ちょっとやってしまうと目立ってしまう部分、動いてしまうと目立っちゃうような部分があつただけで、そこ(高校)は変人の塊だったんで、自分が普通に生活してもまだ普通。もっとすごい人いるしっていうような感じで。自分の行動を気にしなくてよかったですね。[他者の目を意識：H]」

「(友人に)弱みを握られている。[不信：F]」

4) 「関係性」優位群の典型事例

以下に、「関係性」優位群の典型と考えられる対象者 G について、事例的に検討する。引用した語りの末尾の()は、第1段階のカテゴリを示す。

【事例 G, 21 歳, 男性, 教育学部の 2 年生。両親と兄, 妹の 5 人家族で,

調査時は 1 人暮らし。調査時に関わりのある他者として、学部の友人、他学部の友人、先輩・後輩、サークルの人たち、以前のアルバイト先の友人が挙げられた。】

「①他者への信頼感」について語られたのは、主に重要な他者として挙げられた恋人との関係においてであった。「相手を尊重しても変なことにはならないっていうのはある。[他者への信頼] という語りにみられるように、恋人との関係において信頼感を持っていることがうかがわれた。また、過去の友人や教師に対して、現在の自分に影響を与えた存在として尊敬の念が語られた。

「②相互尊重」も、主に恋人との関係に関する語りにおいて示された。「お互い納得できなかつたらだめになるんじゃないくて、お互い納得できなくても自分の意見をちゃんとやったんなら問題ないと思う。[「個」としての相互理解]」や「基本的に僕たちはお互いの意見や考えをちゃんと言うんですよ、全部。こういう意見でこういう立場を自分はずっともってるっていうのを伝えて、それを分かった上で相手は行動するんで。[「個」としての相互理解]」など、互いの意見を伝え合う関係にあることが示唆された。

「③表面的な対人関係を志向」では、下位カテゴリの「対人関係に関する論理的、理性的思考」に分類された語りが多くみられた。例えば恋人との関係においても、「自分がどう思うからどうして欲しいとかじゃなくて、社会的にはこうするべきだし、これは正しいはずだからこうするべきだって感じで[対人関係に関する論理的、理性的思考] 物事を決め、「一般的に正しいとか、一般的に正しくなくてもそっちの方が正しいはずだとか、そういうのを優先する。[対人関係に関する論理的、理性的思考]」様子が具体的に語られた。また、「うちの家族あんまり連絡しない家族なんですよ[希薄な

家族観]], 「兄の消息を両親もあまり知らない。[希薄な家族観]], 「あんまりお互いに干渉しない家族なんで。[希薄な家族観]] と希薄な家族関係を語っている。他者との関わり方について, 「そんなに深くは接さないようにしてるんですけど。[広く浅い付き合いを志向]] と表面的な関係を築いていることを自ら言語化している。

「④他者からの被影響性」については, 「僕は基本的に他人に干渉されることを好まないし, 他人に干渉しない人間なんで。[一人でいることへのポジティブな評価]] という語りや, 下位カテゴリの「自己主張」に分類された語りなどがみられ, 他者からの影響を避け, 個人としての自己の在り方を持ち, 他者との関わりの中でもそれを維持していることが示された。

「⑤自己と他者の融合」については, 恋人との密着した関係や過度の譲り合いの末の, 主体性の喪失が語られた。また, 「僕はその(一般的に言う)親友とかになるとこだけが友達だと思う。[深い対人関係を求める]] という語りにもみられるように, 自己と同じ感覚を有する他者との深い結びつきを希求していることも, このカテゴリに分類された語りにもみられた。

以上を総合すると, 事例 G は自他の融合を求める一方で, 他者に巻き込まれるのを恐れ, 個としての自己を主張し, 対人関係を知的に捉えることで表面的な関係を結んでいると推察される。この表面的な関係は家族との関係においてもみられ, 信頼感は主に恋人との関係で語られたのみであった。

5) 「個」優位群の対人関係に関する語りから抽出されたカテゴリ

「個」優位群では, 分析の結果, 第 1 段階で 31 個, 第 2 段階で 16 個, 第 3 段階で 3 個のカテゴリが抽出された。その結果を, Table 3-9 に示す。最終的に抽出された 3 つのカテゴリについて, 第 1 段階のカテゴリごとに対象者の語りの例を示しながら検討した。以下, 語りの例中の()

Table 3-9

「個」優位群の対人関係に関する語りの分析結果

最終的なカテゴリ	第 1, 2 段階のカテゴリ	K	L	M	N	O	合計	
①関係の深まりへの拒否 (5人)	表面的な関係を志向	●	●	●	●	●	5	
			○	○	○	○		
		○						
		○	○	○				
				○		○		
			○					
		○	○					
		○		○		○		
	物理的基準での“仲良し”	●		●	●	●	4	
		○				○		
		○		○	○			
						○	○	
	受身的な対人関係	●					●	2
	人間関係は相互作用と強く思う		●					1
	深い関係と浅い関係のギャップ		●	●				2
	目上の人に対する客観視			●			●	2
	一人でいることへの肯定的感情	●		●			●	3
	人付き合いが苦手	●		●			●	3
		○		○			○	
		○						
		○					○	
	深い関係を築くことへの困難さ	●	●	●			●	4
		○	○	○				
			○					
			○					
人間関係の重要視			●				1	
不信	●						1	
柔軟性のなさ	●	●	●				3	
			○					
	○	○						
②特定の他者への信頼感 (5人)	信頼	●	●	●	●	●	5	
		○	○	○	○	○		
			○	○				
			○		○			
	限られた他者との深い付き合い		●	●		●	3	
両親へのアンビバレントな感情	●					1		
③対人関係の広がり志向(2人)	対人関係の広がりを志向		●		●		2	

注) 第 1, 2 段階のカテゴリ欄の、左寄りの大文字が第 2 段階のカテゴリを、右寄りの小文字が第 1 段階のカテゴリを示す。また、●は第 2 段階の、○は第 1 段階のカテゴリに該当する語りがみられたことを示す。

は筆者の補足を、・・・は中略を、語り末の[]に、その語りが該当する第1段階のカテゴリと対象者を表すアルファベットを示す。

①関係の深まりへの拒否

表面的で浅い対人関係を築いていることや（事例 K, L, M, N, O）、具体的な他者との関わりの深さを物理的な基準（頻度や時間）で説明することが多くみられた（事例 K, M, N, O）。プライベートなことは話さないなど、関わることへの強固な拒否感も語られた（事例 K, M, O）。

「部活だと、さらっと関わる人と、結構そんなに深くはないけどまあまあの内容をしゃべりあう人たちですよ。同じ学年よりは上の人としゃべるんですけど。[表面的な対人関係：M]」

「(表面的な付き合いの方が)私は楽です。たまに、その6人であるのも嫌な時もあるんですけど。イライラしてくるんですよ。団体行動が。元々好きじゃないんですけど。そういうちょっとしたことがイライラときてしまうんですけど。[表面的が楽：M]」

「(親とは)そんなに話はしないですね。・・・プライベートも別に話さないですし。ただ誰と遊びに行くって言ったら分かるんで。あまり遅くなるなみたいな感じで言うぐらいで、そんなに深くこちらには突っ込んでこないんで。[家族との表面的な関係：K]」

「仲のいい人は、大体入れ替わってる感じですね。小学校、中学校。[クラスが変わると友達も変わる：O]」

「(大学での友人関係は)広く浅い感じですかね。そんな深い関係を築いてないと思いますけど。・・・自他共に認めると思うんですけどね。むしろ広く浅い付き合いの方がいいかなと。[広く浅い関係：L]」

「他人のことに興味がないっていうのもあるんですけどね。[他人に関心がない：L]」

「(同じ学科の人とは)別に。本当に表面的なんで、もめることもなく、そういうことはないですね。学校に来てる時だけ、授業のこととか、個人的なことはあんまりしゃべらないみたいな。逆にそういうことになってくると、重たいんで。[プライベートなことは話さない：M]」

「その場その場での人付き合いはそんなに広くないなっていう。わりと数人くらいと仲良くっていう感じで。それ以上になるとやっぱり付き合いが浅くなるっていうか。[狭い関係：O]」

「(関わりのある他者は) あまり多くはないですね。特に仲のいい人たちは、今でも中学の人とか小学校の人たちとはつながりはありますし、ない人はほんとなみみたいな感じなんで。[長く続く関係：K]」

「(高校の時の友達とは) 受験の頃はほぼ一日中ぐらい、寝る時以外はぐらい一緒にいたんで。[ずっと一緒にいる：N]」

「これは話してもいいだろうみたいな感じで話してくれたりもするんで。相談にのる時は、相談みたいな感じでのってるんですけど、それ以外ではあんまり聞かないようにはしてますし。[受身的な対人関係：K]」

「(対人関係上の困難は) 相談された時が困りましたね。どうしたらいいと思うって言われても、俺が言ってもどうにもならないと思うけどっていうのは、最近、悩みってほどじゃないけど、面倒なことですね。[人間関係は相互作用だと強く思う：L]」

「(仲いい人とそうでない人とは) 違いますね。どう違うって言われても難しいんですけど、キャラが違うっていうか、キャラっていうか見せる部分が違うっていうか。ちょっと言葉では難しいんですけど、確かに違うと思いますね、自分が。[深い関係と浅い関係のギャップ：M]」

「先生も所詮人間だなと思いますけどね。[目上の人に対する客観視：M]」

「とりあえず一人でいるのは好きですね。逆に長い間人と関わると疲れるんで。私は一人の時間を大切にしています。[一人でいることへの肯定的感情：M]」

「(仲いい人との関係において) 聞いているだけなんで楽といえば楽なんですけど。あんまりしゃべるのが苦手。[人付き合いが苦手：O]」

「仲がよくなればそうでもないんですけど、人見知り激しいんで。・・・(出会ったばかりの人とは) 絶対っていうぐらい口開かないですね。・・・(関係作りには) 時間はちょっとかかりますね。[人見知り：K]」

「(同じコースの人とは) あんまり、そんなに関わりがないような。・・・(授業の時は) 結構1人だけ教室の前の方に座ってたりするんで。[集団への馴染めなさ：O]」

「自分の私生活っていうか、一人でいることに入り込まれるのは嫌。だから、根掘り葉掘り聞かれるのも、こういう場ならいいんですけど。他人に聞かれるのは嫌ですね。(他人から色々聞かれても) いや、何もないよ、とか。普通にあしらって終わりますけど。絶対話さないですね。聞かれても。[他人に尋ねられることが嫌：M]」

「さらっとした人間関係の方が、溜め込むんですけど、逆に言わないことで安心感があるっていうか。言ってしまったことの方が逆にちょっと不安になる時が多いかもしれないですね。[深い関係が築けない：M]」

「(相談を持ちかけられた時は)口では適当に言ってますよ、一応、多分。そんな当たり障りのないようなことを。うまくこの場を切り抜けようと思ってますよ。間違いなく思ってます。[その場しのぎの付き合い：L]」

「(バイト先は)いい関係だと思います。やっぱりバイト始めようと思った時も、人間関係が一番大切だと思って。昔からバイトしてきて。なんで入ってからそういう色んな人と付き合ってみて、結構いい人たちが多から当たりだったなと思うんですけど。[人間関係の重要視：M]」

「一時期人間不信な感じにもなったこともあるんで、それを引きずっているというか。あんまり人と必要以上に関わりたいくないなっているのは。[不信：K]」

「この人合わないなと思ったら、あんまりその人と関わらないようにするっていうか。逆に何かあったら、こっちが、私が我慢するかなみたいな感じが。(合わない人とは)関わらない。ほんとに表面的。お互い気まずいみたいな感じがする時もあるんですけど。[合わない人とは距離をとる：M]」

「仲のいい人は、自分がこれだっていうのを分かってくれてる人が多いんで、もう態度は変えようとは思いませんし。向こうも、友達の方も分かっているから、自分からも何も言わないですし。[態度を変えない：K]」

②特定の他者への信頼感

特定の他者、特に家族との安定した信頼関係に関する語りが全ての対象者にみられた。友人との関係における相互理解も、成熟群にみられた語りと類似しており、他者の異なる意見を受け入れることが可能である(事例 L, M)。また、大学入学後の家族との関係の変化について言及されることも多く、家族との関係を客観的に捉え肯定的な感情を持つに至っている(事例 K, M, N)。

「実家に帰った時とかに、やっぱり家族の中にいるのはいいなって思ったりとか。家の仕事を手伝って感謝されて嬉しかったりだとか。[家族への肯定的感情：N]」

「2人(自分と親友)とも立場(イベントの運営の役割)が違うんで、そこから葛藤っていうか、意識の違いとかそういうので。言い合いですけど、なんていうんですか、両方とも受け入れる感じなんですよ、反発じゃなくて。ああそれも分かる分かるっていう感じで。譲れないっていうのはあるかもしれないんですけど、一応意見はちゃんと聞き入れるんで。[相互理解：L]」

「(ピアノの先生は) レッスンに対しては厳しい先生だったんですけど、すごい尊敬してたから。【目上の人に対する尊敬・信頼：N】」

「ちょっと人には言いづらいことでも、この人なら言えるかなみたいな。そう思ったら、自分にとっては重い内容の話だと思ってるんで。【限られた他者との深い付き合い：M】」

「(就職の話で) それで親が納得するかっていうのもありますし。やっぱり育ててくれてる恩もあるんで、安心させるためには就職っていうのも考えてるんですけど。【両親へのアンビバレントな感情：K】」

③対人関係の広がりを目指

「①関係の深まりへの拒否」に含まれる表面的な関係を志向する傾向とも類似する、浅い付き合いでの関係の広がりを志向していることが示された(事例 L, N)。一つ一つの関係の深まりは回避し、また言及されないこともあるが、「ネットワーク(事例 L)」と表現されるような形で対人関係の輪が広がることを望んでいる。

「周りの人が専門的な知識を持ってる状態で、自分は広い感じの知識であればいいなっていうのが目的なんですよ、最終的な。スペシャリストが周りにいて、自分はオールマイティがいいんですよ。そしたら自分が色々対応できて、対応しきれない場合にスペシャリストに聞いたりとか。(そういう) ネットワークを形成したいんですよ。【対人関係の広がりを志向：L】」

「大学に入るまでは人付き合いであんまり困ったことはなかったんですけど、大学入って、・・・私結構行事とか好きなんで色々参加してたら、すごい一辺に友達が増えてしまって、もう覚えきれなくなっちゃって。・・・好きなんで、そういう色々関わるのが。たくさんの人とかと友達になるのも好きだし、みんなでワイワイするのが好きだったり。【対人関係の広がりを志向：N】」

6) 「個」優位群の典型事例

以下、「個」優位群の典型と考えられる対象者 M について、事例的に検討する。引用した語りの末尾の[]は、第 1 段階のカテゴリを示す。

【事例 M, 22 歳, 女性, 教育学部の 2 年生。両親と弟の 4 人家族で、

調査時は1人暮らし。調査時に関わりのある他者として、家族と部活動の人たちと、同じ専攻の友人が挙げられた。】

「①関係の深まりへの拒否」については、「(表面的な付き合いの方が)私は楽です。たまに、(大体いつも一緒にいる)その6人でのいるのも嫌な時もあるんですけど。イライラしてくるんですよ、団体行動が。元々好きじゃないんですけど。[表面的が楽]」、「(同じ学科の人とは)別に。本当に表面的なんで、もめることもなく、そういうことはないですね。学校に来てる時だけ、授業のこととか、個人的なことはあんまりしゃべらないみたいな。逆にそういうことになってくると、重たいんで。[プライベートなことは話さない]」、「(仲いい人とそうでない人とは)違いますね。どう違うって言われても難しいんですけど、キャラが違うっていうか、キャラっていうか見せる部分が違うっていうか。ちょっと言葉では難しいんですけど、確かに違うと思いますね、自分が。[深い関係を浅い関係のギャップ]」、「自分の私生活っていうか、一人でいることに入り込まれるのは嫌。だから、根掘り葉掘り聞かれるのも、こういう場ならいいんですけど。他人に聞かれるのは嫌ですね。[他人に尋ねられることが嫌]」、「さらっとした人間関係の方が、溜め込むんですけど、逆に言わないことで安心感があるっていうか。言ってしまったことの方が逆にちょっと不安になる時が多いかもしれないですね。[深い関係が築けない]」など、強い拒否感がうかがわれる語りが多くみられた。

「②特定の他者への信頼感」については、家族に対しての肯定的な意識や、「ちょっと人には言いづらいことでも、この人なら言えるかなみたいな。そう思ったら、自分にとっては重い内容の話だと思ってるんで。[限られた他者との深い付き合い]」と特定の他者への信頼感を示す語りがみられた。

「③対人関係の広がり志向」は、事例 M では直接的には語れなかったが、①より表面的でさらっとした関係を広く結んでいることが推測された。

以上を総合すると、事例 M は家族との肯定的な関係を語りつつも、日常的に結んでいる関係は非常に希薄なものであり、他者の介入に対する守りの堅さが語られた。自ら表面的な対人関係を好んでおり、「関係性」優位群の対象者のように知的に処理しようとはしていないが、強固な拒否・回避行動が示された。

7) 未熟群の対人関係に関する語りから抽出されたカテゴリ

未熟群では、分析の結果、第 1 段階で 32 個、第 2 段階で 24 個、第 3 段階で 4 個のカテゴリが抽出された。その結果を、Table 3-10 に示す。最終的に抽出された 4 つのカテゴリについて、第 1 段階のカテゴリごとに対象者の語りの例を示しながら検討した。以下、語りの例中の () は筆者の補足を、・・・は中略を、語り末の [] に、その語りが該当する第 1 段階のカテゴリと対象者を表すアルファベットを示す。

①親密な関わりの拒否・回避

他者に対する不信や、他者との関わりへの苦手意識と強い拒否感があり、他者との関わりが深いものにならないように関係から撤退する、もしくは関係を切るといった方法を用いることが示される語りが全ての対象者にみられた。

「自分がこんなに他人に依存し出したら、それはちょっとぞっとするなっていうのもありました。これだけ人の支えとか優しさとかを大事にしたら、ちょっと自分もたない。そういう限界を知ったり。もう勉強が恋人でもいいやというようなところはありませんね。[深い関係を築けない：Q]」

Table3-10
未熟群の対人関係に関する語りの分析結果

最終的なカテゴリ	第 1, 2 段階のカテゴリ	P	Q	R	S	T	合計	
①親密な関わりの拒否・回避 (5人)	深い関係を築けない		●	●			2	
	不信	●	●	●	●		4	
	対人関係の限定化		●	●		●	3	
	対人関係の限定化		○			○		
	他者と距離を置く		○					
	断ち切る		○	○				
	無力感	●						1
	人付き合いへの苦手意識		●				●	2
	浅い関係		●	●	●	●		4
競争心	●	●		●			3	
②関わることへの不安 (3人)	他者と関わることへの不安	●					1	
	人を傷つける不安	○						
	人に傷つけられる不安	○						
	攻撃性	●	●				2	
	悪気のない攻撃	○						
	他者への攻撃	○						
	過去の攻撃的な行動を反省	○	○					
	自責	●		●				2
孤独	●	●					2	
一人ぼっち	○	○						
友人不在	○							
③不安定な家族関係 (5人)	家族が重い		●			●	2	
	家族が重い		○					
	親子の密着					○		
	家族への特別な思い	●				●	2	
	家族との表面的な関わり	●	●	●		●	4	
	家族成員からの圧力	●				●	2	
	母親は特別であるという感情		●	●	●	●	4	
きょうだい葛藤			●			1		
④特定の他者への信頼感 (5人)	信頼関係を築いた特定の他者の存在		●	●	●	●	4	
	居場所の存在		●	●	●		3	
	ぶつかり合い					●	1	
	年上の尊敬する他者の存在					●	1	
	過去に一緒にいたので仲が良かった他者			●	●	●	3	
	ポジティブな家族観	●		●	●	●	4	
	家族への肯定的な思い			○	○	○		
	家族への気遣い	○			○	○		
	ポジティブな教師観	●				●	●	3

注) 第 1, 2 段階のカテゴリ欄の、左寄りの大文字が第 2 段階のカテゴリを、右寄りの小文字が第 1 段階のカテゴリを示す。また、●は第 2 段階の、○は第 1 段階のカテゴリに該当する語りがみられたことを示す。

「(いとこに) 私がその (いとこと同じ分野の) 勉強をまだ続けてることに関して、監視されてるといふか見られてるような感じはあります。表面上といふか、本当にばつと見仲のいい姉妹みたいな感じに思われるだけ、それはすごい自分で言ってもたまたま実感なくなる感じがします。本当に私ら仲いいのかなと思ったり。絶対に口には出さないです。どっちも多分思ってるような気はするんです。【不信：Q】」

「実際 4 年生になってから基本的に関わってるのって親と彼女とバイト先の人ぐらいなんですよね。あとこの間連絡取れた〇君とか。多分僕の周辺世界って 5 人ぐらいで回ってます。【対人関係の限定化：T】」

「基本的に距離を置くが基本だったんですよ。【他者と距離を置く：Q】」

「とりあえず私は友達にしても何にしても、仲が悪くなったら連絡を断つんですよ、しばらく。なので、そう真っ向から対決するようなことはないですけど。【断ち切る：Q】」

「自分が嫌なのは、自分が説明しても無駄で、力づくでやってもそれも通用しないというよな。つまりどうやってもだめになるというよな、それが嫌ですね、一番。【無力感：P】」

「わりと人間関係が狭いといふか、あまり新しく作ろうとはしなかったと思います。だから、どうしても高校までだと友人といふか、5,6 人、10 人未満が多分多くて。話す人はいるけど、仲いいのはこれぐらいっていう。【人付き合いへの苦手意識：T】」

「(友人と気まづくなった時) 向こうから連絡が来たら応じるし、もうそろそろいいかなと思ったらごめんねと、自分が悪くなくてもとりあえず謝る。【浅い関係：Q】」

「(コース内での行事の運営は) 同じ類、コースになってしまうと、目指すもの、やることがみんな一緒なので、競争心が出て、なんていふか難しいんですけど、やっぱ競争心ですかね。優劣をつけようっていふか。【競争心：S】」

②関わることへの不安

「①親密な関わりの拒否・回避」と同様に、行動には他者との関わりからの撤退として表れているが、その根底にあると考えられる他者と関わることへの不安が強く示される語りがみられた (事例 P, Q, R)。自他融合の感覚から生じると考えられる、人を傷つける不安や人に傷つけられる不安、他者に対する攻撃性などが語りに表れている。

「人と話す時も、なんていふか不安です。人と話をする時とかは、余計なことしないかなと。また不愉快にさせないかなと。させるんじゃないかなと。【人を傷つける不安：P】」

「そんなに嫌われますかねと思って。自分がそんなに嫌われますかねって。・・・小学校中学校の時はまだめちゃくちゃしてたので、嫌われる理由は分かるんですよ。でも別に高校の時とかに、めちゃくちゃしなくても嫌われてるので、一体どういうことでしょうか？めちゃくちゃどころか、何にも話したこともないのに、いきなり冷たいのとかって、一体なんだと。別に話したこともない、名前も知らないような奴なのにと。[人に傷つけられる不安：P]」

「例えばちょっと変なこととかいうか、すぐ色々文句つけたりもしてたんですよ、例えば先生とかに。なんか嫌なことがあったら、ちょっと言いにくいですね、先生人間じゃないよとか言ったんですよ。あとは、例えば夏休みに来るかとかって言われた時は、休みがつぶれるのも嫌だけど、先生の顔をもう1回見るのが一番嫌だとかってそういう風なことを言っていました。もちろんみんなに聞こえるようにわざとですね。[悪気のない攻撃：P]」

「(教科書販売の人が)なんか冷たい感じだったので、悔しいので、紙取ってきて教科書のところ丸したら、こうやって思いっきり丸めたんですよ。つまり探す時ってこうやって見て、あるか調べてこうやって取りますよね。だからこうやって丸めてたら開いてもすぐこうやってなりますよね。だから嫌がらせですよ。そうやってわざと丸めて固めて、はいこれどうぞって渡したんですけど、もちろんこうやって広げても戻るので。ちょっといたずらしました。[他者への攻撃：P]」

「小学生の時は何も知らなかったといえば楽しかったんですけど、今思い出すとやっぱりちょっとひどいことをしてたんで、あの頃には戻りたくないという感じですけどね。(小学校の頃は)悪いことしたなど。[過去の攻撃的な行動を反省：P]」

「(周囲の人たちが)急にそんな不幸な感じになって、まるで自分のせいみたいな・・・まるで自分が疫病神みたいな感じです。[自責：P]」

「(みんなが何してるのか分からないというのは)何をしてるかとかいうか、みんながどういう風に毎日いつも過ごしてるのかなあとか。みんな今何してるのかなあと思って。それで自分だけ取り残されてるような、自分だけみんなが何してるか分からないようなところに一人だけ年をとっているような、そんな感じがするんですよ。[一人ぼっち：P]」

「この学校に来た時も、授業以外ではすることがないので、別にどこかにいるというか、うろうろしてるんですよ、学校。友達いないんですよ、昔からなんですけど。[友人不在：P]」

③不安定な家族関係

不安定な家族関係に関する語りが多くみられ、その内容も多くが密着した関係やネガティブな関わりを示すものであったため、家族という特定の他者との関わりを1つのカテゴリとして取り上げた。年齢は青年期に至っても、他者との関わりのおよそ大半を家族が占め、そのことが他の他者との関わりにも多大な影響を及ぼしている(事例P, Q, R, S, T)。

「やっぱり家族は重いですね。こっちから連絡をよこさないとやっぱり怒るし。・・・(母親を)私を支えなくっては、みたいなところがあったのかもしれないです。[家族が重い：Q]」

「(両親から)勉強しろ勉強しろとかって言われると、反抗期の延長みたいな、すごくガキっぽい感じなんですけど、なって、親から連絡がくるとすごくイライラしてました。[親子の密着：T]」

「いつを通して一番関わりがあるのは家族なんですけど、そりゃ。[家族への特別な思い：P]」

「(母親には)相談も私がそれはちょっと遠慮してしまって。相談するなら友達って感じの。離れて暮らしてるから、その分向こうの家族に関係ない人たちの話は極力したくないなど。[家族との表面的な関わり：Q]」

「向こう(父親)が色々理屈使って色々言ってくるんですよ。で、こっちが反論したら、結局向こうは反論しないで、ああいいや、嫌ならいいんよって。ちょっとずるいですよね。自分は言いたいことははっきり言って、自分はそれに対して答えたのに、向こうはもう答えなくて、ああ嫌ならいいよ、じゃあいいいいって。ずるいです。昔からそうですよね。[家族成員からの圧力：P]」

「家族の中では、やっぱ一番はお母さんで。お母さんと私が一番顔とかも似てて、性格も似てて。仲良しって感じではないけど、お母さんのことは好きで。・・・(母親は)やっぱり、一番長く一緒に暮らしてるし。なんかお母さんは違う気がして。他の家族より、なんかちょっと違う気がする。[母親は特別であるという感情：R]」

「羨ましいとはちょっと違うかもしれないんですけど、結構やっぱ病気だったから、お父さんとかお母さんは結構お姉ちゃんの心配をしてるなっていうのが、結構ちっちゃい頃は思ってたけど、でも別にこっちばかりで私にはしてくれないとかじゃないから。なんか心配なんだなあとは。[きょうだい葛藤：R]」

④ 特定の他者への信頼感

上記まで3つの特徴をみるとネガティブなものが多いが、一方で特定の他者への信頼感が示された語りも全ての対象者にみられた。人数としては少なく、またどのような関わりかという点での言語化のレベルも低く、尊敬する他者との関係に多くみられるような極端な信頼感の表れも特徴的であった(事例T)。

「(同じ部の同期の友人は)多分連絡もう全然取らなくなっても大切ですね。[信頼関係を築いた特定の他者の存在：T]」

「(同じ) コースの人は、結構似てる人が多い気がして。だからみんな結構仲いい感じで。同じっていうか、近いなあみたいな感じはするかな。(同じコースの人は) 基本的に真面目な感じがして。真面目というか、あんまり社交的じゃないという。面倒くさーいみたいな。[居場所の存在：R]」

「(部活の同期の人とは) 性が合う合わんっていうのがあって。いきなりすぐ仲良くなれるわけじゃないんで、(部を運営する) 役員になるとどうしてもお互いが思ってることとか考えてることとか、内面を出すじゃないですか、今までと違って、単純な友達じゃなくて。一致団結するためというか。そうするとどうしても考え方が違う人間がいるんで、その時はすごいぶつかり合いになるんで。[ぶつかり合い：T]」

「(部活の OB は) 社会人としての考えも持ってて〇〇部も経験してて、すごくしっかりした意見を持ってきてる人たちと。・・・年が割りと近くて、結構頻繁に道場に来られて、結構話をしてるんで、話しやすい人たちですね。別に話しにくいわけじゃないですけど、もうすごい人たちなんで。話すんですけど、威厳があるというか。[年上の他者への尊敬：T]」

「小学校も、その女の子と仲良くて。それで、その子とはずっと小学校 6 年間ずっと仲良くって、小学校 4 年か 3 年くらいの時に、さっき言ったずっと仲がいい子と出会って。[過去に一緒にいたので仲が良かった他者：R]」

「やっぱり実家は安心するなっていうのがありますね。[家族への肯定的な思い：S]」

「(兄が) 別にむしろそれくらい元気になったなと思って、いいよな。昔みたいに静かな方がよかったかなと思うこともありますけど。静かで、まあ友達もいたんですけど、そこまでたいして人と付き合いおうとしないで、色々一人で考えたりしてるみたいな、そんな感じだったんですけどね。今思えば静かな方がよかったかなと思ったり、でも元気になってよかったなと思ったり、でも元気すぎるのもよくないですね。[家族への気遣い：P]」

「(小学校の先生に) 中学校、高校の時もたまに先生に会いに行ってたんですけど。特に高校になってからは、進路相談をしに行っていました。・・・小学校の時の先生だと、やっぱり性格とか把握してくださってるし。色々相談でもやりやすくなって思っていましたね。[ポジティブな教師観：S]」

8) 未熟群の典型事例

以下、未熟群の典型と考えられる対象者 Q について、事例的に検討する。引用した語りの末尾の[]は、第 1 段階のカテゴリを示す。

【事例 Q, 20 歳, 女性, 教育学部の 3 年生。両親と弟, 祖母の 5 人家族で, 調査時は 1 人暮らし。調査時に関わりのある他者として, 家族・親

戚，友人，アルバイト先の人たち，地元の友人が挙げられた。】

「①親密な関わりの拒否・回避」は，主に友人との関係において語られ，「自分がこんなに他人に依存しだしたらそれはちょっとぞっとするなあっていうのもありました。これだけ人の支えとか優しさとかを大事にしだしたら，ちょっと自分もたない。そういう限界を知ったり。もう勉強が恋人でもいいやというようなところはありませんね。【親密な関係の回避】」や「とりあえず私は友達にしても何にしても，仲が悪くなったら連絡を断つんですよ，しばらく。なので，そう真っ向から対決するようなことはないですけど。【断ち切る】」と，関わりから撤退した様子が示された。長年仲の良い親戚に対しても，信じきれない気持ちを語り，安心感を持って関わることの難しさがうかがわれた。

「②関わることへの不安」については，「(高校の友人との関係で) そういう他人と自分との違いというか，根本的に根っこからこういうところから違うんだなと (意識するようになった)。【一人ぼっち】」と根源的な他者との違いを意識し，孤独感を感じていることが語られた。

「③不安定な家族関係」においては，主に母親との関係について言及され，「やっぱり家族は重いですね。こっちから連絡をよこさないとやっぱり怒るし。【家族が重い】」や「(母親を) 私が支えなくなっちはみたいなところがあったのかもしれないです。【家族が重い】」と，家族関係にとらわれている様子が示された。

「④特定の他者への信頼感」として，①～③と同時に，「結構仲のいい子が一人，今も付き合ってる子で。その子から学んだことはすごく多かった。本当に人との付き合いは大事にする子で，正反対だったんです。【特定の他者への信頼感】」など，少数ではあるが信頼関係を築いている他者の存

在を示す語りがみられた。

以上を総合すると、事例 Q は他者との根源的な違いを意識し、深い孤独感に襲われており、また他者に対する拭いきれない不信感を感じている。そのため他者と親密な関わりを築くことが難しく、行動的には拒否・回避するという行動を取っている。家族との関係においても、母親を支えなくてはという、家族関係へのとらわれが示された。一方で、少数ではあるが、信頼感を持って関わることができる他者も存在し、少しずつ信頼感を育んでいることが推測された。

(2) 対人関係上の困難に関する語りにみられる 4 様態の特徴

これまで、対人関係の在り方全般についての分析を行ったが、次に、特に対人関係上の困難に焦点を当て、4 様態それぞれの特徴を検討した。困難に焦点を当てることで、各様態の青年の対人関係の捉え方や他者との関わり方を、より詳細に検討することが可能と考えられた。

対人関係上の困難の内容に関する語りの要約と困難が生じた時期、困難を感じた相手を Table 3-11 に、対人関係上の困難への対処の仕方についての分析結果を Table 3-12 に示す。対人関係上の困難に関する語りから、4 様態の特徴を記述する。

1) 対人関係上の困難の内容と困難が生じた時期、困難を感じた相手にみられる 4 様態の特徴

困難の生じた時期は、4 群ともほぼ同時期であった。困難を感じた相手は、ほとんどの対象者が「友人」を挙げ、その他には、「親」、「一般他者」、「先生」が挙げられた。

困難の内容については、成熟群では、相手との具体的な関わり方についてが多く（5 人中 3 人）、相手への積極的な働きかけの中で生じる困難に言及された。「関係性」優位群では、相手との「距離」や相手からの「干

Table 3-11

4 様態の対人関係上の困難の内容と、困難が生じた時期、困難を感じた相手

様態	困難の内容	困難が生じた時期	困難を感じた相手
成熟群	・友人と打ち解けること ・傷つきやすい友人との接し方 ・恋人との別れ ・他者と関係を作っていく過程 ・友人との意見の相違	大学(3) 高校(3) 中学(3)	友人(4) 一般他者(1)
「関係性」 優位群	・親と自分との距離の近さ ・友人との意見の相違 ・友人と適切な距離をとること ・他者からの干渉 ・友人関係の不安定さ	大学(3) 高校(2) 中学(2)	友人(4) 親(1)
「個」 優位群	・裏切られ体験 ・友人との距離の近い付き合い ・いじめ ・友達を覚えきれない ・集団への馴染めなさ	大学(4) 高校(2) 中学(2)	友人(5) 先生(1)
未熟群	・他者の理不尽な対応 ・他者との距離の近い付き合い ・いじめ ・親からの連絡 ・友人との意見の相違	大学(3) 高校(3) 中学(3) 小学校以前(1)	友人(4) 親(1) 一般他者(1)

注) 困難の生じた時期と困難を感じた相手の欄の()は、該当した対象者数を示す。

Table 3-12

4 様態の対人関係上の困難への対処の仕方

様態	①他者の援助	②悩む	③回避	④努力	⑤諦め	⑥消極的対処	⑦反発	⑧納得
成熟群	0	2 (A,B)	0	3 (A,B,D)	0	1 (E)	0	3 (A,C,D)
「関係性」 優位群	1 (F)	2 (F,H)	2 (G,I)	2 (F,H)	4 (G,H,I,J)	1 (I)	0	1 (H)
「個」 優位群	0	0	4 (K,L,M,O)	1 (N)	2 (K,M)	2 (L,M)	0	0
未熟群	0	1 (P)	4 (Q,R,S,T)	0	3 (P,R,S)	2 (Q,T)	2 (P,T)	2 (R,T)

注) ()は、該当した対象者を示す。

渉」などの対人関係そのものについてが主であった(5人中4人)。「個」優位群では、他者からの具体的、かつネガティブな関わり(5人中2人)と、「友達を覚えきれない」、「集団への馴染めなさ」という集団対個人の関係で生じる困難が挙げられた(5人中2人)。未熟群では、理不尽な対

応や親からの連絡などの、相手からの具体的、かつネガティブな働きかけが多く（5人中3人）、そのうち1名については、幼少期から困難さを感じており、それが現在まで続いていると語られた。

以上より、困難を感じた時期と相手は、様態間で相違はみられなかったが、困難の内容は、様態ごとに異なっていることが示唆された。

2) 対人関係上の困難への対処の仕方に関する語りから得られたカテゴリ

語りの分析の結果得られた8つのカテゴリについて、以下に特徴を記述した。語りの例の文末の（ ）に、対象者を表すアルファベットを示す。

①他者の援助

「悩んでいる時に、友達が直接的に指摘をしてくれて（F）」や「悩んでいたら（省略）話を聞いてくれて（F）」などの語りが含まれる。このカテゴリは、対人関係上の困難への気づきや、困難への対処の過程に他者の影響があったことを示す。このカテゴリは、「関係性」優位群の1名にのみみられた。

②悩む

「とりあえず考える（H）」、「うろうろして考える（P）」など、「考える」「悩む」という直接的な言葉がみられた語りを含む。また、行動的にも引きこもって悩んだり、最初に困難を生じた相手ではない他者との間で、無意識的に同様の関係を繰り返したり、それを反省することなども含まれる。このカテゴリは、困難を感じてから比較的早い段階で出現し、困難を感じた出来事に圧倒され考え込むこと、悩むことを示す。このカテゴリは、「個」優位群以外の群でみられた。

③回避

「(困難を感じる場面から)できるだけ逃げようとする (I)」や「(嫌な話題をふられたら)聞き流す (L)」,「(苦手な他者と)あまり関わらない (M)」などの語りが含まれる。このカテゴリは、出来事を自分から切り離すことで、困難を感じる事態に直面しないようにする、または直面しても回避することを示す。このカテゴリは、成熟群のみみられず、「個」優位群と未熟群では、それぞれ5人中4人の対象者に認められた。

④努力

「意識的に(相手と自分を)分けて捉えようとする心構えを作った (F)」や「(先入観を取り払うために)自分のことをしゃべる。積極的に話をする (D)」などの語りが含まれる。このカテゴリは、少々無理をして、または意識的に対応を変えてみる、困難を感じた相手との間で、相手の反応を見ながら対応するなどの、困難の解決を目指した積極的な対処を示す。このカテゴリは、未熟群以外の群にみられ、成熟群では5人中3人の対象者にみられた。

⑤諦め

「そういうものだと割り切る (G)」や「辛いけどしょうがない (K)」などの語りを含む。また、「とりあえず我慢 (I)」や「何かあったら自分が我慢する (M)」など、当初から解決を諦め、我慢するという対処を取ることにも含まれる。このカテゴリは、解決への期待は捨てるが、割り切ったり我慢したりすることで、その状況や対人関係の輪には居続けることを示す。このカテゴリは、成熟群のみでみられず、「関係性」優位群では5人中4人、未熟群では5人中3人にみられた。

⑥消極的対処

「(クラスメイトとの関係での困難が生じた時)なんかあったら先生に文句言ったり (Q)」や「自分が悪くなくてもとりあえず謝る (Q)」,「口

では適当に言う。当たり障りのないようなことを (L)」などの語りが含まれる。このカテゴリは、解決を他者に任せたり、その場を丸く収めるために、相手に合わせた対処をとったりするなど、間接的・消極的な対処を示す。このカテゴリは、全ての様態にみられ、「個」優位群と未熟群では2名ずつみられた。

⑦反発

「イライラする (T)」や「殴りかかる (P)」などの語りが含まれる。このカテゴリは、困難に対して感情的に反応したり、情緒的な反応を行動に表したりすることを示す。このカテゴリは、未熟群のみにみられた。

⑧納得

「(相手の反応の)理由が分かるから (A)」や「時間をおく (D)」,「(親は)心配なんだろうなと思うように (T)」などの語りが含まれる。このカテゴリは、出来事が生じてから比較的時間が経ってから出現し、困難を感じた出来事を捉え直し受け入れることや、対処としては理解した上で時間が経つのを待つことを示す。このカテゴリは、「個」優位群以外にみられた。

4. 考察

(1) 対人関係に関する語りにみられる4様態の特徴

成熟群では、5つのカテゴリが抽出された。「①関係への満足と安心感」が、特定の関係のみならず、幅広い他者環境一般への肯定的な意識として語られた。基本的信頼感の強さがうかがわれ、おくすることなく他者との関係を構築し、安心感を持って集団の中で過ごすことが可能であることが推察される。「②相互に独立した他者の認識」では、他者を独立し、自分とは異なる意思を持つ存在として認識し、「ライバル関係」などより

生産的な関係を築こうとする態度がうかがわれた。この根底には、①にみられた他者全般に対する信頼感があると考えられる。「関係性」優位群にみられた異なる意見を聞くのみの相互尊重とは異なり、成熟群の相互尊重は、相違の受容にまで至っていると考えられる。一方で、「③自他の視点の分化と他者への配慮」がみられたことから、他者への過剰な気遣いや同調する傾向など、完全に他者を独立した存在として認識するには至っておらず、その途中であることが考えられる。このカテゴリに分類された語りは、初対面の場合のエピソードが語られることが多く、自分が苦手とする場面では特にこの特徴がみられると考えられる。また、「④周囲への不満と自己内緩和」では、良いところと悪いところの両方が語られており、自分の置かれている対人関係状況全体を冷静に認識し、その満足と不満足の両方を言語化することが可能であることが推察された。これが、「②相互に独立した他者の認識」の前提にあり、満足と不満足の両方を内的に処理することが可能であるため、ありのままの他者を受け入れ、より生産的な関係を築くことができると考えられる。「⑤一人でいることへのアンビバレントな気持ち」でも、④にもみられるように、一人でいることの良いところとそうでないところを両方語ることが可能であることが示された。「②相互に独立した他者の認識」を前提とすると、一人でいることへのアンビバレントな気持ちからは、独立した個人として他者存在の必要性を認識し、それを求めていることが考えられる。これは Erikson (1950 仁科訳 1977/1980) の発達段階に従うと、青年期の次段階の成人前期の課題である親密性の獲得につながる要素であると考えられる。Erikson (1967 岩瀬訳 1982) が、成人前期の特徴として挙げた、自らのアイデンティティを相手に参与させ、互いの違いを尊重することが可能な状態に近付いていると考えられる。

「関係性」優位群では、5つのカテゴリが抽出された。「①他者への信頼感」では、他者を信頼しているということを様々に言語化し、他者との関係の在り方について、知的に突き詰めて考える傾向がうかがわれた。対象は限定されており、「③表面的な対人関係を志向」の下位カテゴリである「偏見」により対象が選択されている場合もみられた。成熟群や「個」優位群と比較すると、家族に対する肯定的な語りが少なく、逆に希薄な家族関係を示す語りがみられるという特徴があった。「②相互尊重」では、相手に自分の意見を伝え、相違を認めようとする態度が示された。しかし、理解し認めようとはしているものの、異なる意見を聞くという知的な処理にとどまっており、成熟群にみられる「ライバル関係」の構築のような相違の受容にまでは至っていないと考えられる。「③表面的な対人関係を志向」する背景には、「④他者からの被影響性」、「⑤自己と他者の融合」があると考えられる。「④他者からの被影響性」は、小此木（2002）が、青年期においては、周囲への同一化した状態から“その価値観を自分のものにするプロセス”が進行すると述べていることと関連すると考えられる。周囲への同一化が強い状態に自他の融合感が生じ、「関係性」優位群では、「④他者からの被影響性」に示されるように、他者の影響を拒否・排除しようとする解釈される。内的には自他の融合感を求めているが、それは他者に巻き込まれる怖さと感じられ、その結果他者との関係に深く入り込めず、他者と距離を取り関係が表面的なものにならざるを得ないことが推測される。①にもあるように、論理的、理性的に物事を捉える傾向にあり、自らの対人関係についても知的に処理しているため、感情を交えた関わりを持つこと、それを言語化することが難しいと考えられる。

「個」優位群では、3つのカテゴリが抽出された。「①関係の深まりへ

の拒否感」として、意図的に他者と距離をもって接していることが示された。感情を交えて関係の質や深さを語る事が難しく、中には対人関係を道具的に捉えていることを示す語りもみられた。この点は、後述する未熟群とも共通する特徴であり、鑪他（1984）の言う“对人的—心理的な距離を保つ能力”が未熟であり、他者との関係を浅いものに止める、もしくは関係そのものを回避するという手段を用いることが示唆された。「関係性」優位群の表面的な対人関係を志向する傾向とも類似しているが、「関係性」優位群の対象者は関わりを知的に処理したり、接近と回避の葛藤が表面化しない関係になっているのに対し、「個」優位群の対象者は、知的に処理する傾向はみられず、意図的に関係を浅いものに留め、他者の侵入を積極的に回避していると推察される。そこには「関係性」優位群にみられた他者との融合感の希求は認められず、葛藤を抱えることもないと考えられる。こうして自分の望む範囲で対人関係を結び、守りの中で安定した関わりを体験している。また、未熟群の対象者が、多くの場合他者と関わる事への不安を抱えているのに対し、「個」優位群の対象者は、不安の有無は語りには示されず、現実の希薄な関係について語られることが多かった。「②特定の他者への信頼感」は、対象は限定的ではあるが全ての対象者にみられた。友人との関係においては、成熟群にみられたような相手の意見を受け入れることが可能であることも示されている。家族との関係においては、肯定的な語りが多々みられ、大学生になってから関係が良い方向へ変化したという語りもほとんどの対象者にみられた。ここからは、基盤としての信頼感は、「関係性」優位群や未熟群に比べると築かれていることが推測される。「①表面的な関係を志向」と同時に、「③対人関係の広がり志向」する傾向もみられた。表面的で浅いが、広がり志向している。質的にどのような関係を築くか

ではなく、なるべくたくさんのお他者と知り合いになり、関わりを持つことを望んでいる。このことから、対人関係を道具的に捉えていることが推測される。そして、集団の中では、個人としての存在を主張することなく、現代青年の対人関係の特徴とされる希薄な関係（岡田，1995）を築いている。

未熟群では、4つのカテゴリが抽出された。「①親密な関わり拒否・回避」では、能動的に関係を絶っており、関わることに對する強い拒否感や苦手意識が語られた。また、関わりがうまくいかないことが積み重ねられた結果、苦手意識や無力感が高まり、ますます対人関係から撤退しているという悪循環をたどっている様子もうかがわれた。この循環の中で生じると考えられる「②関わることへの不安」として、他者と関わること自体への強い不安が語られた。他者を傷つける、または他者に傷つけられる不安を抱いており、その背景には自他の融合感があると考えられる。対象者の中には自我境界の脆弱さがうかがわれる人も存在した。他者から分離した存在としての自己感覚に乏しく、他者の行動を被害的に捉えることもある。①、②の背景要因と考えられる「③不安定な家族関係」に関する語りも多々みられた。「関係性」優位群にも類似した内容がみられたが、「関係性」優位群の対象者が家族との関係を客観的に見つけているのに対し、未熟群の対象者の多くは、家族との関係を客観的に捉えきれず、気づきのないままその中に埋没している状況であることがうかがわれた。「④特定の他者への信頼感」として、人数としては少なく、また限定的ではあるが、信頼感を持って関わるのが可能な他者の存在が示された。このカテゴリに分類された語りが見られた対象者には、大学生になってからの変化を報告する人が多く、物理的に家族から離れたことが、家族からの心理的な自立につながっていると考えられる。大学

入学後、少数ではあるが信頼できる他者や居心地の良い居場所を見つけ、信頼感を育んでいることがうかがわれた。ただ、こうして結ばれた関係は他の様態と比較しても、成熟した関わりとは言い切れず、家族の代理として他者を求めていたり、Sullivan (1953 中井・高木・宮崎・鑑訳 1990) のいうチャムのような、発達段階としては青年期以前の友人関係の特徴を多く持つと考えられた。

以上のように、各様態の特徴を検討したところ、「個」と「関係性」のバランスによって、対人関係の在り方にそれぞれの特徴が認められた。成熟群では、安心感を伴う、他者との相互的な関係が語られた。「関係性」優位群では、自他の融合感や被影響性の高さが推察された。「個」優位群では、他者との関係の深まりへの拒否感と、浅く広い人間関係を志向する語りがみられた。未熟群では、他者との関わりへの不安と回避、不安定な家族関係が語られた。

各様態それぞれの特徴が抽出されたことより、「個」と「関係性」の視点と、それに基づき本研究で作成した尺度の有用性が示された。このことは、作成した尺度の妥当性も一部支持すると考えられる。

(2) 対人関係上の困難に関する語りにみられる4様態の特徴

対人関係上の困難が生じた時期については、中学から大学まで、全ての群で同様の結果であった。また、全ての群で、困難は過去から現在まで続くものとして語られることが多く、青年期においては、対人関係上の困難は、一時的なものではなく、自分の特徴から生じる長期的なものとして認識されていることが推測された。

対人関係上の困難を感じた相手も、全ての群で同様であり、「友人」が多く挙げられた。従来から指摘されているように、青年期においては、それ以前は両親に向けられていた依存愛情欲求が、親以外の対象である

友人や恋人などに向けられ (Blos, 1962 野沢訳 1971; 岡本・上地, 1999), 現実的に関わる他者の範囲が増加すると考えられる。したがって, 青年期には, 友人との関係にエネルギーを注ぎ, 様々な取り組みをしているため, 本研究では, 対人関係上の困難として, 友人関係に関する出来事が多く挙げられたと考えられる。

対人関係上の困難の内容と対処の仕方については, 各様態で異なっていた。成熟群では, 他者に対する積極的な働きかけの中で生じる困難が特徴として抽出された。研究 2-1 のクラスタ分析の結果, 成熟群は, 両尺度の全ての下位因子得点が平均よりも高い群であった。つまり, アイデンティティにおける「個」と「関係性」のバランスがとれ, 全体としてアイデンティティの形成が進んでいる成熟群においては, 他者からの影響ではなく, 自分が他者に対して行動を起こす際に, 困難が生じると考えられる。多川 (2001) は, 青年にとって, “自分の意見を主張すべき” という対人関係観が重要であること, それが対人関係の親密化に伴うことを指摘している。本研究においても, アイデンティティの成熟に従い, 対人関係の中で積極性を発揮し, その際に困難を感じることを示唆された。また, 対処の仕方においては, ④努力と⑧納得が特徴的であった。対人関係上の困難に対して積極的に働きかけ, 時間経過にも伴って, 困難な出来事を捉え直し, 待つことができると推察される。④努力という対処法を用いるには, 困難を前にして, 自己コントロールができること, 他者を配慮して行動できることなど, 成熟した在り方が必要と考えられ, 成熟群の青年はそうした特徴を持つことが推測される。また, ⑧納得に含まれる「時間をおく」という対処については, その理由として「相手のことが分かってくるので (対象者 F, I)」というように, 状況が好転するという見通しが立った上で行っていることが示唆された。

困難を前に、自他の感情に配慮し、見通しを持って対処の方向に働きかけられることが、成熟群の特徴と考えられる。

「関係性」優位群では、距離感などの他者との関係そのものが困難として多く挙げられた。研究 2-1 のクラスタ分析の結果、「関係性」優位群は、「関係性」尺度の下位因子の方が高い様態であり、対人関係の特徴としては、自他の融合感を伴うことも示されている。「関係性」優位群の対人関係における困難として、他者との関係そのものが挙げられたことは、この様態に属する対象者が、関係の在り方への関心が高いことを示唆する。つまり、自他の融合状態にありながら親密な関係を求めている中で、他者との距離感や、干渉などの被侵入感に対処しようとしていると考えられる。また、対処の仕方においては、⑤諦めが特徴的であった。他者との関係に関心を持ち敏感な「関係性」優位群の青年は、困難に直面すると、その場の関係維持に比重を置く⑤諦めを多く用い、困難の解決よりもその場の対人関係を維持することを重視する傾向が示唆された。困難と感じる場面自体も、他者との距離自体であることも、こうした対処の仕方と関連があると考えられる。

「個」優位群では、他者からの具体的でネガティブな働きかけと、集団対個人の間で生じる問題が、それぞれ半数以上の対象者にみられた。研究 2-1 のクラスタ分析の結果、「個」優位群は、「個」尺度の下位因子得点の方が高いことが示され、対人関係の特徴としては、自他の融合感は少なく、幅広い他者との関係を築くことが示唆されている。「個」優位群の青年の困難を感じる場面である、集団対個人の間で生じる問題は、幅広い他者との関係を築く傾向にある「個」優位群の青年が直面しやすいものと考えられる。しかし、他者からの具体的でネガティブな働きかけも同程度挙げられたことから、「個」優位群の自他の融合感のなさが、他

者の存在を認識した上での成熟したものではなく、他者個人や他者集団に対し、一方的に提示された「個」である可能性も推測される。また、対処の仕方においては、③回避が特徴的であった。関係の中で生じる難しさを扱うことを避け、関わりから撤退するという③回避の手段を多く取り、「個」を守ることが推測される。これは、未熟群とも共通した特徴である。また、②悩むの該当者がなかったことから、「個」優位群の青年は、困難に直面しても悩んだり考えたりすることは少なく、すぐに何かしらの行動に移ることが推測された。

未熟群では、他者からのネガティブな働きかけが多く挙げられ、総合すると被侵襲感を伴う体験が挙げられた。研究 2-1 のクラスタ分析の結果、未熟群は、全ての下位因子得点が平均より低い様態であった。他者からの具体的でネガティブな被侵襲感を伴う働きかけが、未熟群の感じる困難として挙げられたことは、自他の融合感が強く、他者との相互独立的な関係を築くことも難しいこの様態の青年にとって、他者との関りは被侵入感を伴うことが多いことを反映していると考えられる。また、困難を感じた出来事に関する語りも、他者の理不尽な対応や親からの連絡など具体的なものが多く、困難を感じた相手の行動の背景や、それに伴って生じた感情・思考のレベルでの困難ではないと推察される。つまり、未熟群の青年は、出来事そのものに圧倒され、困難を感じていると考えられる。また、対処の仕方においては、③回避と⑤諦めが特徴的であった。未熟群の青年は、解決に向かう対処方法を取ることは難しく、困難自体を③回避したり、直面しても⑤諦めてその場に居続けたたりすることが多いと考えられる。他者に対する被侵襲感が強いという対人関係の特徴を考え合わせると、困難な出来事に直面した際、「個」を守ること、その場の「関係性」を維持することも難しい状態になることが予測

される。また、⑦反発は、5名中2名ではあるが、未熟群のみにみられており、衝動的な反応をとるという未熟な在り方が示唆された。なお、未熟群においても5名中2名に⑧納得に該当する語りがみられたが、成熟群の語りにみられたような見通しを伴った理由は述べられず、困難の解決に向かう対処法としては機能していない可能性が高いと考えられる。

以上より、対人関係上の困難の内容については、アイデンティティの成熟に伴い、相手からの影響ではなく、自ら行動を起こす際に困難を感じることに、「関係性」優位群の青年は、他者との距離自体に困難を感じるのに対し、「個」優位群の青年では、自己と集団が区別され、その関係において困難を感じるということが示唆された。また、困難への対処の仕方については、アイデンティティの成熟に従い、対人関係上の困難が生じた時、解決に向かう方法を取ること、「関係性」優位群の青年は、困難な出来事が生じた場合、解決は諦めるがその場の関係は維持し、「個」優位群の青年は、困難な出来事自体を回避する傾向にあることが示唆された。

対人関係の在り方と同様に、対人関係上の困難への仕方においても、4様態それぞれの特徴が示された。以上より、研究1-2までで作成した尺度の有用性が支持されると考えられた。

第3節 4様態の進路選択過程にみられる特徴の分析（研究3）

1. 目的

研究3は、研究2-2で検討が不十分であった点を踏まえ、「個」と「関係性」の両方が関わる領域である進路選択に関する語りから、4様態の特徴を質的に検討することを目的とした。それにより、研究2-2と同様に、研究1-2までで作成した尺度の有用性を検討する。

なお、進路選択を取り上げた理由として、以下のことが挙げられる。まず、進路選択とアイデンティティ形成との関連は、これまでの先行研究でいくつか報告されている。例えば、杉村（2001）は、青年期女子のアイデンティティについて、「関係性」の視点から検討する中で、職業的な要因が、大学生のアイデンティティ形成にとって重要な意味を持つことを指摘している。具体的には、職業選択や就職活動のプロセスの中で、自己の振り返りが行われ、自己形成、つまりアイデンティティの形成が促進されると述べられている。また、進路選択の過程には、個人としての在り方と両親をはじめとする他者との関係が反映されることが予想され、「個」と「関係性」からアイデンティティを捉える際に、有用なテーマと考えられる。つまり、進路選択の在り様に、各様態の特徴が反映されやすいと考えられる。さらに、進路選択は、大学生の誰もが体験するものであり、アイデンティティ理解において、青年期、特に大学生を対象にする際には、適用範囲の広いテーマと考えられる。

2. 方法

(1) 調査対象

研究 1-2 の対象者のうち、23 名（男性 4 名、女性 19 名、平均年齢 20.5 歳、 $SD=0.85$ ）。この 23 名は、研究 1-2 の質問紙調査の際に、面接調査への協力に応じた学生全員であった。研究 2-2 で抽出された 4 様態各 5, 6 名。対象者のプロフィールを Table 3-13 に示す。

(2) 面接調査手続き

1 回 50～90 分の個別の半構造化面接を行い、同意を得た上で、全ての語りを録音した。調査実施後、全ての対象者の逐語記録を作成した。

Table 3-13
研究3の対象者のプロフィール

様態	対象者	性別	年齢	学年	学部	居住形態
成熟群	A	男性	22	4	理	1人暮らし
	B	男性	23	2	教育	1人暮らし
	C	女性	21	3	教育	1人暮らし
	D	女性	21	3	教育	1人暮らし
	E	女性	20	2	教育	1人暮らし
	F	女性	22	4	教育	自宅
「関係性」 優位群	G	男性	21	3	教育	1人暮らし
	H	女性	20	2	教育	1人暮らし
	I	女性	20	2	教育	1人暮らし
	J	女性	20	2	教育	1人暮らし
	K	女性	21	3	教育	自宅
「個」 優位群	L	女性	20	2	教育	1人暮らし
	M	女性	20	2	教育	1人暮らし
	N	女性	20	2	教育	1人暮らし
	O	女性	20	2	教育	自宅
	P	女性	20	2	教育	1人暮らし
	Q	女性	21	3	教育	1人暮らし
未熟群	R	男性	20	2	教育	1人暮らし
	S	女性	20	2	教育	1人暮らし
	T	女性	20	2	教育	1人暮らし
	U	女性	20	2	教育	自宅
	V	女性	20	2	教育	自宅
	W	女性	20	2	教育	1人暮らし

質問項目は、大学入学時点から現在までの進路選択について聴取するための、次の3つ。①現在考えている卒業後の進路、②大学入学時に考えていた卒業後の進路、③進路選択の経過。調査時に用いた質問マニュアルを、Table 3-14に示す。

調査場所は、大学内の共同研究室と心理臨床教育研究センターの面接室であった。

調査時期は、2008年1月から4月であった。

倫理的配慮として、調査場所には、いずれも第三者の出入りのない場所を選択し、調査開始前には、プライバシーの保護や録音等について記載した面接承諾書に署名を求めた。なお、本研究の実施と結果の公開に際して、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た。

Table 3-14
進路選択に関する質問マニュアル

-
- ①現在
- 1)進路についてどう考えているかを教えてください。
- 具体性
 - 取り組み(心理的・行動的)
 - 見通し
- 2)職業に関わらず将来の展望、人生設計について考えていることはあるかを教えてください。
あれば、どのように考えているかを教えてください。
- 具体性
- ②大学入学時点
- 1)進路について、どのように考えていたか教えてください。
- 重要なトピックス(理想化、制約など)
- ③大学入学から現在まで
- 1)何を考慮しましたか【個】
- 自分の振り返り(適性、関心)
 - 振り返り後の自己意識
 - 進路決定時の詳細な過程
- 2)何を考慮しましたか【関係性】
- 進路選択に際して、関わった他者の存在の有無
→関係性、影響や得たもの、今後の期待
 - 家族
 - 友人(友人関係の変化、取り残され感)
 - 恋人
 - その他
 - 進路選択を通しての、人間関係の振り返り
 - 他者との意見の相違の有無
→どう感じ、考えたか。どう対処したか。
どのような難しさを感じたか。
- ④自分の進路選択に対する評価
- 判断に対する自信
 - 満足感や自分が決めたという感覚
-

(3) 分析手順

逐語記録から各対象者の進路選択過程における心理状態を表す語りを文章単位(1~3文程度)で抜き出し、筆者を含む臨床心理士3名で、研究2-2と同じ手順でカテゴリ化した。

抜き出した語りの数は、成熟群110個、「関係性」優位群101個、「個」優位群94個、未熟群109個、計414個であった。

後日、最終的に抽出されたカテゴリの信頼性を確認するために、研究2-2と同じ手順で臨床心理学専攻の大学院生2名に再分類を依頼し、評定一致率を算出した。一致率は、79.7%であり、分類の信頼性が確認された。なお、分類が一致しなかった場合は、筆者と再分類を依頼し

た大学院生の 3 名で、協議の上分類を行った。以降で示す結果は、一致率算出後のものである。

カテゴリを抽出した後、小嶋(2004)、川島(2008)、前盛・岡本(2008)のプロセス分析の方法を参考に、対象者ごとに、抜き出した語りを該当するカテゴリに置き換え、時系列に並べた。同一様態の対象者のプロセスを重ねて、各様態で 80%以上の対象者が該当したカテゴリを用いて共通する分岐や推移を抽出し、各様態の進路選択過程を示した。

3. 結果

分析の結果、第 1 段階で 41 個の下位カテゴリが抽出され、最終的に 11 個のカテゴリが得られた。最終的なカテゴリの定義と語りの例を Table 3-15 に示す。また、様態ごとのカテゴリへの出現数を Table 3-16 に示す。次に、各対象者の進路選択過程を Table 3-17 に、各様態の進路選択過程を Figure 3-2～Figure 3-5 に示す。以下、下位カテゴリを〈 〉で示す。

①積極的な関与

〈決意〉、〈熱意〉、〈実現への取り組み〉の下位カテゴリを含む。成熟群と未熟群で、80%以上の対象者にみられ、「関係性」優位群と「個」優位群においても、半数以上の対象者にみられた。全ての様態において、〈決意〉の該当者が多く、〈実現への取り組み〉の該当者が少なかった。成熟群では、進路選択過程の前半と後半に 2 回みられた。

②停滞

〈戸惑い〉、〈焦り〉、〈決めるのが怖い〉、〈興味と職業の乖離〉、〈あきらめ〉、〈混乱〉、〈自信がない〉、〈後悔〉、〈現実的制約〉の 9 つの下位カテゴリを含む。全ての様態でほぼ全員の対象者にみられ

Table 3-15

進路選択に関する語りから得られたカテゴリの定義と語りの例

カテゴリ	定義	下位カテゴリと語りの例
① 積極的な関与	定めた目標に対し熱意を持ち、その実現に向けて取り組んでいる状態。	決意:絶対臨床心理士になるって思ってた。絶対、入ったらそのまま院行くしって思ってた(W)。熱意:やりたいことだったら、収入はいいやって思ってた(B)。実現への取り組み:教師の説得力っていうのは指導力だと思ってるので、院に行くと知識と技術を身につけて(C)。
② 停滞	現実に直面し、戸惑いや焦り、後悔などが生じ、進路選択のプロセスが一旦停止した状態。混乱や決めるのが怖いなど、足踏みの状態も含まれる。	戸惑い:入ってすぐは戸惑った。よく分からなくなった(O)。焦り:やらなきゃいけないことをできてないっていう不安と焦り(U)。決めるのが怖い:自分が選んでしまうと、厳しくなる(R)。興味と職業の乖離:面白いけど、自分の職業としては、興味が無い(L)。あきらめ:単位数が、どう考えても合わないし、無理かあと思ってる(T)。混乱:あれもこれもなくなってしまってる(H)。自信がない:それをいいと思ってる自信が私には無い(E)。後悔:なんで(ここに)来たんだらうって(Q)。現実的制約:できるだけ親に負担をかけたくない(D)。
③ 自己分析	これまでの経験から、自分の性格や特徴を振り返り、進路・職業との照合を行う。	自己の振り返り:自分の知らない自分ができる。自分を発見(J)。適性への不安:カウンセラーっていう仕事に自分が耐えられるのか(H)。
④ 低自己関与	進路選択に際し、自己の関与が低く、合理的な選択を志向し、将来展望は漠然としている状態。	消極的選択:トントン拍子でいろんなものが進んで行くと、ああ流れに乗ってしまったっていう(G)。考えていない:サークルとか授業とかが、わーっててんでこ舞いで、全然将来のことについて考えてなくて(I)。漠然とした将来展望:漠然としたイメージしかなかった(M)。コミットできない:試験を受けてまでなるメリットが感じられず(L)。合理的判断:仕事の内容よりも、土日休みとか給料がいいとか、働く場所がいいとか、ということを重視したい(L)。
⑤ 視野の広がり	職業の種類や仕事の内容などに目を向け、知る。	視野の広がり:道は他にもいっぱいあるじゃないって考えるように(E)。
⑥ 主体性の重視	進路選択に際し、主体的に選択しようとし、自分の主体的な判断を重視する。	主体性の尊重:自分の経験が一番の後押し(A)。人生の中での職業の位置づけ:別に職業だけが形じゃなくて、自分がどういう風に生活したいかっていう所に仕事を入れる(E)。他者を通しての自己理解:友達と話したら、友達の意見も聞けて、自分の中でも整理できる(P)。
⑦ 自己信頼	自信を持って進路選択に取り組んでいる状態。	自己信頼:今から勉強すればできるっていう自信はあって(V)。
⑧ 私の固執	進路選択において、自己を主張し、他者からの影響や他者に頼る気持ちは否認。	我を通す:押し切った気がします。結局、私が我を通した(W)。他者影響の否認:あの人に影響受けたなみたいな今はない(S)。親は頼らない:親の意見は無視してます(I)。
⑨ 他者信頼	進路選択に関して、両親や友人、先生に対する支えられ感や見守られ感がある。	他者への信頼:先生や両親がいなかったら、私は多分道をそらてたと思う(C)。他者からの一押し:(友人の)一言で決心がついたというか(P)。見守られ、支えられ:支えてもらって、困った時に。自分のことを心配してくれてる存在っていうことで、安心感がある(J)。
⑩ 他者からの影響	被影響性が高く、進路選択に他者の意見や考えが取り入れられる。取り入れ方には、他者に依存する在り方や、他者との比較などもある。	流される:エントリーするだけしてみたらと言われて。ということで、とりあえずやってみた(G)。他者依存:友達がいないと、実行には移せなかったらうなって(K)。親に左右される:親が絶対的。私はどんなに納得してなくても、はい、分かりましたって、そのまま納めることしかできない(K)。他者との比較による焦り:どうしても比べてしまう。身近に、頑張ってみえる人がいるから、劣等感(M)。憧れ:あんな人になりたいっていう。ほんとにほんとの目標で(U)。
⑪ 確認	自分が行った進路選択や決定に対し、揺り戻しや再吟味が生じ、それにより決心が固まり、自己関与が高まる。	再認識:やっぱり自分のやりたいことはこれなんだなと思ってる。それで決心がついた(P)。揺り戻し:やっぱり自分も心理学をやりたいと思ってるところはあるんで、就職のことを考えていると、そっちの気持ちがつぶされる。私もちょっと心理学やりたいけど、でも就職かなって(E)。再吟味:簡単に決めすぎたんじゃないか、安易だったんじゃないかと思う時はある(D)。

注) 語りの例の文章末の()内のアルファベットは、対象者を示す。

Table 3-16
 様態ごとの進路選択に関する語りから得られたカテゴリの出現数

カテゴリ	下位カテゴリ	成熟群 (N=6)	「関係性」優位群 (N=5)	「個」優位群 (N=6)	未熟群 (N=6)
積極的な関与 (Active commitment: AC)	決意	4	3	3	5
	熱意	4	1	0	3
	実現への取り組み	1	0	1	0
	小計	5	3	4	5
停滞 (Stagnation: S)	戸惑い	0	2	2	2
	焦り	0	0	0	1
	決めるのが怖い	0	1	2	1
	興味と職業の乖離	0	2	1	1
	あきらめ	1	0	0	1
	混乱	1	3	0	1
	自信がない	4	1	0	4
	後悔	0	0	1	1
	現実的制約	3	1	1	1
	小計	5	5	5	6
自己分析 (Analysis of self: AS)	自己の振り返り	5	4	4	3
	適性への不安	1	5	2	2
	小計	5	5	5	5
低自己関与 (Low commitment: LC)	消極的選択	1	3	1	5
	考えていない	0	2	1	2
	漠然とした将来展望	1	3	6	4
	コミットできない	0	1	3	1
	合理的判断	0	1	3	1
	小計	2	5	6	6
視野の広がり (Breadth of horizon: BH)	視野の広がり	2	2	2	3
主体性の重視 (Respect of initiative: RI)	主体性の尊重	5	1	2	0
	人生の中での職業の位置づけ	1	0	0	0
	他者を通しての自己理解	0	2	1	0
	小計	5	2	2	0
自己信頼 (Trust of self: TS)	自己信頼	3	1	2	1
私の固執 (Tenacity of ego: TE)	我を通す	0	0	2	2
	他者影響の否認	0	0	2	3
	親は頼らない	1	1	1	4
	小計	1	1	5	5
他者信頼 (Trust of others: TO)	他者への信頼	4	1	2	1
	他者からの一押し	0	1	1	0
	見守られ、支えられ	5	3	2	2
	小計	6	3	4	3
他者からの影響 (Influence of others: IO)	流される	2	4	1	4
	他者依存	0	3	1	1
	親に左右される	1	2	1	3
	他者との比較による焦り	0	2	3	0
	憧れ	1	0	0	2
	小計	3	5	5	5
確認 (Confirmation: Con)	再認識	4	1	2	0
	揺り戻し	2	0	0	0
	再吟味	2	0	2	0
	小計	6	1	2	0

注) 太文字の数字は、各様態の 80%以上の対象者が該当したことを示す。

Table 3-17
各対象者の進路選択過程

対象者	進路選択過程
成熟群	A LC→AS/IO→S/TO→RI/Con
	B AC/TE→AS→S→RI/TS→AC/TO/Con
	C AC/RI→TO/IO→AC/AS/RI→TO/Con
	D LC→BH/TO/IO→RI→S/TS/Con
	E AC/TS→Con→S/AS→AC/AS/BH→RI/TO/Con
	F AC→TO/Con→S/TO→Con
「関係性」優位群	G AC→BH→S/AS→LC/TO/IO→AC/S
	H AC→S/AS→LC→RI/TO/IO→S/LC/BH
	I LC→S/AS→IO→LC/TE
	J LC→IO→S/AS→RI/TS/TO/IO→AC/LC
	K LC→S/IO→AS→IO/Con
「個」優位群	L AC→S/AS→LC→AS/TO/IO
	M LC→BH/IO→AC/TE→AS/TS/IO
	N LC→RI→TO/IO→S/TS/TE
	O AC/LC→S→Con→AS/BH/TO/IO→S/TE/Con
	P AC/LC→S→AS→RI/TE/TO→Con
	Q LC→A/AS→LC→AS/IO→LC/TE
未熟群	R AC/LC→S→BH/TO/IO→TE→S
	S LC→S→AS→LC/TE
	T AC→S→C/BH/IO→S/AS/LC
	U AC→S/LC→TE/IO→AC/AS
	V AC→LC→AS/TE/IO→TS→S
	W AC/TE/IO→LC/BH→AS→S/LC/TE/TO

注) AC:積極的な関与, S:停滞, AS:自己分析, LC:低自己関与, BH:視野の広がり, RI:主体性の重視, TS:自己信頼, TE:私の固執, TO:他者信頼, IO:他者からの影響, Con:確認, を示す。また, / は, 同時期に2つのカテゴリがみられたことを示す。

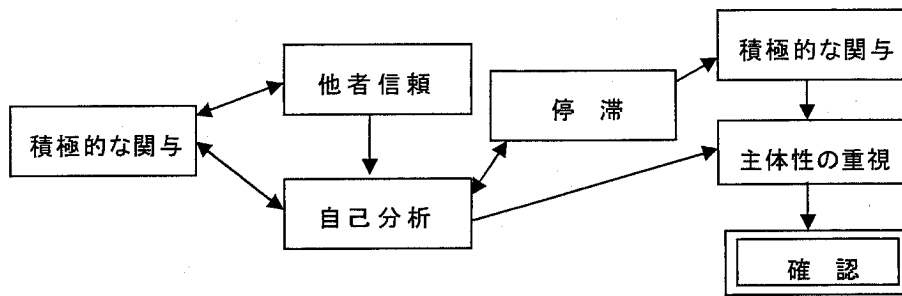


Figure 3-2. 成熟群の進路選択過程¹⁾

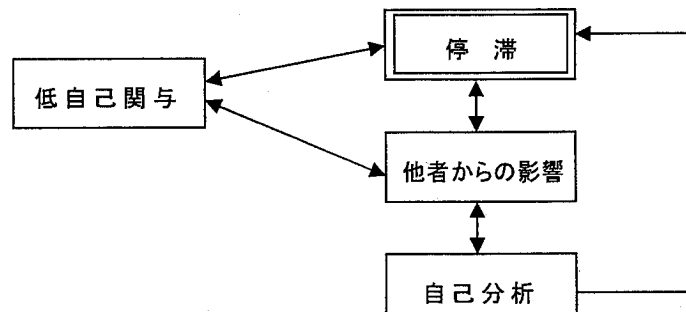


Figure 3-3. 「関係性」優位群の進路選択過程¹⁾

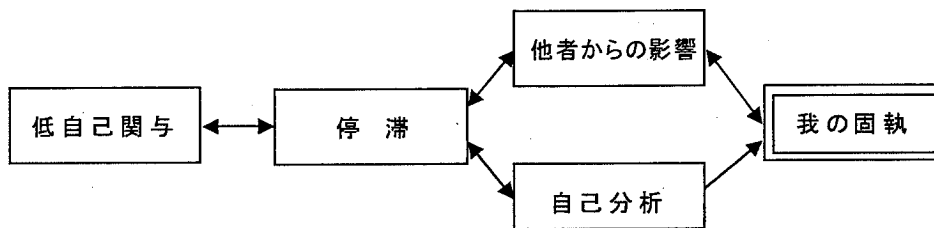


Figure 3-4. 「個」優位群の進路選択過程¹⁾

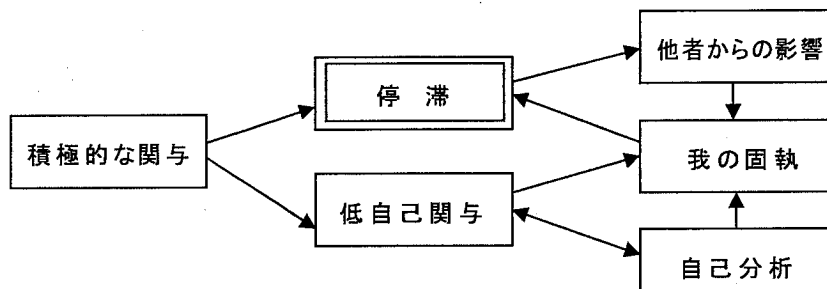


Figure 3-5. 未熟群の進路選択過程¹⁾

1) 一方向の矢印は一方方向の推移を、両方向の矢印はカテゴリ間を行きつ戻りつすることを、二重の四角は、面接調査時点の対象者の状態を示す。

た。下位カテゴリをみると、成熟群と未熟群では<自信がない>に、「関係性」優位群では<混乱>への該当者数が半数を超えている。また、<決めるのが怖い>と<後悔>は、「個」優位群と未熟群においてのみみられた。

③自己分析

<自己の振り返り>と<適性への不安>の下位カテゴリを含む。全ての様態で、ほぼ全員にみられた。下位カテゴリをみると、「関係性」優位群においてのみ、全員に<適性への不安>に該当する語りがみられた。

④低自己関与

<消極的選択>、<考えていない>、<漠然とした将来展望>、<コミットできない>、<合理的判断>の5つの下位カテゴリを含む。成熟群以外の様態で全員にみられた。下位カテゴリをみると、「関係性」優位群はばらついており、「個」優位群は<漠然とした将来展望>に、未熟群は<消極的選択>に80%以上が該当した。

⑤視野の広がり

<視野の広がり>という1つの下位カテゴリで構成された。全ての様態で、該当者は2, 3人で、目立つ特徴は見出されなかった。

⑥主体性の重視

<主体性の尊重>、<人生の中での職業の位置づけ>、<他者を通しての自己理解>の下位カテゴリを含む。成熟群において80%以上の対象者にみられた。未熟群では、該当者はなかった。

⑦自己信頼

<自己信頼>という1つの下位カテゴリで構成された。全ての様態で、該当者は3人以下であり、目立つ特徴は見出されなかった。

⑧我の固執

＜我を通す＞，＜他者影響の否認＞，＜親は頼らない＞の下位カテゴリを含む。「個」優位群と未熟群において，80%以上の対象者にみられた。下位カテゴリをみると，未熟群では，＜親は頼らない＞に6名中4名が該当した。

⑨他者信頼

＜他者への信頼＞，＜他者からの一押し＞，＜見守られ，支えられ＞の下位カテゴリを含む。全ての様態で半数以上の対象者にみられた。特に，成熟群では全員が該当した。「個」優位群においても，6名中4名にみられた。下位カテゴリをみると，成熟群では，特に＜見守られ，支えられ＞への該当者が多くみられた。

⑩他者からの影響

＜流される＞，＜他者依存＞，＜親に左右される＞，＜他者との比較による焦り＞，＜憧れ＞の5つの下位カテゴリを含む。「関係性」優位群，「個」優位群，未熟群において80%以上の対象者にみられた。下位カテゴリをみると，「関係性」優位群では＜流される＞に80%以上の対象者がみられた。

⑪確認

＜再確認＞，＜揺り戻し＞，＜再吟味＞の下位カテゴリを含む。成熟群で全員にみられた。未熟群では，該当者はなかった。

4. 考察

様態ごとに，進路選択に関する語りにみられる特徴を以下に記述した。なお，本研究では，各様態の特徴を，他の様態との比較ではなく，その様態に多くみられたカテゴリから検討した。従って，本研究で示唆された各様態の特徴は，その様態のみにみられる特徴とは限らない。また，

様態間で同じカテゴリがみられた場合も、進路選択過程のどの時点でみられるかに相違が認められた。

(1) 成熟群の進路選択に関する語りにみられる特徴

成熟群では、「積極的な関与」、「停滞」、「自己分析」、「主体性の重視」、「他者信頼」、「確認」に、6名中5名以上が該当した。全ての様態にみられた「停滞」、「自己分析」以外の、成熟群に特徴的であったカテゴリについて考察する。

「積極的な関与」は、入学当初と進路選択を進めた後の2回みられた。なお、未熟群においても、「積極的な関与」は対象者の80%以上が該当しているが、入学当初に1回みられるのみであった。成熟群の青年は、積極的に進路選択を進める中で、選択したものに対し、再度〈決意〉しく熱意〉を持って取り組むことが示唆された。「主体性の重視」は、他の様態ではほとんど該当者のなかったカテゴリである。成熟群の青年は、進路選択に対し自己の関与が高く、自分の考えや志向性を重視しようとする在り方が示された。Erikson (1967 岩瀬訳 1982) は、青年は“人生の道の一つを、自由なる同意をもって意思決定する機会を求める”と述べており、「主体性の重視」は、従来から指摘されてきた青年期の様相と一致する特徴と考えられる。また、「自分がどうなりたいかで色々選択している」(対象者 E) というような、できるかできないかではなく、したいかしたくないかという主体的な思考によって選択するという特徴は、若松 (1991) においても指摘されており、大学生の進路選択にみられる特徴である。さらに、「主体性の重視」が多くみられたことは、研究 2-1 で示された成熟群の特徴である、自尊感情得点の高さと類似した傾向を示す。「他者信頼」は、成熟群のみで多く該当し、〈他者への信頼〉と〈見守られ、支えられ〉に多く該当した。進路選択において、他者を信頼

し、自分が他者に支えられているという感覚を持っていることが示唆された。「確認」は、成熟群に特徴的にみられたカテゴリである。成熟群の青年は、＜再認識＞や＜揺り戻し＞、＜再吟味＞を体験し、その時点までに自分が行った選択を「確認」することが示された。

進路選択過程をみると (Figure 3-2), 入学当初の「積極的な関与」から、「他者信頼」に支えられながら「自己分析」を進め、「停滞」の時期を経て、再び「積極的な関与」へ、そして「主体性の重視」を経て、最終的に「確認」に至る過程が示唆された。成熟群に特徴的な「確認」に至るには、「主体性の重視」の状態を経ることが必要と考えられる。また、「主体性の重視」に至るには、「停滞」と行きつ戻りつしながら「自己分析」を進めることが重要であることが示唆された。

(2) 「関係性」優位群の進路選択に関する語りにみられる特徴

「関係性」優位群では、「停滞」、「自己分析」、「低自己関与」、「他者からの影響」に、5名中4名以上が該当した。全ての様態にみられた「停滞」、「自己分析」以外の、「関係性」優位群に特徴的であったカテゴリを中心に考察する。

「低自己関与」では、5名全員が該当しているが、下位カテゴリの該当者数はばらついていた。「他者からの影響」も5名全ての対象者が該当した。＜流される＞に4名、＜他者依存＞に3名が該当し、進路選択において他者の意見に影響を受け、流されがちであること、また、流されるだけではなく他者に対して依存心を持つことが示唆された。他者からの影響を受けやすいことに関しては、研究 2-2 で、対人関係の在り方の特徴にも見出されている。「関係性」優位群は、クラスタ分析の結果、「自律性」「見捨てられ不安」「自己定位」の因子得点が平均よりも高い（「見捨てられ不安」は、得点が高いほど見捨てられ不安を喚起されない

と解釈される) 様態であったが、研究 2-2 も含め、面接調査の結果からは、むしろ他者の存在や他者との関係に敏感であること、進路選択においては他者からの影響を受けていることが示された。「関係性」優位群の下位因子得点の高さは、他者との関係への敏感さと捉えた方が妥当である可能性が考えられる。また、全ての様態にみられたカテゴリではあるが、「停滞」では、＜混乱＞に 5 名中 3 名が該当した。進路選択において、「あれもこれも」(対象者 H)、「ぐちゃぐちゃに」(対象者 K) になりやすいことが推測され、進路を選択していく上で核となる個の部分が揺らぎやすい可能性が考えられる。

進路選択過程をみると (Figure 3-3)、入学当初は「低自己関与」の状態にあり、「停滞」と「他者からの影響」を循環し、「他者からの影響」から「自己分析」に至るものの、「他者からの影響」が継続して存在し、「停滞」に戻ることが示唆された。「他者からの影響」が継続して、または繰り返し語られることから、「関係性」優位群の青年は、他者との関係に敏感であること、そしてそれにより、進路選択が「停滞」の状況に留まる傾向にあることが示唆された。

(3) 「個」優位群の進路選択に関する語りにみられる特徴

「個」優位群では、「停滞」、「自己分析」、「低自己関与」、「私の固執」、「他者からの影響」に、6 名中 5 名以上が該当した。全ての様態にみられた「停滞」、「自己分析」以外の、「個」優位群に特徴的であったカテゴリについて考察する。

「低自己関与」には、6 名全ての対象者が該当した。＜漠然とした将来展望＞に 6 名、＜コミットできない＞と＜合理的判断＞にそれぞれ 3 名が該当した。従って、「個」優位群の青年は、進路選択になかなかコミットできず、合理的思考により選択を進め、具体的に将来を展望するこ

とは難しいと推測される。「私の固執」には、6名中5名の対象者が該当した。「意見を言われても変えられない」（対象者 O）、「あんまり外からの情報を取り込まず」（対象者 N）など、他者からの影響性を否認し、反発することで、個を提示する在り方が示された。これに関して、「停滞」の＜決めるのが怖い＞に2名該当したことから、自分が決定することにより他の道が閉ざされてしまうことへの不安を持つと推測され、個を主張しつつも、決定する段階では足踏みしてしまう、偽りの個の提示とも言える「個」優位群の在り方も示唆された。これは、研究 2-1 のクラスター分析の結果、未熟群とともに、「自律性」因子の得点が低かったことと類似した傾向を示す。「他者からの影響」では、「関係性」優位群、未熟群と比較して、＜流される＞の該当者が少なく、＜他者との比較による焦り＞に該当者が多かった。このことから、選択の内容ではなく進度において、他者の影響を受けやすいことが示唆された。

進路選択過程をみると（Figure 3-4）、入学当初の「低自己関与」から「停滞」に移行し、その後「他者からの影響」と「自己分析」を循環し、「私の固執」に至ることが示唆された。「関係性」優位群に比べ、「他者からの影響」は一時的なものであり、影響を取り込むというよりは、上述したように、他者に反発することで個を提示し、「私の固執」に至ることが推測される。

（4）未熟群の進路選択に関する語りにみられる特徴

未熟群では、「積極的な関与」、「停滞」、「自己分析」、「低自己関与」、「私の固執」、「他者からの影響」に、6名中5名以上が該当した。全ての様態にみられた「停滞」、「自己分析」以外の、未熟群に特徴的であったカテゴリについて考察する。

「積極的な関与」には5名が該当し、入学当初に多くみられた。成熟

群とは異なり、進路選択を経て再び「積極的な関与」に至ることは少ないと考えられる。一旦<決意>はするものの、行動に移すことはなく、偶発的な出来事により選択を進めようとし、当初の選択が最終的な決定にはならず、プロセスが停滞することが示唆された。「低自己関与」には、6名全ての対象者が該当した。<消極的選択>と<漠然とした将来展望>にそれぞれ4名以上該当しており、進路選択に対し、関与は低く将来展望も曖昧な状態にあることが示された。「私の固執」では、<親は頼らない>に最も多く該当していた。「個」優位群と同様、他者、特に親からの影響を否認していることが示唆された。研究2-2において、未熟群の特徴として不安定な家族関係が見出されており、進路選択においても、家族、特に親の存在は多様な意味で大きく、そのことに強く影響されていると考えられる。一方で、杉村(2001)では、多くの青年が、進路選択の過程で“両親の期待、欲求、圧力が顕わになった”と報告しており、親からの影響に対処できるようになることは、アイデンティティ発達において、重要な要素とも考えられる。「他者からの影響」では、<他者との比較による焦り>以外に該当者がみられた。上述したように、親からの影響を否認しつつも、一方では<親に左右される>に3名が該当しており、他者からの影響を受けやすいことが推測された。また、<他者との比較による焦り>の該当者がなかったことから、比較が可能なほど、他者と切り分けられた自己が意識されていない可能性も考えられる。なお、「主体性の重視」には該当者がおらず、研究2-1で示された未熟群の特徴である自尊感情の低さとの関連が示唆された。

進路選択過程をみると(Figure 3-5)、入学当初の「積極的な関与」は、一方向に「停滞」と「低自己関与」に向かい、「他者からの影響」を受けたり、「自己分析」を進めたりするものの、「私の固執」から「停滞」に

戻ることが示された。面接調査時点で「停滞」の状態にある対象者が6名中3名存在したことから、未熟群の青年は、「停滞」状況から抜け出しにくいことが推測された。また、「個」優位群のように個を提示し、維持することは難しく、「関係性」優位群とともに、「停滞」の状態にある青年が多いことが推測される。

以上より、進路選択に関する語りから得られたカテゴリの該当者数と、進路選択過程において、各様態の特徴が示唆された。

成熟群では、主体性を持って進路選択にコミットし、模索の過程で自己分析を進めるとともに他者からの支えを感じ、選択の確認に至ることが示唆された。「関係性」優位群では、進路選択の過程で、自己関与は低く、他者からの影響を受けやすく、明確な進路決定にまでは至っていないことが示唆された。「個」優位群では、進路選択過程が進む中で、個を提示し、反発の形で他者からの分離を試み、個人としての在り方を守ろうとすることが示唆された。未熟群では、入学時は高い関与を示すが、早期に停滞や関与の低い状態に移行し、個の提示や自己分析を試みるものの、他者からの影響も多分に受け、停滞した状態から抜け出しにくいことが示唆された。

なお、成熟群と未熟群においては、研究2-1でみられた各様態の数量的な特徴と類似した傾向が認められた。また、「関係性」優位群では、研究2-2の結果と同様に、他者との関係に敏感であることが示唆され、「個」優位群では、それとは逆に、個へのこだわりが強いという特徴を持つことが示唆された。このことから、4様態の特徴を「個」と「関係性」の2つの視点から整理すると、個人としての在り方の提示と他者からの影響性において、各様態が特徴づけられる可能性が示唆された。

以上のように4様態それぞれの特徴が示されたことから、研究2-2と

同様に，研究 1・2 までで作成した尺度の有用性と妥当性の一部が確認されたと考えられる。

第4章 総合考察

第1節 本研究の成果

1. 「個」と「関係性」から青年期のアイデンティティを測定する尺度の作成

本研究では、Franz & White (1985) の理論に基づき、青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉えることを試みた。Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデルの実証的検討のため、尺度を作成し、その有用性を示した。

まず、研究 1-1 において、「個」と「関係性」それぞれの項目を既存の尺度から収集し、尺度を構成した。因子分析の結果、青年期のアイデンティティにおける「個」と「関係性」を構成する要素が明らかになった。

「個」は、自己への信頼感を基盤に、将来展望や自律性の要素から構成され、「関係性」は、自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に、自他の相互性への気づきや関係の中での自己の定位の要素から構成されることが示された。

「個」の側面は、Erikson (1967 岩瀬訳 1982) によって記述されてきた青年の姿、例えば、“人生の道の一つを、自由なる同意をもって意思決定する機会を求める” と重なる内容と考えられる。本邦において、谷 (2001) は、青年期におけるアイデンティティの感覚そのものの尺度化に成功している。これに対し、本研究で作成した「個」尺度は、項目収集を段階ごとに行っており、青年期のアイデンティティ確立を、他の発達段階の課題の現れから明らかにした。両者を総合すると、谷 (2001) で扱われたようなアイデンティティ感覚は、自己信頼や将来展望、自律

性といったテーマの中で感じられやすいと考えられる。

一方、「関係性」の側面についても、以下の点で、過去の知見と一致する特徴が見出された。本研究で得られた「関係性」尺度の内容は、Erikson (1967 岩瀬訳 1982) の“すでに確立された活力的な力強さのゆえに、二人は、意識や言語や倫理の点ではじめて類似した存在となり、しかも成熟した成人としてのお互いの違いを率直に認め合う”という記述や青年期におけるアイデンティティ拡散の状態像の記述と共通する部分があると考えられる。例えば、一丸(1975)はアイデンティティ拡散状態の青年との心理面接を報告する中で、対人関係において“極端に離れてしまい孤立するか、逆に相手の中に埋没するかのどちらか”と述べており、これは、「自己定位」因子と重なる。

「関係性」の側面に関しては、これまで、アイデンティティ拡散の状態像を記述する中で、取り上げられることが多かった。そして、アイデンティティ達成の青年における「関係性」は、次の成人前期の課題である親密性への取り組みとして扱われることが多く(伊藤, 1983; 高橋, 1988 など)、青年期に限ったアイデンティティ形成における「関係性」の側面には、あまり光が当てられてこなかった。しかし、本研究では、青年期における「関係性」の側面の内容を実証的に検討し、青年期特有の「関係性」の構造や特徴を明らかにした。本研究で、「自己定位」という成人前期の課題を反映する項目を多く含む因子が抽出されたことは、青年期と成人前期の連続性を示唆する。つまり、本研究で明らかになった青年期における「関係性」の状態は、親密性に先行すると考えられ、発達の観点からも理論に沿うものである。

なお、「個」尺度と「関係性」尺度ともに、乳児期(第I段階)と成人前期(第VI段階)の課題を反映する項目が多く採用された。自他への信

頼感は、青年期のアイデンティティ発達を支える基盤であり、また、将来に向かう取り組みや、別個の存在として他者と親密な関係を築くことも、青年期のアイデンティティを構成する重要な要素であると考えられる。この点については、本研究では、青年期の中でも特に大学生を対象に調査を行ったため、成人前期の要素も含まれた可能性もある。

研究 1-2 では、作成した尺度の信頼性と妥当性の一部を検討した。因子としてのまとまりと、アイデンティティを測定する尺度としての妥当性が示され、実証研究において、使用に耐えうる範囲のものと考えられた。

また、研究 2-1 で、作成した尺度を用いてアイデンティティ様態を抽出し、研究 2-2、研究 3 で面接調査を行ったところ、4 様態それぞれの特徴が見出されたことから、本研究で作成した尺度の有用性が示唆された。同時に、「個」と「関係性」が、青年のアイデンティティの多様性を捉えることが可能な視点であることも示されたと考えられる。「個」と「関係性」からのアイデンティティ理解は、これまで主に理論研究において、その重要性が示唆されてきたが、本研究ではそれを実証的に検討し、有用性を示した。

また、研究 1-2 で、作成した尺度について信頼性や他の概念との関連、尺度間の相関を検討したところ、青年期においては「個」の方が「関係性」よりも成熟が進み、安定している可能性が考えられた。つまり、「個」と「関係性」の視点自体も発達の側面を有する概念と考えられ、青年期以外の他の発達段階における「個」と「関係性」の視点とは異なることが予測される。例えば、岡本（1997）が示した成人期のアイデンティティにおける「個」と「関係性」は、職業や家庭を持たない青年期に比べ、社会的な役割により規定される側面が強い。青年期においては、まずは

個人として確立することが求められるため、「関係性」の側面は、「個」の発達に伴うことが予測される。これは、尺度間の相関が強かったことや、両尺度の項目を合わせて因子分析を行った結果、「自律性」因子と「自己定位」因子が混ざり合ったこと、また研究 2-1 のクラスタ分析で、「個」尺度と「関係性」尺度の下位因子が混じり合っただけでクラスタが形成されたことなどからも支持される。

2. 「個」と「関係性」の視点から得られた 4 つのアイデンティティ様態の特徴

Franz & White (1985) に基づき作成した尺度を用いて、研究 2-1 において、アイデンティティ様態を抽出し、研究 2-2 と研究 3 で、各様態の特徴を仮説的に示した。対人関係の在り方と対人関係上の困難（研究 2-2）、進路選択（研究 3）に関する語りから得られた各様態の特徴をまとめたものを、Table 4-1 に示した。

結果を総合すると、各様態の特徴は、以下のようにまとめられた。成熟群の青年は、対人関係においても進路選択への取り組みにおいても、明確な主体があり、他者をはじめとする外界に働きかけることができると考えられた。「関係性」優位群の青年は、主体が薄く、自己が他から切り離されていない状態にあると考えられた。「個」優位群の青年は、外界からのネガティブな影響に反応する際に主体が生じる傾向にあり、一見主体性を持ち主張しているかにみえるが、自己決定がなされにくいと考えられた。未熟群の青年は、主体が脆弱で、切り分けられた外界の認識が乏しく、中には、外界と関わるのが困難な青年も存在すると考えられた。

以上のように、「個」と「関係性」の視点から青年のアイデンティティ

Table 4-1
対人関係と進路選択に関する語りにみられる4様態の特徴

様態	対人関係の在り方	対人関係上の困難	進路選択過程
成熟群	基本的信頼感に支えられた、相互独立的な他者認識を持つ。幅広い他者への肯定、安心感を持つ。対人関係上抱くアンビバレントな感情を認識し、言語化できる。	内容：他者への積極的な働きかけの中で生じる困難。具体的な関わり方。 対処：努力、納得 積極的に働きかけ、時間経過にも伴って、困難な出来事を捉え直す。	入学当初から自己の関与は高く、他者信頼に支えられながら自己分析を進める。停滞の時期を経て、再び関与を高め、主体性を重視して決定し、最終的に決定を確認する。
「関係性」優位群	内的には自他の融合感が強く、他者からの被影響性も高い。対人関係を知的に考える傾向。結果的に表面的な対人関係。限定的な他者との親密な関係。	内容・他者との距離や他者からの「干渉」など、対人関係そのもの。 対処：諦め 困難の解決よりも、その場の関係維持を重視。	入学当初、自己の関与は低く、継続的に他者からの影響を受け、停滞状況が続く。他者から影響を受け、自己分析を行うものの、核となる個の部分は揺らぎやすく、停滞状態に戻る。
「個」優位群	対人関係の広がりを目指し、対人関係を道具的に捉える。集団の中では、個人としての存在を主張することはない。意図的に関係を浅いものにとどめ、他者からの侵入を積極的に回避。基盤としての信頼感、成熟群に次ぐ。	内容：他者からの具体的なネガティブな関わりと、集団対個人の関係で生じる困難。 対処：回避 困難を扱うことを避け、その場の関わりから撤退する。	入学当初、自己の関与は低く、さらに合理的に選択しようとし、停滞状態に移行。単発的に他者からの影響を受け、多くの場合、影響を否認し、他者に反発して個を提示して進路選択を進めようとする。しかし、決定段階になると足踏み。
未熟群	他者と関わることへの、強い不安や拒否感を持ち、関係から撤退。他者から分離した存在としての自己感覚が乏しく、他者の行動を被害的に捉えがち。不安定な家族関係の中に埋没。特定の他者との信頼関係は、家族の代理としての機能や青年期以前の対人関係の特徴を持つ。	内容：相手からの具体的なネガティブな被侵襲感を伴う働きかけそのもの 対処：回避、諦め 解決に向かう対処法をとることは難しく、困難を回避したり、何もせずその場に居続けたりする。	入学当初は関与が高いが、将来展望は曖昧で、早期に関与は低下し、停滞に移行する。他者、特に親からの影響を受けやすく、反発したり、影響自体を否認したり。自己分析も進められるが、どちらも私の固執となり、結局、停滞状態に戻る。

様態を分類し、4様態それぞれの特徴を質的に検討したところ、主体の在り様や外界への関わりなどにおいて、異なる状態像が得られた。このことは、研究1-2までで作成した尺度の有用性と妥当性の一部を支持する。つまり、異なる特徴を抽出する基準として、作成した尺度が有用であり、さらには、尺度作成の前提にある「個」と「関係性」の視点も有益なものであることが示唆される。

研究1-2までと研究2-2、研究3の結果を合わせると、従来のアイデ

ンティティの確立した状態像と、本研究で想定した「個」と「関係性」の視点を加えた際のアイデンティティの確立した状態像とに、若干の相違があることが予測される。具体的には、本研究で抽出された「個」優位群が、従来のアイデンティティ尺度ではアイデンティティ達成度が高いとされるならば、対人関係や進路選択において、成熟した在り方を示すはずである。しかし、本研究では、研究 2-2 と研究 3 の結果、成熟群と比較した場合に、「個」優位群の未熟な面も認められた。このことは、従来「個」を中心に捉えられてきたアイデンティティ観に、「個」と「関係性」の視点を導入したことで、より詳細にアイデンティティ達成の状態像が描き出されたことを示唆する。これまでアイデンティティ達成とされてきたが、実は「個」優位な青年たちの状態像を、「関係性」の視点からも検討を加えることでより明確に示すことが可能と考えられる。本研究の結果からは、「個」優位群の青年の示す主体性が、他者からの影響を受けて提示されたものでもあることが示唆された。青年が「個」を確立していく背景にある、他者の存在や他者からの影響を考慮することに、本研究の知見が役立てられると考えられる。

なお、本研究では、既存のアイデンティティ尺度と本研究で作成した尺度との対比は、実証的検討としては行っていない。この点は、今後さらに検討を加える必要がある。

本研究では、Franz & White (1985) に依拠したため、「個」と「関係性」の定義は、第 1 章で述べたように、“個体化経路”と“アタッチメント経路”に準拠したが、ここで、本研究で得られた結果から、改めて「個」と「関係性」の概念について、推察されることを以下に述べる。

まず、4 様態の特徴を整理したところ、「個」の側面は、自他の境を明確にし、個人としての在り方を保つ傾向として表れ、「関係性」の側面は、

他者の存在や他者との関係への敏感さとして表れることが示唆された。このことから推測可能なこととして、「個」は、個人としての在り方を模索する中で、「関係性」は、他者との関係の中で、アイデンティティ形成を進める特徴と考えられた。すなわち、「個」と「関係性」は、アイデンティティ形成における取り組み方を反映する可能性が示唆された。この点は、今後、「個」と「関係性」の概念自体を検討していく上で、考慮していくべき部分と考えられる。

第2節 本研究の限界と今後の課題

1. 尺度作成上の課題

本研究では、Franz & White (1985) の理論を実証的に検討することを目的とし、「個」尺度と「関係性」尺度を構成した。尺度作成に関して、次の課題が残された。

まず、因子分析では、「関係性」尺度において、信頼性係数の低い下位因子が存在した。尺度全体の信頼性係数が十分な値を示したため、本研究では、両尺度とも一応の信頼性を有すると結論付けたが、下位因子の信頼性については、今後も引き続き検討していく必要がある。

信頼性の検討とともに、「個」尺度と「関係性」尺度それぞれの妥当性の検討も引き続き必要と考えられる。本研究では、妥当性の検討に同一性混乱尺度、特性不安尺度、自尊感情尺度を用いたため、アイデンティティを測定する尺度としての妥当性の検討にとどまっている。今後は、「個」と「関係性」それぞれと関連があることが予想される複数の変数との関連を検討し、妥当性を確認していくことが求められる。それにより、「個」と「関係性」の概念の精緻化を進めることにも寄与すると考え

られる。なお、本研究では、信頼感尺度との関連を検討し、「個」は「対自的信頼感」と、「関係性」は「対他的信頼感」とより強い関連を持つことが示唆された。また、妥当性の検討で用いた自尊感情尺度との関連において、「個」の方が「関係性」よりも自尊感情との相関が高いことが示された。これにより、「個」の方が、より自己や自己概念と関連があることが推察されたが、それ以上の検討は行えていない。本研究では、両尺度間に相関が認められており、「個」と「関係性」それぞれの特徴を検討することは必要と考えられる。

また、本研究では、研究 1-1 において、再検査法を実施したが、対象者が少数であったことや再検査までの期間がやや長かったことなど、いくつか課題が残された。上述の下位因子の信頼性の検討や妥当性の検討を行う中で、再検査信頼性についても、再度検討することが必要と考えられる。

対象者に関しては、本研究で調査対象とした青年は、全て大学生であり、一般的に言われる青年期の一部についての検討であった点が課題として残る。また、質問紙調査を実施した大学も計 3 大学であり、偏りがあることは否めない。今後、大学生だけではなく、高校生や一般の青年も対象に調査を行うこと、できるだけ偏りのない対象者の抽出を行うことなどが望まれる。

さらに、下位因子の信頼性のほか、再検査信頼性や他の概念との関連の検討などから、「個」尺度の方が「関係性」尺度より安定していることが示唆され、上述したように、青年期においては、「個」が「関係性」に先立つ可能性が考えられた。そして、今後は「個」と「関係性」の視点の発達の側面の検討を行う必要があると述べた。「個」と「関係性」の視点からアイデンティティを捉えたこれまでの研究は、成人期と青年期を

対象としたものがほとんどである。今後は、対象を拡大し、発達段階ごとの「個」と「関係性」の特徴を明らかにするとともに、その発達過程を明らかにしていくことも求められる。

2. 面接調査における課題

まず、面接調査に先立って行った研究 2-1 において、本研究で抽出された 4 様態の特徴の検討が不十分であった点が課題として挙げられる。クラスタ分析の結果、「個」と「関係性」の視点から 4 つのアイデンティティ様態が抽出されたが、当初の想定とは異なり、「個」と「関係性」を明確な 2 軸として捉えることはできなかった。つまり、「関係性」優位群と「個」優位群という、一方の下位因子得点がより高い様態が抽出されたが、一方だけが優位という結果は得られず、それぞれの様態が、明確な「関係性」優位、「個」優位の特徴を有するかどうかには疑問が残された。本研究では、下位因子得点の様相から、この 2 様態について解釈を試みたが、特徴を正確に記述することには限界があったと考えられる。今後、他の変数との関連の検討や各様態の質的検討を重ねることで、「関係性」優位群と「個」優位群の、単純に「関係性」優位、「個」優位ではない特徴を明らかにしていくことが求められる。

研究 2-2 と研究 3 においては、調査対象者に関していくつかの課題が残された。第一に、対象者が少数であったことが挙げられる。1 つの様態につき研究 2-2 では 5 人、研究 3 では 5 人もしくは 6 人の対象者の語りから結果を導いており、結果の普遍性については、今後、対象者を増やしさらに検討を進めることが重要である。また、その際に、本研究で統制が不十分であった、性別や学年についても考慮して対象者を抽出する必要がある。特に、本研究においては、研究 3 で対象者の偏りが大き

かった可能性がある。面接調査の依頼に応じた 23 名のうち、19 名が女性であったため、研究 3 の結果は、性差を反映している可能性は否めない。また、質問紙調査を通じて面接調査への協力を募った場合、協力に応じたこと自体が、対象者の特徴であることも考えられる。面接調査の対象者の、質問紙調査の結果での位置づけ（分類された様態の下位因子得点の平均値と対象者の平均値の差など）も、できる限り考慮する必要がある。

研究 2-2 では、対人関係に焦点を当て、調査の実施と分析の際には家族や友人など、対象の属性を考慮せず他者として扱った。しかし、これまでのアイデンティティ研究や青年期を対象とした研究においては、それぞれの対象に限定化しているものも多々みられ、関係を持つ他者をより詳細に分類し、検討を重ねることも必要と考えられる。特に大学生を対象とする場合には、家族から物理的に離れることの影響は大きいと考えられ、本研究においてもこのことは示唆された。関係を持つ他者が誰であるかによって、青年期のアイデンティティが対人関係の中でどのように表れるかにも違いがあることが予測される。

また、本研究で用いた質的分析の方法は、現在のところ確立されたものとは言いがたく、本研究で得られたカテゴリ等の結果は、仮説モデルにとどまる。今後、質的分析をさらに進めると同時に、質的研究で得られた知見を数量的に検討し、モデルの妥当性と信頼性を繰り返し確認し、より普遍的なものにしていくことが重要な課題である。

近年、質的研究の手法が確立されつつあるが、本研究で取り上げたような、対象者の心理状態、つまり対象者に“内在する意味”（大谷・無藤・サトウ，2005）を質的データから取り出す研究方法は、未だ確立されていない。しかし、こうした視点に立つ研究から得られた知見は、心理臨

床の場とも直結しやすく、直接的な援助や教育の場への応用可能性が高まると考えられる。今後も、研究の目的に即して、質的データを分析する適切な方法を選択すること、またその方法の確立を目指すことが求められる。

最後に、研究全体において、発達の観点と文化的観点からの課題が残った。まず、発達の観点に関しては、本研究では4様態の発達の變化の検討については、取り組むことができなかった。本研究では、新たな視点である「個」と「関係性」をまずは精緻化することを目指したため、一時点の対象者の状態の検討にとどまっている。Franz & White (1985)も述べるように、「個」と「関係性」が相互に関連しながら発達するという前提に立てば、「個」と「関係性」の視点自体の発達の變化とともに、本研究で抽出された4様態の變化についても、縦断研究などの手法を用いて検討する必要がある。例えば、「個」優位群と「関係性」優位群は、どちらが先に現われ、どちらが成熟群につながっていくのか、もしくは、「個」優位か「関係性」優位かは、発達の變化よりも、個人差の要因が大きいのかなど、残された検討課題は多い。

次に、文化的観点については、本研究で依拠した Franz & White (1985)が欧米の研究者により提唱されたモデルであり、日本において、どの程度適用可能かという問題が残った。「関係性」の視点の導入は、日本文化においては、それほど不自然さを感じないことと考えられる。Franz & White (1985)が提唱した“アタッチメント経路”の課題が、どの程度文化差を反映しないものであるのかという点は、本研究の結果からだけでは言及はできない。本研究の発展可能性の1つとして、文化差比較などの検討も、理論の精緻化のためには有用と考えられる。

引用文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. In J. Kroger(Ed.), *Discussions on ego identity*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 75-99.
- Bell, M. D., Billington, R., & Becker, B. (1986). A scale for the assessment of object relations: Reliability, validity, and factorial invariance. *Journal of Clinical Psychology*, 42, 733-741.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.
(ブロス, P. 野沢栄司(訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房)
- Brandt, D. E. (1977). Separation and identity in adolescence: Erikson and Mahler – some similarities. *Contemporary Psychoanalysis*, 13, 507-518.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳) (1977/1980). 幼児期と社会 I・II みすず書房)
- Erikson, E. H. (1967). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 岩瀬庸理(訳) (1982). アイデンティティ—青年と危機— 金沢文庫)
- Franz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in

personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.

藤崎亜由子・倉田直美・麻生 武 (2007). 幼児はロボット犬をどう理解するか—発話型ロボットと行動型ロボットの比較から— 発達心理学研究, 18, 62-77.

Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge MA: Harvard University Press.

(ギリガン, C. 岩男寿美子(監訳) (1986). もう一つの声—男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ— 川島書店)

Halpen, T. L. (1993). A constructive-developmental approach to women's identity formation in early adulthood: A comparison of two developmental theories. *Dissertation Abstracts International*, 55(3-B), 1201. (Abstract)

平石賢二 (1999). 青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する研究 三重大学教育学部研究紀要 教育科学, 50, 191-204.

Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. (1979). Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.

一丸藤太郎 (1975). 自我同一性混乱の臨床像に関する一考察—臨床心理学的観点からみた青年期の諸問題(第三報)— 広島大学教育学部紀要 第一部, 24, 181-191.

伊藤研一 (1983). 青年期における親密さ対孤立の危機と自我同一性 東京大学教育学部紀要, 23, 325-330.

- 伊藤美奈子・宮下一博(編著) (2004). 荒れる青少年の心 傷つけ傷つ
く青少年の心 北大路書房
- 井梅由美子 (2001). 青年期・成人期を対象とした対象関係尺度作成の
試み 人間文化論叢(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科), 4,
311-320.
- Jacobson, E. (1964). *The self and the object world*. New York:
International Universities Press.
- (ジェイコブソン, E. 伊藤洸(訳) (1981). 自己と対象世界 現代
精神分析双書第2期第6巻 岩崎学術出版社)
- Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation
in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Josselson, R. L. (1994). Identity and relatedness in life cycle. In H. A.
Bosma, T. L. G. Graafsma, H. D. Grotevant, & D. J. de Levita
(Eds.), *Identity and development: An interdisciplinary approach*.
Thousand Oaks: Sage. pp. 81-102.
- 金子俊子 (1995). 青年期における他者との関係のしかたと自己同一
性 発達心理学研究, 6, 41-47.
- 加藤 厚 (1989). 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的
研究 心理学研究, 60, 184-187.
- 川島大輔 (2008). 老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーに
みる死の意味づけ 質的心理学研究, 7, 157-180.
- 小嶋由香 (2004). 脊椎損傷者の障害受容過程—受傷時の発達段階と
の関連から— 心理臨床学研究, 22, 417-428.
- 前盛ひとみ・岡本祐子 (2008). 重症心身障害児の母親における障害受
容過程と子どもの死に対する捉え方との関連—母子分離の視点から

— 心理臨床学研究, 26, 171-183.

Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books.

(マラー, M. S., パイン, F., & バーグマン, A. 高橋雅士・織田正美・浜畑 紀(訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生 黎明書房)

Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.

宮下一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-258.

森田 慎 (1998). 青年期の自立をめぐる「さびしさ」の体験の意味について—心理的融合と分離不安— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 2, 59-71.

長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.

中西信男・佐方哲雄 (2001). EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査— 上里一郎(編) 心理アセスメントハンドブック 第2版 西村書店 pp. 365-376.

中尾達馬・加藤和生 (2002). Brennan et al. (1998)の成人愛着スタイル尺度の日本語版の作成とその妥当性の検証 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 300.

中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.

落合良行・竹中一平 (2004). 青年期の友人関係研究の展望—1985年

- 以降の研究を対象として— 筑波大学心理学研究, 28, 55-67.
- 大谷 尚・無藤 隆・サトウタツヤ (2005). 質的心理学が切り開く地平—日本質的心理学学会設立集会「シンポジウム」— 質的心理学研究, 4, 16-38.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47, 248-258.
- 岡本祐子 (1986). 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究, 34, 352-358.
- 岡本祐子 (1995). 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について—理論的展望と生活レベルに見られる 2, 3 の問題— 広島大学教育学部紀要 第二部, 44, 145-154.
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味— ナカニシヤ出版
- 岡本祐子(編著) (1999). 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房
- 岡本祐子(編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房
- 小此木啓吾 (2002). 現代の精神分析—フロイトからフロイト以後へ— 講談社

- Rasmussen, J. E. (1961). The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-825.
- Rosenthal, D. A. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for Erikson's stage of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 525-537.
- 西條剛央 (2004). 構造構成的質的心理学の理論的射程—やまだ(2002)と菅村(2003)の提言を踏まえて— 質的心理学研究, 3, 173-179.
- Selman, R. L. (1981). The development of interpersonal competence: The role of understanding in conduct. *Developmental Review*, 1, 401-422.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成—関係性の観点からのとらえ直し— 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 杉村和美 (1999). 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子(編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房 pp. 55-86.
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求—2年間の変化とその要因— 発達心理学研究, 12, 87-98.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton.

(サリバン, H. S. 中井久夫・高木敬三・宮崎隆吉・鑪幹八郎(訳))

- (1990). 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- 砂田良一 (1979). 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.
- 多川則子 (2001). 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響—青年期の恋愛関係と友人関係— 名古屋大学大学院教育発達学研究科紀要 心理発達科学, 48, 374-375.
- 高橋裕行 (1988). 同一性と親密性の危機の解決における性差—自我同一性地位の Rusbussen の EIS による併存的妥当性の検討— 教育心理学研究, 36, 210-219.
- 谷 冬彦 (1996). 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第 60 回大会発表論文集, 310.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 鑓幹八郎 (1974). 自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察 広島大学教育学部紀要 第一部, 23, 329-342.
- 鑓幹八郎・山本 力・宮下一博(編著) (1984). アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版
- 鑓幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編著) (1995a). アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版
- 鑓幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編著) (1995b). アイデンティティ研究の展望Ⅲ ナカニシヤ出版
- 鑓幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編著) (1997). アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 鑓幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編著) (1998). アイデンティティ研究の展望Ⅴ-1 ナカニシヤ出版

- 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編著) (1999). アイデンティティ研究の展望V-2 ナカニシヤ出版
- 鑪幹八郎・岡本祐子・宮下一博(編著) (2002). アイデンティティ研究の展望VI ナカニシヤ出版
- 山岸明子 (2004). 女子青年がもつ現在の対人的枠組みと生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連 発達心理学研究, 15, 195-206.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 若松養亮 (1991). 大学生の進路選択過程における能力・適性の判断について 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 471-472.
- 渡邊照美・岡本祐子 (2006). 身近な他者との死別を通じた人格的発達—がんで近親者を亡くされた方への面接調査から— 質的心理学研究, 5, 99-120.
- Waterman, A. S. (1982). Identity development from adolescence to adulthood: An extention of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, 18, 341-358.

付録

* 付録として、「個」尺度と「関係性」尺度の、教示を含めた質問紙形式の資料を付録として添付した。

- 1 「個」尺度
- 2 「関係性」尺度

1

以下に、いろいろな経験や性質、好みなどについての文章を挙げています。それぞれの文章があなたにどの程度当てはまるかを考えて、「4. よくあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」までの4つのうち、一番よくあてはまるところの数字を○で囲んで下さい。

正しい回答や間違った回答はありませんので、あまり考えこまずに、最初に思った通りをお答えください。

		よくあてはまる	かなりあてはまる	少しあてはまる	全くあてはまらない
1	自分の考えに従って行動することに自信をもっている	4	3	2	1
2	私は、決断する力が弱い	4	3	2	1
3	将来の職業（専業主婦も含む）について、具体的に考えている	4	3	2	1
4	私は、きつとうまく人生を乗り越えられるであろう	4	3	2	1
5	私は、誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしている	4	3	2	1
6	私は、自分が役に立つ人間であると思う	4	3	2	1
7	私は、自分が好きだし、自分に誇りをもっている	4	3	2	1
8	私は、多くのことに対して自信を持って取り組むことができる	4	3	2	1
9	私は、自分の判断に自信がない	4	3	2	1
10	私は、目的を達成しようがんばっている	4	3	2	1
11	人生設計をきちんと立てて、今後の生活を送っていきたいと考えている	4	3	2	1
12	何かしたあとで、それが正しかったかどうか心配になることが多い	4	3	2	1
13	私は、物事を完成させるのが苦手である	4	3	2	1
14	将来自分が何をしたいかという確信や目標を持っている	4	3	2	1
15	今後、どんな風に生活していくかを考えている	4	3	2	1

2

以下に、他者との関係に関する文章を挙げています。それぞれの文章があなたにどの程度当てはまるかを考えて、「4. よくあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」までの4つのうち、一番よくあてはまるところの数字を○で囲んで下さい。

正しい回答や間違った回答はありませんので、あまり考え込まずに、最初に思った通りをお答え下さい。

		よくあてはまる	かなりあてはまる	少しあてはまる	全くあてはまらない
1	私は批判に対して敏感で傷つきやすい	4	3	2	1
2	私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている	4	3	2	1
3	これまで私が築いてきた人間関係は、私にとって価値のあるものである	4	3	2	1
4	私は時々、周囲の人や物事から取り残されて、一人ぼっちであるように感じる	4	3	2	1
5	私がこれまでに関わりをもった人々は、私により影響を与えてくれた	4	3	2	1
6	これまでに出会った人々によって、今の自分が支えられていると感じる	4	3	2	1
7	自分が困ったときには、周りの人々からの援助が期待できる	4	3	2	1
8	他者と一緒に何か物事を行うとき、私はよく受身的になってしまう	4	3	2	1
9	友人関係は、比較的安定していると思う	4	3	2	1
10	人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと、自分の意見を主張するのにためらいを感じる	4	3	2	1
11	周囲の人々によって自分が支えられていると感じる	4	3	2	1
12	集団内で、私はちゅうちょすることなく、首から正しいと思うことを表明できる	4	3	2	1
13	人から見捨てられたのではないかと心配になることがある	4	3	2	1

謝 辞

学位論文を作成するにあたり、数多くの方々に、ご指導、ご協力を賜りました。

主任指導教員である、広島大学大学院教育学研究科の岡本祐子先生には、修士課程に入学してから5年間、数え切れないほどのご指導を賜りました。先生の暖かいご指導のもと、のびのびと研究に打ち込めたことを、とても幸せに思います。心より、感謝申し上げます。

また、同研究科の前田健一先生、兒玉憲一先生には、副指導教員をお引き受けいただき、ご多忙の中、大変貴重なご意見、ご示唆を賜りました。先生方からご助言をいただき、研究をより多角的に見つめ直すことができました。ありがとうございました。

同研究科心理学講座の深田博己先生、宮谷真人先生、中條和光先生、湯澤正通先生、杉村伸一郎先生、石田弓先生、松下姫歌先生、森田愛子先生、大塚泰正先生、樋口匡貴先生には、審査資料の査読などを通して、多くの有意義なご指摘、ご助言をいただきました。様々な視点からご意見をいただき、研究に携わる者として、視野を広げることができました。ありがとうございました。

同輩、先輩、後輩の皆さんには、これまで様々な形で支えていただきました。ともに学び、悩み、そして達成できた喜びを分かち合えたことは、何物にも代えがたい私の宝物です。ありがとうございました。

また、本研究にご協力いただきました数多くの学生の皆様には、調査を通して、貴重な経験を語っていただきました。実際の声に触れることで、研究に対する姿勢を振り返り、私自身が成長できたと感じています。ありがとうございました。

最後に、これまでの学生生活を、陰ながら支えてくれた家族に、心より感謝いたします。

平成 21 年 1 月 23 日

山田 みき